

342
1006

五
拾
八
年
史

5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20

始



特232
877



拾
八
年
史



序 文

題して、「五拾八年史」と云ふも、そんな體裁の整つたものではない。唯臚げなる記憶をたどり、過去五拾八年を、思ひのまゝに綴つたまでのもので、謂はゞ體よき、雜記帳に過ぎない。若し此雜記帳が、「凡人長谷川鉄次郎」を知る、何等かの参考ともならば、本懐の至りである。

僕は此處三拾五年を軍人として過した。戦争にも行けば、火藥の製造にも従事し、又造兵廠の要職にも就いた。然し何事も大勢順應で、細事に拘泥せず、頗る平凡に送つて來た。幸ひ天與の痴鈍は、僕をして今日あらしめ、其恵まれたる幸運に對し、只々感激するのみである。

今や第二世は學を卒へ、一家を構へてゐる。のみならず、僕の公的生涯は、已に終局したので、僕一代の仕事は、先づ終つたと見て差支はない。僕は今江古田の里

に、悠々自適して保養に努めてゐるが、今こそ絶好の機会と思ひ、靜かに昔を偲び、本稿に筆を執ることにした。

本書は専ら、直系卑屬の爲めに書いたもので、聊か教訓がましいことや、雑駁なる感想をも織り込んだ積りである。従つて内容は、最もらしい處もあり、俗悪なる處もあり、又家事に關する裏向きの處もあるので、一般として興味甚だ尠なからうと思ふ。然るに敢て之を辱知の各位に頒たんとする所以は、一つに偽らざる僕の全貌を披瀝し、以て多年の恩誼に報ひんとする微意に外ならない、

幸ひに、無禮を咎むることなく、御高覽の榮を賜はらば、光榮之に過ぎない。

昭和十一年十一月二十三日

江古田の里に於て

長谷川鉄次郎識

五拾八年史 目次

序 文	一
第一 我家の由來	一
其一 本 家	一
其二 分 家	三
其三 我 家	四
第二 我父母及兄	八
第三 我家族と、近親、知己及居住	二一
第四 幼 兒 時 代	二〇
第五 小學校時代	三三
第六 中學校時代	二六
其一 前 期	二七
其二 後 期	二九
目 次	一

第七 士官候補生時代……………三

第八 中、少尉時代……………三六

第九 日露戦争時代……………四四

 其一 青泥窪上陸まで……………四四

 其二 旅順攻撃参加……………五三

 其三 奉天附近の會戰及凱旋まで……………六九

第十 大尉時代……………八九

 其一 宇治時代……………九〇

 其二 板橋時代……………九四

 其三 岩鼻時代……………一〇四

第十一 目黒火薬製造所長時代……………一〇八

第十二 庶務課長と労働問題……………一四

第十三 火工廠課長・所長時代……………二三

第十四 陸軍造兵廠各部長時代……………二七

第十五 歐米視察旅行……………三六

 其一 訓令の要旨と一般經過の概要……………一六

 其二 各地の見聞と其行動……………一五

 其三 歐洲に關する所感……………一七

第十六 火工廠長時代……………一八

第十七 退職後閑居生活と時事問題……………一九

第十八 僕の心境と一家言……………二〇

第十九 経歴と兵籍……………二二

第二十 家族に對する將來の希望……………二四

第一、我家の由来

我家の遠祖は、誰であるか明瞭でないが、話の傳つてゐる處では、武士であつて、能州穴水より越中に入つたものだとのことである。これが子孫は、代々清水明にあつて、農を業としたが、市右工門の時代に至り、家督を弟に譲り、繩の内村に移住した。之が我家の本家第一代の祖で、今から大凡三百七、八十年前のことである。以下歴代の姓名及系統の大要を示す。

其一、本家 長谷川家

第一代 市右工門 清水明より移住し、天正十一年癸未十月十日死、法名、祐觀（今より三百五十四年前）

第二代 市右工門

第三代 市右工門

第四代 市右工門

第五代 市右工門

第六代 市右工門

第七代 市右工門 省略

第八代 市右工門

第九代 市右工門

第十代 市右右門

第十一代 市右工門

第十二代 市右工門

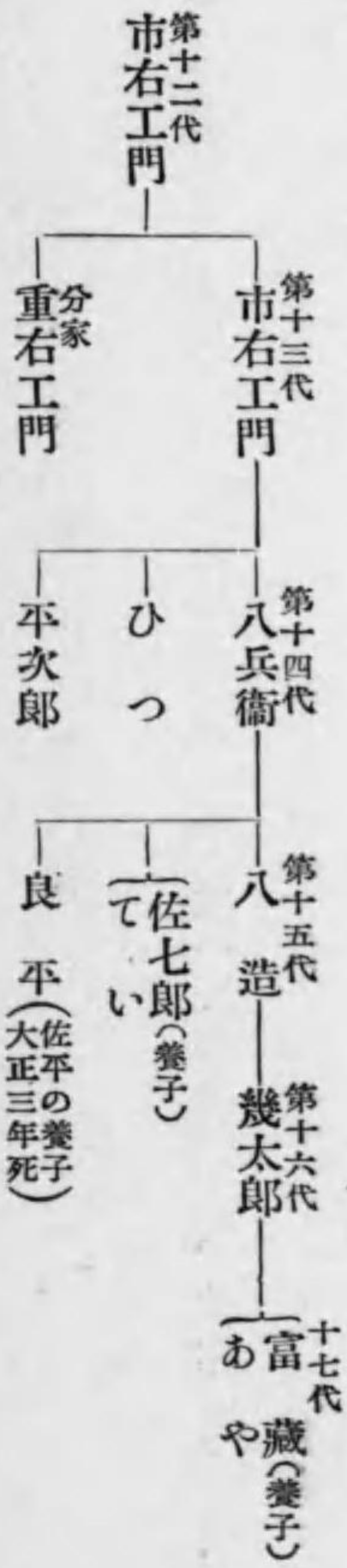
第十三代 市右工門 文政八年四月五日死

第十四代 八兵衛 明治七年八月十二日死、行年六十歳、妻は分家の娘「をと」

第十五代 八造 行年六十四歳

第十六代 幾太郎

第十七代 富藏



其二、分家 重右工門家

第一代 重右工門 本家第十三代市右工門の弟、幼名權六、嘉永五年六月二十八日死、行年八十四歳

妻 キヨ 南部尻村、野尻野新甚左工門の娘、安政六年六月二日死、行年七十九歳

第二代 重右工門 先代の長男、幼名權之丞、安政八年八月七日死、行年五十七歳、妻は本家の

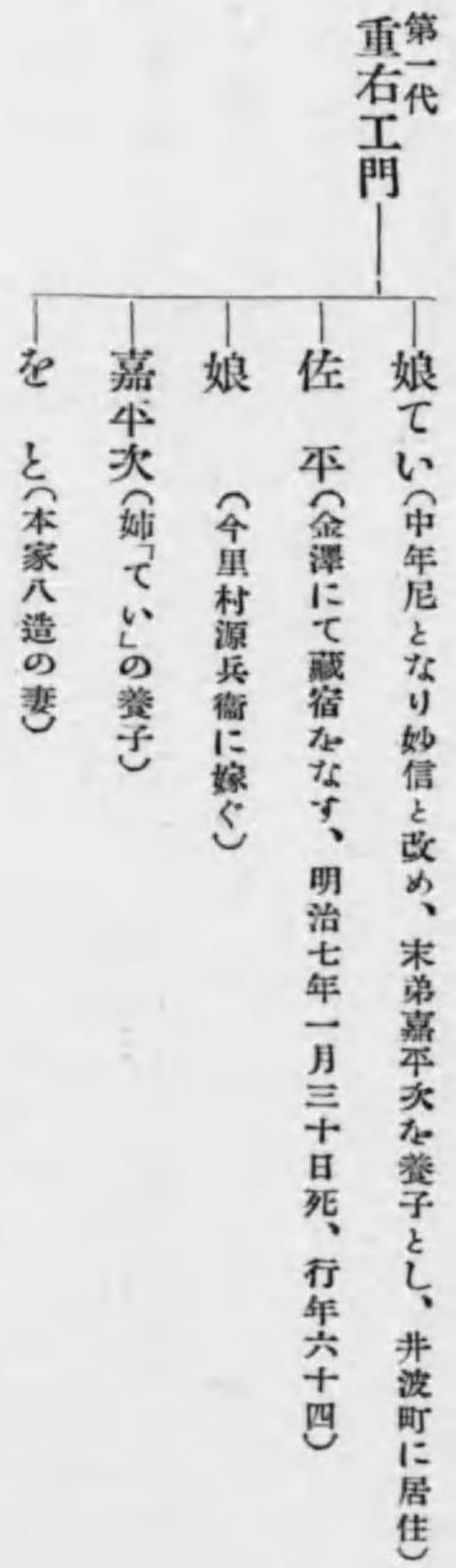
娘「ひつ」

第三代 十太郎 行年三十三歳

第四代 權太郎 中年にして僧となり「専了」と云ふ、明治九年二月六日死、行年七十二歳

第五代 顯正

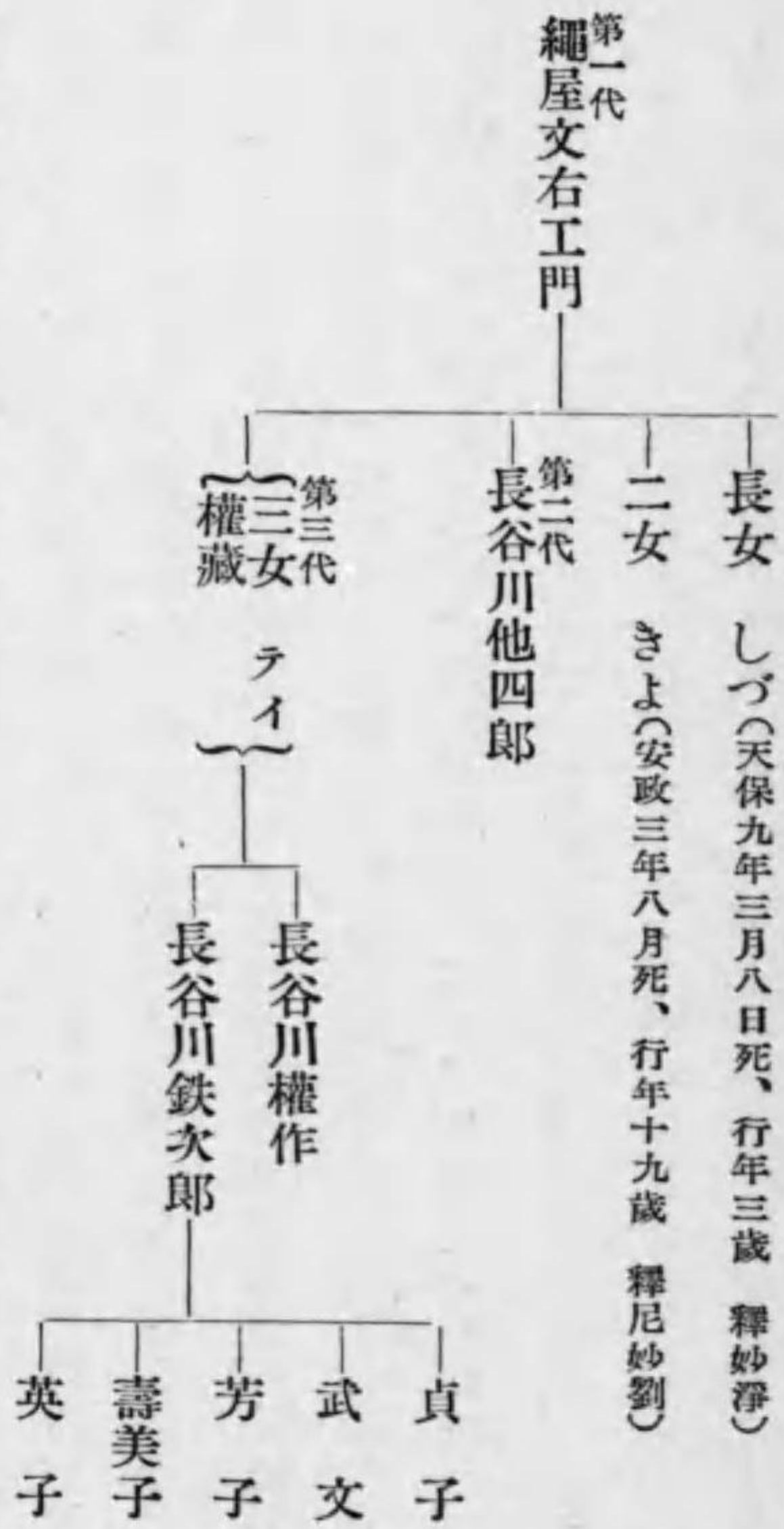




其三、我家の祖及系統

- 第一代 文右工門 幼名文吉、權藏、翁作と云ふ。法名、釋興教、文化二年八月生、明治元年十月十日死、行年六十四歳、分家第二重重右工門の弟
- 妻てつ 明治六年八月十四日死、行年五十三歳、釋尼妙闡、文化十二年十二月五日生
- 第二代 他四郎 明治四年五月三十日死、行年十九歳、法名、釋順教、嘉永六年生
- 第三代 權藏(父)養子、釋滿意本文通り
- 第四代 權作(兄)本文通り

(分家す) (明治十五年二月五日死) 釋、慶順
 長谷川文右工門 — 長谷川孝四郎 — 長谷川孝義
 (行年五十三歳)



祖父文右工門 (權藏と稱し、後翁作と云ふ) は、實に我家の開山である。祖父は文化元年、越中繩の内に生れ、志を立て、金澤に出で、奮戦努力克く身代を造り、遂に同業楠部屋より藏宿を買ひ取り、我家の基礎を造つた人である。

藏宿と稱するは、今日の倉庫業のことで、武士の地行米を預る商賣である。當時藏宿は町人として格式の高い營業の一つで、百萬石の城下に只十三軒と限られて居つた。祖父は初め文吉と云ひ、文政十二年に如茂と改名し、更に慶應二年に翁作と變更した。祖父は終りを全たうした人で、其の恵まれた幸運と、非凡なる識見を以て、早くも莫大なる富を造り上げ、我が一家を榮えしめた。祖父は深く

佛門に歸依し、廣く慈善を施し、念佛を唱へながら、眠るが如く成佛した。行年六十四歳である。

祖母はてつと稱し後妻として迎へられたる金澤鑄物界の家元、三世横川九左工門の妹である。克く婦道を守り祖父を援けたる内助の功勞者で、祖父より後ること五年、明治六年八月、五十三歳を以て歿した。祖母は祖父との仲に、他四郎と、母テイの二人を生んだ。

他四郎は僕等の尊敬すべき伯父で、幼少の時家督をつぎ、二世として大に將來を期待されたが、不幸短命僅か十九歳で此の世を去つた。彼は聰明で天才肌の人、身六藝に通ずるとさへ云はれ、書と繪を最も得意とした。彼の腹達の兄に、繩屋文右工門と云ふのがあり、祖父は彼にも、藏宿一軒を持たせ分家させたが、祖父の覺え芽出たからず、遂に一生を不遇に終り、死後一家は分散し、長男孝四郎は我家に引き取られ、長女つな子は「七ッ屋」に養育さるゝ身となつた。七ッ屋と云ふのは彼の母親の里である。孝四郎は幸ひ我家の世話で、京都に友禪屋を開き、高瀬諒吉氏の妹きん子を迎へて一家を再興した。其嗣子孝義は家業を繼ぎ今京都に居る。

祖父時代さすがに殷盛だつた、藏宿も榮華の夢で、維新と共に廢滅し、遂に失業の憂目にあつた。時代の變遷とは云へ之が爲め非常なる打撃を受けた。僕が子供の頃、まだ當時の家は下堤町の本通りに買手なき大家として残つて居つたが、間もなく解除され廣場と化し去つた。それより我家は安江町に移り心氣一轉の氣分で米商と質業を繼續し以て衰運挽回を計つた。之より先き、我家の關係した銀

行は潰れ、貸金ある萬屋洋品店は破産し、重ね重ねの痛手を蒙り眞の非常時に際會した、然し大家の跡は味噌臭しとかで、祖父時代に集められた什器、器物、骨董品などの道具類がまだ相當にあつたが爲め、應急の策として此等の品を逐次に賣却した。今より見れば他に何等かの手段がありさうに思へるが、孤城落日の衰運には抗することを得なかつたと見える。それにしても住宅と佛壇其他貴重品の一部は今に其の儘残つてゐるのは幸福である。僕等兄弟二人は此衰運時代に成長しただけに、父母の勞苦をあまりに多く知つてゐる。従つて人一倍其の境遇に同情を感じたものである。

墓地は敷地三十餘坪で、野田山中腹部の松林中の一區域を占め、同族五つの墓標は綺麗に並んでゐる。祖父の遺骨は中央と最左の二墓に分骨され、將來我が一門の子孫はこの最左の内に合葬することに定まつてゐる。

佛壇は祖母が名匠に命じ造らしたもので、今時珍らしい程手のかかつたものである。佛壇と言はんより、寧ろ美術品として價值ある家寶と信ずる。

我家の宗教は眞宗で大谷派本願寺の門徒である。而して越中城端別院の直轄たるは、越中繩の内から出た關係である。又越中小野の西照寺の關係あるは、父方品川家の縁故からである。小野世雄師は僕と殆んど年齢を同うし、然も同一母校の出身であるばかりでなく、其の室孝子夫人は曾ての愛弟子でもあり、友達（金澤智覺寺の女）でもあるのは不思議の縁だ。

第二、我父母及兄

父は天保十三年十一月、越中老子村の品川家に、定右門の次男として生れた。父親には早く別れたが、幼少から負けぬ氣の人で十七歳の時、からだ一貫郷里を出で、偶々金澤に來たり藏宿繩屋の使用人となり、勤勉大に努めた結果遂に祖母に認められ、犂養子として、長谷川家を相續した人である。時に明治五年御維新後早々の時である。

父は先代他四郎より家督を繼いだ、已に藏宿業はなくなり、此逆境に處して其の敏腕を振ふには餘りに變つた世間だつた。然し父は終始一貫、長らく營業の第一線に立ち、其全知全能を傾注し、朝は早くより、夜は遅くまで、或は買出しに、或は販賣に、或は水車に、或は金策に、帳付に、殆んど寸暇もなく活動を續けた。父は晚餐に僅かな酒を用ゐる僕等に語り聞かすを唯一の樂みとした。又之が一日の勞に報ゆる唯一の慰安だつた。晩年には趣味として生花の稽古を初めたが、之が性に合つたと見え、上段に達する迄の進歩を見た。父は母と同じく大の宗教信者で、城端別院金澤支院の檀家總代を勤め、献身的に奉仕した。父は物事に熱心で且つ身を持つること頗る嚴格だつた。

父は五十七歳の時兄の稅務署長の就任を見て殊の外喜んだ。越えて二年の後僕も亦少尉に任官し再び父を喜ばした。これからの父は樂隱居も同様で爾來十有四年悠々自適し、大正三年十二月十四日、

七十三歳を以て遂に此の世を去つた。

父の勤儉力行は自らを制して範を示すにあつた。父より來る手紙の用紙は、特別の場合を除き多くは古本紙の裏だつた。又小包に使ふ締紐は抜き糸を繕つた手製の品だつた。萬事皆此の通りで死ぬ迄此主義を貫徹した。實に敬服すべき父であつた。

母は安政六年五月廿八日、我家の全盛時代に生れた唯一人の娘で、兩親の寵愛を一身に集め蝶よ花よと騒がれたものだ。然し老少不定は世のならひ、他四郎の急死は俄に大黒柱を失ひ、遂に僅か十四歳の身を以て婿として父を迎へねばならぬ境遇になつた。十四歳と云へば、いくら昔の時代とは言へ、餘りにも弱年で、主婦としての勤めも覺束なく思へるが、豈計らんや母は女丈夫で、十五歳の時兄を産み、廿一歳にして僕を生んだ。のみならず一切の家政を切り盛りして、剩す處なき堅固な決心の女だつた。母は先代よりの遺志を繼ぎ大の宗教熱心者で、常に神佛を念願し朝夕の禮拜を怠らなかつた。僕は末子の爲めか、特に多く母の感化を受け、又其の氣性を多分に受け入れたと見え、神佛は大事にしてゐる。

母は幼時踊と三味線を習ひ、又上手だつた。中年になつても閑さへあれば、獨りで弾いて樂んだ。母は四十を越えて近代小學讀本の勉強を初めた、斯くして、過去の修學不足を補ひ、立派に讀み書きの出來るやうになつた。其の進取的氣分と其の熱心さは驚くべきで、毎夜床に入つても十二時迄は稽

古するのが普通だつたと、之れは僕の出征中一緒に起居した妻から聞いた實話である。母は早く子を
持った甲斐あつて、四十歳にして、兄の任官を見、四十二歳にして僕の少尉を喜んだ。斯くして父の
歿後十三年間は後家で暮したが、其の間東京と金澤間を往来し、息子の側で日を送り、孫を相手に樂
しく暮らせる境遇だつた。只だ惜しいかな、動脈硬化の爲め心臓を痛め、尿毒症にかゝり遂に昭和二
年正月三日、六十九歳を以て他界した。法名は釋尼妙珠である。

兄は唯一人の兄弟で、母の十五歳にして生んだ長子である。兄は父に似て大の努力家、勤勉家で、
如何なる逆境に立つも敢て動せぬと云ふ信念を持ち、然も大の孝行者である。兄が嫁を迎へ税務官と
して、丹後の宮津にある時、身は署長の位置でありながら、自らを節し以て月給の半額は之れを父母
に送り、御膳の代りに、古き菓子箱を用ひたと云ふ、質實剛健の人で、知るものをして、いたく感服
させたものだ。

兄は寺子屋から、小學校に移り、次で第四高等中學校の補充科に入り、豫科より轉じて、京都第三
高等學校法學部に入り法律を専攻した。四年の螢雪茲に成り、明治三十一年、二十六歳を以て卒業し
間もなく、滋賀縣今津に税務署長となつて赴任した。爾來、宮津、長濱、舞鶴、富山、津幡、金澤、
京都の税務官に歴任し、最後に朝鮮總督府の事務官を勤め、寺内總督時代より永く土地調査の事務に
従事し、大正九年事業終了と共に解職となり、金澤に歸郷し爾來今日に至つてゐる。

兄は辯説に巧みで議論を好み、屢々行政訴訟の辯論に法廷に立つた事がある。今は加賀人たる特徴
に従ひ、謠曲を樂しみ又歴史の研究に没頭してゐる。其の他日々の仕事は庭の掃除と散歩位であらう。

兄は前半に妻縁薄く、最初山下八十平氏の長女隅子を嫁り一女を擧げたが、朝鮮時代に先立たれ、
次で廣瀬氏の女せん子を迎へたが之又た事情あつて離縁となり、最後に美川の人永井正三郎氏の長女
信子を迎へて初めて落ち付き、琴瑟相和し今日に至つて居る。義姉は謠曲と鼓の達人で、師範格とし
て郷里に其の名を知られ、兩人極めて平和に晩年を過して居る。

兄は尙、子運にも恵まれず、先妻との間に生れた唯一人の娘輝子は、兩親は素より、世間一般より
も寵愛された甲斐もなく、永井謙吉氏を迎へて僅かに二年にして病に罹り遂になくなつた。此の時輝
子は、二十五歳で花で言へばまだ咲き初めの頃で、遂に實を結ばずして散つたは如何にも残念に堪え
ない。妻なき後の婿君も居るに由なく遂に離縁となり終つた。

第三、我家の家族と近親、知己、居住

妻は金澤藩士眞田義啓の長女ムラ子で、僕の中尉の頃郷里金澤で結婚した娘である。此の時僕は二
十五歳、妻は十八歳の女學校を出た早々の時だつた。妻の父は陸軍の文官で、東京勤務が長かつた
爲、妻はズツと東京で育つた。明治二十年八月、牛込區原町三丁目の自宅で生れ、二十三年より二十

六年まで牛込河合幼稚園に通ひ、次で愛日小學校より、靜修女學校に入り、更に轉じて久間女學校を明治三十六年四月に卒業した。妻は其の後五人の小供を生み、長女は宇治で生れ江古田で縁付いた。婿は横井太郎氏で最近、二女則子を生んだ。横井太郎氏は東北帝大出身の工學士で、磐城セメント會社に勤め、其の實家は青山高樹町にある。

長男武文は、本年四月大阪商大を卒業し、目下神戸川崎造船所に社員見習として在勤し、月給七十圓を頂いて居る。滋賀縣人高野サジュの三女吉野と結婚し、今は須磨に一軒を持ち、家庭生活を營んで居る。

四女英子は僕が洋行中に生れた末子で、其の名も英國に因んで英子^{エイ}と命名した。英子は江古田で生れて、江古田に育ち、武藏野幼稚園から、川村女學院小學部に入り目下四年在學中で、別に習字と長唄を先生について習つて居る。

二女芳子は板橋官舎に於て、三女壽美子は、目黒官舎に於て、孰れも一年未滿で、消化不良の爲め天死した。

僕の初めて家庭を持ったのは、日露戦争から凱旋した直後で、宇治火藥製造所の所員の時だった。宇治町では皆川英之助氏の邸を借り、勿鷺僅か六圓の家賃を拂つて來たが、それで門構の立派な廣い住宅で、女中と三人の生活には過分の邸だった。僕は豫てから兄の氣分に感化され、此時から兩親のあ

る間、毎月若干のお小遣を送り以て意のある處を明かにした。僕は宇治を振出しに、板橋、目黒、澁谷、池袋、江古田と轉々として移つたが、同れも皆東京の地で、軍人として珍らしい程永い東京勤めの一人だった。

僕は三歳の時遠縁、柴田家に養子となつたが、(戸籍面だけで身柄は其のまゝ)九歳の時復籍した。これは僕等兄弟が殖える見込なく、豫備のなくなるを案じた爲めである。僕は明治四十年五月二日、一家を創設し、越中町二番地に分家した。

我家に古い縁者は極めて少なかったが、子供の時から知つて居るものは、

- 一、品川家 父の郷里關係
- 一、長谷川家及長谷家 曾父の出身關係
- 一、小野西照寺 父の關係及僕の舊知
- 一、金澤智覺寺 母の遠縁
- 一、増泉京次郎 從兄弟
- 一、長谷川孝四郎 從兄弟
- 一、高瀬諒吉 孝四郎關係
- 一、宇野久平 母の遠縁

- 一、山下八十平 母の縁者、兄嫁の里
- 一、大桑慶太郎 母の縁者
- 一、本保家 舊い時代よりの縁故者
- 一、宮家 母の縁故者

以上の内山下、増泉、宇野、大桑の四軒は共に子供時代より往來頻繁で、何かと云つて寄り集まり、或は祝ひ、或は悲しんだものだつた。又、増泉、大桑、宇野の三當主は、皆僕より十年餘の先輩格だつたが、父より見れば小僧扱ひで、父は此等三人を三幅對と諷名し、「何れも一得一失あるが、誰れが一番成功し、誰れが一番長壽を保つかが見物であると言つた。成功は皆成功に違ひなかつたが、今から見れば薄命は増泉氏で、長壽者は宇野氏となつて現はれた。

山下家は當時唯一の縁者であり、八十平氏の歿後は二世一義氏により更に親交を重ねて居る。一義氏は今越中氷見に開業し、醫師として人望を一身に集めて居る。僕は最近歸省の歸途之を往訪して盛んなる歡待を受けたが、其の成功を見て祝福した。

美川の永井家は郷土の長者で兄嫁の里である。曾て其の息謙吉氏は迎へられて兄の家を嗣ぐことになつたが、輝子の死に遇ひ離縁となり、今は別に一家を構へ妻子がある。

横井家は長女貞子の縁付先で、日露戦争に功を立てた、歩兵大佐横井鎮雄氏の後である。

高野家はよしのの里で、母子三人、今は大阪に住まつて長男の成人を待つて居る。よしのの姉二人はそれぞれ縁付き、伊丹町と朝鮮に一家を持つてゐる。

妻の父眞田義啓は金澤藩士で、古くより東京に住ひ、本家眞田義一氏の分家として參謀本部陸地測量部に勤務した、陸軍文官である。

眞田の祖先は眞田幸村と謂はれ、伯爵家があるが交際はない。義啓の妻フキ子は、東京人山川金太郎氏の妹でムラは其の長女である。次女の鈴子は留まつて、婿辰次郎氏を迎へたが、縁ある方より先に嫁入らしたまでのもので、何等深い意味はない。

辰次郎氏は土木工學の出身で、今小田原に留守宅を有し、自ら活動の第一線に立ち、富山縣日本電力會社の黒部建設事務所にあつて、景氣よき活躍振りを示してゐる。

妻の母眞田フキは、八十三歳の高齢で今小田原に鏗鏘としてゐる。僕の知己は可成多數で一々數へ切れないが、年賀狀の人名簿には、千四百八十七人が登録されて居る、中には碌に話もしない人も相當に混つて居る。

今から三十年前の、日露戦争時代を考へて見ると、軍人仲間を除き、左の顔振れが浮んで來る。

- 野 口 威 子 佐 々 木 美 代 宇 野 久 示
- 増 泉 京 次 郎 山 下 一 義 牧 田 重 雄

田中正之	太田仁三郎	八田智澄
高瀬諒吉	大島兵太郎	小原喜三郎
長谷川孝四郎	牧田静子	富田輝象
松野保外理	小杉丑兵衛	横地弘一
藤島長次郎	小杉よね	真田辰次郎
ロバートソン	福井夫人	中村通譯
藪あさ	石井まつ子	井谷蝶子
小野世雄	谷村庄平	中井夫人
阜瑞應	須山まさ子	進藤秀松
牧田友五郎	真田義一	品川しよ
土志田孝子	宮野益子	山下八十平
富樫亮一	本多男爵	小川綾子

僕は面倒嫌いな性質で、結婚の媒介はあまりやらない。それでも勢の然らしむる處で一、二件だけ取り持ったが幸ひ成績は良かった。然し初産が一寸面倒で一時悲觀したが今は健康體に返り、楽しい生活を續けてゐるので安心した。婿は宇野英夫大尉で嫁は後藤柳子である。宇野氏は砲兵士官で既に

満洲勤務を終り、今京都の師團に勤務中の眞面目な青年だ。柳子さんは深山時代からの懇意な友達、後藤仙次郎氏の二女で、腦のよい女學校出の才媛である。次は聊か雇はれ役の感がないでもないが、十年後の今日でも絶えず家運の繁榮を祈つて居る。幸ひ頑健なる男子二人を設け無事安泰であるから之又喜んでゐる。婿は眞田本家の昌彦氏、嫁は山田爲三氏の妹輝子氏で、これは十年前の古い昔である。

この外役所の關係者で半分仲介者の勞を取つたものは二三あるが、是等は其の場限りのもので詳しい近況は知らない。

僕が家庭を持つて以來の女中を調べて見ると左の十七人が擧げられ今は故人となつてゐる者も相當にある。

歴代の女中	
一、てる	宇治 加賀松任のもの 死去
二、つる	同右 京都宇治のもの 不明
三、ふじ	同右 同右 嫁入
四、まつ	同右 同右 嫁入
五、すゑ	同右 同右 嫁入交際あり

- 六、とめ 板橋 東京板橋のもの 嫁入
- 七、あき 同 同右 嫁入(「とめ」の妹)
- 八、ふみ 同 同右 不明
- 九、とよ 同 富山縣のもの 嫁入交際あり
- 一〇、よね 目黒 東京板橋のもの 不明
- 一一、きみ 同 越後地藏堂のもの 死去
- 一二、益子 練馬 越中繩之内のもの 嫁入後死去
- 一三、八重子 同 越中氷見のもの 嫁入交際あり
- 一四、直子 同 越中富山のもの 嫁入交際あり
- 一五、かね 同 東京十條のもの 嫁入交際あり
- 一六、あき 同 東京板橋のもの 自宅にあり
- 一七、とよ 同 神奈川縣小田原のもの 現在勤務者

以上平均勤続年数は、一年七分弱で、東京に於ける最近のもの、年数は三年以上である。此等のものは、益と暮又は正月に顔を出し、八重子の如きは子供を連れて泊りにさへ来る。僕は陸軍出身以來今日に至る三十八年の居住地を調べて見ると左の通りである。

- 一、淡路國由良町 一年 營内
- 二、紀伊國深山 一年半 營内及下宿
- 三、淡路國福良町 半年 營内及旅館
- 四、滿洲各地(戦争) 一年半 轉戦
- 五、京都府宇治町 三年半 家庭
- 六、東京及近郊 三十年 家庭

内 譯

- 1. 練馬町 十三年 家庭
- 2. 目黒火藥製造所官舎 四年 家庭
- 3. 板橋町 七年 家庭
- 4. 岩鼻町 半年 下宿
- 5. 池袋町 二年 家庭
- 6. 澁谷町 半年 家庭
- 7. 牛込 三年半 學校及下宿

以上の如く最長が東京の三十年であるが、郷里の十九年が何となく懐かしい處のあるもの不思議

だ。

第四、幼兒時代

僕は明治十二年四月三日神武天皇祭の當日、金澤下堤町の家で、次男として呱呱の聲を擧げた。僕は母の廿一歳の時の子で、當時まだ昔の餘光があつたと見え、直と云ふ子守があり稍々大きくなつてははるといふ女中に可愛がられた。はるは河北潟に近い高松のもので、我家に十數年間も勤めた家人同様の人だつた。はるは中年を越へて玄蕃町の米屋へ嫁入つたが、僕はこの家を屢々訪ねたことも覺へてゐる。

僕等の生れた下堤町の家は、間口十一間、奥行二十間もある一部二階建の老大なもので、これに八十坪あまりの米藏と、二十餘坪の道具藏がついて居り、當時親子四人と二、三の奉公人のみの世帯としては持て餘したものだつた。僕は三、四歳頃の記憶として多くは持たないが、只一つ明瞭に覺えてゐるのがある。それは僕の三歳の時で、母から山代温泉の御土産として人形の張子と馬の玩具を貰つたことで、之は確かに僕の記憶の一番、最初のものである。

それ以後幼時の印象として思ひ浮ぶことは、
一、宇野久平氏の母（つね）に寒中、肌オンブをして貰つたこと。肌オンブと云ふのは子供を素肌の

背に入れ、直接肉體温で暖める、オンブのことである。

二、尾張町の近火に際し、ガン／＼と響く鐘の音や、目の前に見える猛火に震へ上り、夜間三社なる野坂ぶん様の宅へ連れられ避難したこと。

三、同居の長谷川孝四郎が、小學校の小使室で遊び居る中、誤つて火傷したのに狼狽し、泣いて歸つたこと。

四、兄と喧嘩をしても、父は、「大きい奴が悪い」と判決され、いつも無難ですんだこと。兄は六つ年上の腕白小僧だつた。

五、家向の友達、小原喜三郎氏が大の仲よしで、毎日喜んだこと。氏は三井銀行の支店長をつとめ、今四谷にゐる實業家だ。

六、氏神様の祭禮に、飴代二錢を貰つたが、早く遣つたとして母から叱られたこと。當時飴一本が一厘だつたのは嘘の様な真である。

七、春日神社の祭禮に、山下の内に招かれ、たまに母と共に人力車に乗るのが楽しみだつたこと。

八、附近の子供と遊び、石筆の一片を鼻腔に嵌め、泣きながら金澤病院に母と急行したこと。

九、獨り遊び中誤つて、庭石の上に落ち、頭部を負傷し、小便で洗はれたこと。小便は消毒によいと見える。

十、暮と正月の餅搗きに、鉢巻姿の男衆が、三味線に合はせて調子搗き、空白喰つて笑はせたこと。
十一、法恩講の終りに、坊さんと一緒に朱塗の御膳で精進料理を食べたこと。
十二、鬘斗目模様の紋付着物に、社杯を着け、オカッパ姿で御膳についたこと。之は七五三の祝の時かと思ふ。

十三、梅坊子の件

我家に幾百年來の大きい梅の古木があつて、幹の胸腹に穴があり、それでゐて、春になれば綺麗な花が咲き、誠によい庭木だつた。然しこの木に昔から狸が住んでゐると云はれてゐたが、氣にも留めなんだ。然るに父が庭に面した座敷に屏風を廻して寝んでゐた時、誰か聲をかけて起すものがあつた。眼を開けて見ると之れは大きな入道だつた。入道は屏風越しに只だニャ／＼笑うてゐるので、起き上らうとした刹那消え失せた。父は決して夢でも錯覚でもないと話して聞かせた。

十三、^{ムヂナ}貉の化身の件

我家の米藏は廣くて暗くて、昔から^{ムヂナ}貉が住んで居ると言はれてゐた。これがとう／＼悪戯をしたといふ話で、之は女中は、^{はる}の實話である。^{はる}は或朝早く臺所で御飯を焚いてゐたが、かねてから親しくしてゐた友達が、ヒョッコリ尋ねて来て、「おはるさん暫らくでした」と云つた。餘り早いのに驚いた^{はる}は、「早くからよく出られたことね——」と返事すれば、「某所へ行き度いから一

緒に付き合つて呉れ」と再び云つた。^{はる}は彼女の顔を見つめて、奥へ立去らうとした瞬間彼女の姿は消えた。アア不思議やと臺所の出口に出て、左右を見廻したが誰も見えぬ、表門の戸締も其儘で別に入出入の形跡はなかつた。これは^{ムヂナ}貉に化されたのだとて、それから家中大騒ぎとなつた。こんな面白い話は嘘の様な實話である。

第五、小學校時代

僕の小學校時代は明治十九年より、同二十四年に至る五ケ年間で、當時小學校は尋常四年、高等四年の八ケ年だつたが、僕は卒業せないので早くから中學へ入つた。

僕は七歳の時一旦學校へ行つたが、一週間も経たぬ中、學校はイヤだとダダを捏ねた。甘かつた両親も諦めて翌年廻しとし、八歳の時から一つ年下の生徒と一緒に通學した。其原因は未だ不明だが勉強のいやだつた事は確實である。

學校は家から程遠からぬ、松ヶ枝小學校で、往復には晴天の日でも高下駄を用ひ、手には竹の子の辨當をブラ下げ、雨天の際は菅笠を冠つて通つた。

最初何を習つたか覚えはないが、讀本はたしか亞細亞人種、亞弗利加人種と云つた様な高尚なもの

だつた。習字は黒くなつた草紙に墨字の上塗りで、清書の時でなければ白紙の使用は禁せられてゐた。さうして唱歌もなければ遊戯もない、手工の如きは尙更なかつた。

三年生の時から新築の西町尋常小學校に轉校した。校庭は廣く、教室は明るく何となく明朗な氣分で面白く勉強した。校舎の良否は子供の勉強に大なる影響を與へる。

本校の先生に、漢學者城西信莊と言ふ人があつた。當時六十に近い年輩の人だつたが、頭はツルツルに禿げ光り、固く結ばれた口許から、時々雷かと思はるゝ叱言の聲が響くので、之には僕等は縮み上つたものだつた。然し流石は教育家だけあつて、嚴格の中にも無言の慈愛があり、今でも先生のことは忘れてゐない。その教訓の中に

一、讀書は幾度も繰り返せ。

二、急がずに緩つくり行け。

の二つは金言として、今に耳朶に深く残つて居る。

先生は味噌蔵町九人橋通に住まはれ、毎朝冷水浴と朝酒とは缺かしたことはない人だつた。僕は先生の自宅で毎朝漢文の教授を受けたが、主として、大學、中庸、孟子の素讀だつた。當時僕の家は半里も距たる安江町にあつて、それこそ雨の日も、雪の日も、常に小さい提灯を下げ、又寒い時には小田原マントを引きまわして通ふのだつた。之が爲め母は四時に起き、鐵瓶に湯を沸かし、以てお茶漬

飯の準備をして呉れた。僕は夜明前に出發し曉の頃參邸するのが常だつた。水浴を終つた先生は頭から湯氣を立てながら現はれ、ドツカと座席につかれるが、其時已に赤色素焼の銚子が一本御膳と共に机上に配されてゐた。グツと二三杯飲み乾し話をしながら食事を取られる。それが終つて初めて教はる順序になるので、此間御稽古に要する時間は、僅か十五分に過ぎないが、朝の四時から三時間に互るこの長い時間が空費さるゝので、随分馬鹿らしいと思ふた。今より見れば之は大なる修養となつた譯で、何處かに其れ以上の收穫があつた様に思へる。

城西先生は越中の人、西照寺の檀家で父とは實際が特に深かつた。先生の長男城西周雄氏は、郵便電信學校を卒業し永く金澤郵便局長をしてゐたが、兄とは同年輩の學友だつた。

西町小學校卒業の直前に遠足會があつた。河北潟附近の長い畝道を一列縦隊となり、要所々に先生を挟み歩きながら四方山の話をして、先生と別れを惜んだ。中には生徒の話に感激して泣き出した先生もあり、又貰ひ泣きして目を腫らす生徒もあつた。此の場面こそ今に忘れぬ師弟情誼の美しい現れである。

此頃學校に直立と稱する一種の懲罰があつた、其方法種々あつたが、一般的のものは所謂直立であつて、生徒を不動の姿勢に保たしめ、頭上に満水の茶碗を載せる苦行だつた。別に體刑と云ふ程ではないが、これが今日だつたら人權蹂躪で騒がれる處だ。

尋常を出て高等に入つたが、在校僅か一年半で中學豫科に轉じた爲め、あまり記憶は残つて居らぬ。唯然し千人餘りの生徒が、皆上級生で威張つてゐるかの如く見えただけだ。

或夏の日に父に伴はれ二里餘り距つる金石港へ御祭禮見物に出懸けた。見物の人込の中で僕は足を踏まれ血を出した。父は袂ぐさを傷部に當て手拭を以て繙帯して呉れた。袂ぐさは袂の隅にたまる塵埃のことで、當時血止法として用ゐたが、消毒と云ふ思想は幼稚なものだつた。

尙向山と大乘寺山が思ひ出さるゝが、金澤人は春が來れば向山に、秋になれば、大乘寺山に、辨當持參で遊ぶのが常例だつた。僕も墓詣りを兼ね、五百羅漢に參詣し、十一屋に休憩して、一日の慰安を此大乘寺山に求めたものだつた。

第六、中學校時代

僕の中學校は本科五年、豫科一年の六年間で、十三歳の幼年より十九歳の壯年に至る長い期間だつた。従つて僕の學問も、人間としての修養も、皆此六年間に其大部分が基礎付けられたと信ずる。當時の高等學校は、語學教育であり。大學は専門教育だつたので、教育として一生の根幹を造る所は中學校であつたと信ずる。

此大事な中學校が、當時石川縣下に只一校あるのみで、然も最初の時代は私立だつたのも情ない。

加賀は眞宗の盛んな所で宗教の教育も、僧侶子弟のため此學校でやつた。尤も縣立となつてからは、格式、内容共に一段と整頓したが、それでも尙縣立の女學校さへなかつた位で、今から見れば幼稚なものだつた。當時金澤の高等中學校には豫科あり、補充科あり、又中學校に於ても豫科を設くるなど、其他、小學八年卒業者の無試験入學もあれば、受験入學者もあつて、學制の體系より見て、不整頓極まる時代だつた。それで少し上手にやれば、一年や二年の飛越は樂に出來たものだ。

其一、前期（豫科及本科一、二年時代）

僕は高等小學一年修了の身で、大膽にも中學の入學試験を受けた。尤も腕試しの積りで、萬一を僥倖したまでだが、それが的つて、中野鏡正氏と二人は豫科に入學を許された。

豫科は僅か一年であるから、卒業後入學する一般のものに比し、二年を躍進したことになる、大なる收穫であつた。僕等の中學校は前にも述べた如く、半ば大谷派の宗教學校であつたが爲め、豫科生の多くは僧侶の子弟であり、教師の中にも法衣の姿が二三見えた。僕は級中の最年少者として、年長者の仲間に入り、懸命に勉強したので、幸ひ豫科卒業に際し第一位を得、前田侯爵家より「折たく柴の記」一部を賞與された。當時の豫科生は二十名内外だつたが、本科各級の生徒は、僅かに二三名乃至七八名の少數者だつた。此教師一名の、生徒四五名に對する講義は、珍無類であると同時に、生徒の

學力向上も、亦珍無類の實を挙げ得たと思ふ。此時の上級生に大阪の片岡安氏や、小島伊佐美氏のあつたことを覚えてゐる。

此時代僕は山本良吉先生より多大の御世話を受けた、本校の入學も豫科の勉強も皆此先生の賜物だと思ふ。當時先生は金田姓を名乗り、まだ若い青年教師だったが、特に英語をよくし、會話は非常に上手だった。其後大學を卒へて、沼津、京都の中學に教鞭を取り、更に京都帝國大學、學習院に訓育を掌り、後武藏高等學校の校長職に就かれ今日に至つて居るが、氏の帝都教育界に於ける名聲は高いものである。

中學校々舎は、白銀町舊大谷派本願寺の教講堂であつて、中央の校庭には柳の木と、屋形井戸があり、右側の隅に機械體操場が設けられてあつた。建築は木造だが、洋風の一寸體裁のよいものだった。當時生徒の多くは和服で、膝までの短い袴をはき、校舎の内では裸足のまゝを普通とした。此の時の風は今時の書生に想像のつかぬ硬骨一點張りのものだった。其代りよく煙草を吸ひ、腰に「火の要心」とかいたドウランを下げ、短き煙管でスツバ／＼と火鉢の縁を叩いたものだ。當時サンライズ、ヒーローなど云ふ煙草が流行し、村井兄弟商會の殷盛した時だった。

當時の中學校は、英、數、漢に力を入れ就中英語の時間が多かった。英語教師に米國人スナッドグラス氏、其他山本、伊藤、宮井の諸先生あり、數學に太田、上山、林の諸先生、漢文に、三宅、大

島、篠田等の先生、何れもミツシリと教へて呉れた。中にも倫理の講義に、河島先生が謹嚴なる態度で教へられたことは、今に忘れ難き記憶の一つである。

僕は漢文、國語、作文が不得手で、數學は算術、幾何、代數、皆相當に自信があつた。

明治二十六年濃尾の地に大震災が起つた。死者數千人と言はれ、食ふに米なく、着るに衣なき子供も多かつたので、僕等は藤井先生指導の許に小學讀本を多數に速寫し、之を罹災地の小學生に贈つた。之は同胞相愛の念を深からしむる上によい感じを與へた。

此時代僕はあまり遊び友達を持たず、内に居つて靜かに勉強し、時々兄に連れられ遊泳や、演說會に行くのが關の山で、盛んにトランプを遊ぶようになったのは三年生以後のことである。

其二、後期（三年生から卒業前後まで）

後期に於ける中學時代の僕は、快活で、勤勉で、學問も、運動も、趣味も、誰に憚ることなくグングンと延びて行つた。僕は母の性質を受けて遠慮勝だつたから、友達と喧嘩口論などはせなかつた。又家庭の事情は贅澤を許さぬ時で、家事の手傳こそすれ、人一倍に質素だった。僕は制服が制定されても、新調を急ぐでもなく、古い兄の小倉服を着て間に合せ、大抵の場合は和服で押し通した。僕は中學末期に於て身長五尺五寸三分、體重十四貫五百となり、身長に比し體重は稍々輕かつた。

學課は毎週三十時乃至三十五時間あり、中英語が八時間以上で、五年の頃はセキスフエヤを教はつた。日々の豫習は字引と組打で、それに數學の宿題もあり、可成に忙しかつた。漢文は三宅少太郎先生の受持で、其蘊蓄ある史記列傳の講義が面白くて大に謹聽した。體操は兵式體操で、和服に鐵砲を擔ひ、小隊教練をやつたなどは、維新當時の藩兵の様で、滑稽至極のものだつた。それでも少尉の教師が居り、野外演習も、發火演習も指揮官となつて指揮して呉れた。

僕の友達中小川乙吉、松野保外野、横地弘一の三人は仲よく遊んだ。殆んど毎日のやうに會合して勉強もすれば、トランプも遊び、時には徹夜と稱して一夜ブツ通しの復習をやつたこともある。トランプはセイクエンス、繪取り、點取りなど何れも素人離れのした、凄腕前の三人だつた。日々の運動は此等の友達と日暮に至るまで、學校の機械體操をやるを例とした。又日曜日は金石、河北潟、向山等に遠征したが、多くの場合、握飯携帯が常だつた。

僕は五年の時、陸上競技の選手だつた。毎年十一月三日の天長節は、第四高等學校陸上運動會の恒例日で、此日は昔から天長節日和と不思議がられる程好天氣が多く、金澤人行樂の書き入れ日だつた。金澤人は皆此運動會を楽しみ、中にも中等學校選手競争は人氣を呼んだ。僕は中學校の選手三人中の一人として此競争に其技を競つた。出場學校は中學校、師範學校、工業學校、北陸學校の四校で十二人の選手がスタート線に綺麗に併んだ。間もなくドンと一發を合圖に僕は夢中になつて駆け出した。

常にトップを切つて居る、「中學校」やれ、「長谷川やれ」の聲援は雷の如くに響いた。僕は我身であつて我身でなかつた。元より前後左右を見る餘裕もなく、常にトップであるとの油断から、將にゴールに入らんとする刹那、僅か三尺位の差で、北陸學校の北川某に抜かれ、優勝は遂に北陸學校に歸した。僕は遺恨此の上なくスゴノと持場に引上げて來た。それでも第二位だとして胸上げされたが、支那カバンと新聞二ヶ月分の賞品は涙の種とこそなれ、嬉しい記念にはならなかつた。

此頃親類の子供に學課の豫習を見てやつた。御弟子は中學一年の金丸市太郎氏と、山下隅子と、伊藤孝子の三人だつた。山下隅子は高等卒業の補習科生徒で、伊藤孝子は北陸女學校一、二年生時代だつた。僕は十七八のまだ若い先生で、何を教へたか、覺えて居ないが、英語と算術だけは特意になつて教へたと思ふ。然し先生も御弟子も遊び度い盛りで、友達氣分をやつたから、教はるものも迷惑だつたと思へる。それでも市太郎君だけは僕を「先生」と稱して尊敬したので赤面した。金丸君は金澤郵便局の高級官吏となつたが最近に歿した。又山下隅子は兄嫁となり僕の義姉となつたが、之れ又中年にて他界し、今は伊藤孝子氏のみが越中小野の西照寺に、小野世雄師の令夫人として現存して居るのみだ。

僕の中學時代、親類の子供は多くは女性であり、從て遊び相手となつたものは、大抵娘だつた。僕

は毛糸の編物など自然に覚え、着物の截ち方さへも出来る様になつた。又手毬唄を上手に歌ひ、羽根を遊んだのも面白うい。此時代思ひ出さるゝは物價の安かつたことだ。或時先生を招き寺町の妙典寺に談話會を開いたが會費は八錢で、少量の酒と鮑舘と、味噌汁の御馳走が出た。八錢の金は、飽腹の上三時間も騒いで遊ばした代價としては安いものだつた。又修學旅行として小松町附近に一泊行軍をした時の宿泊料は、十八錢だつたことを記憶して居る。然るに、教頭の理學士太田達人先生は、大學を出たばかりで、七十圓の月給を取り、校内羨望の的だつた。今日より見れば、大學卒業生の價値が随分高かつたものだ。

此頃、北陸線の鐵道は、まだ全通して居らず、僅かに福井以西を運轉するに過ぎなかつた。金澤よりの旅客は主として、金石港より海路敦賀に渡つたもので、僕等は、まだ汽車と云ふものを見たことがなかつた。學校は修學旅行を利用して、汽車を見物させ、さうして福井より大土呂まで、タツタ一驛間だけ試乗するの機會を興へて呉れた。初めて知つた僕等の眼には、評判が大きいだけ、それ程とは感じなかつたが、それでも窓外に見ゆる電柱が瞬く間に、二つ三つと走るのを見て、學問の力の偉大さに感じ入つた。今日ラヂオや、飛行機を珍らしく思はぬ子供を思ひ、四十年の歳月が如何に、物質文明に、急速度の發展を遂げしめたかを思ふと、不思議でならない。

僕の希望は軍人だつたが、當時金澤に師團がなかつたので、特科兵を見た事がない。偶々名古屋師

團の秋季演習が、金澤練兵場附近に行はれ、其の演習を見る機會を得た。此の時眼に映じたものは、あの威勢のよい砲兵士官が黄色の筋ある短袴に、拍車の付いた長靴をはき、馬上嚴めしく陣地侵入を指揮する姿を見て、彼のナポレオンも、砲兵士官だつたと考へ、一筋に砲兵士官を希望するやうになつた。

僕は卒業して陸軍を志願したが、同時に不合格の場合をも考慮した。此時兄は京都で法律をやり、父又法律が好きだつたので、僕に法科を勧めた。僕は二段の構へとして、四高法科を志願した。幸ひ兩方に合格したので、陸軍に入るまで高等學校に通ひ、第一學期を修了した。こんな連中が、尙三、四人あつたが、第二學期となつては、缺員補充も出來ず學校も大に困つたと聞いた。

僕は明治三十年三月、第四回卒業生として、石川縣尋常中學校を卒業したが、此時僕は十九歳で、卒業生は二十三名だつた。然し今故人となつたもの、十數人あるのは遺憾に堪へない。

第七、士官候補生時代

僕は明治三十年十二月一日、淡路國由良要塞砲兵聯隊に士官候補生として入營した。親友小川乙吉氏亦、名古屋の砲兵隊に入るので、京都迄同行し、同地で一緒に兄を訪ね、一泊の上別れた。それより僕は淡路に渡り、由良町先ヶ峯旅館に一泊の上翌一日いよく入營し、軍隊生活の第一歩に踏み出

した。僕は第五中隊に編入され、篠田長秀大尉を中隊長に持った。聯隊長は松岡利治中佐で、温厚な土佐武士だった、候補生は總員二十四名で、最初は一等卒の待遇だったが、四ヶ月後には上等兵となり六ヶ月後には二等軍曹となり、更に三月目の九月一日には早くも一等軍曹の段級に進んだ。其昇進の早だけ澤山の學術科を修得せねばならぬ苦勞もあつた。

一等軍曹に昇進と同時に、幼年學校卒業の士官候補生、岸本俊夫氏以下五名のものと一緒となつた。

要塞砲兵の教練は、大口徑火砲より小は小銃に至るまであらゆる兵器を操練する外、築城、力作、工作、通信術、觀測法、操艇術などあり、更に士官候補生は、軍隊指導の要領をも解せねばならぬので、朝は五時の起床より、夜は九時の就寢まで寸暇もない忙しさであつた。

僕は砲臺演習の時、榮養不良の爲め夜盲となつた。又一時性夢遊病に罹り皆のものを騒がした。之は演習中夜營の天幕内の假眠中に起きたもので急に飛び起き、水中に飛び込まんとしたが、戦友に抱き止められ、漸くにして我れに返つたもので、之れも一種の過勞症だった。此時抱き止めた士官候補生は須藤定一氏で、今に忘れぬ恩人だが、已に故人となつて居るのも悲しい。彼は長崎縣人で團碁の強い然も眞面目な勉強家だったが惜しいことをした。

中隊長は、士官候補生の唯一の訓育主任者で、僕等は常に父として慕つたものだ。僕等は日躍日に

は其私邸を訪問し、家庭人となつてよく晝食の御馳走になつた。

僕は又時々、要塞司令官の竹橋尙文閣下を訪うて、其家族と一緒に花合せを遊んだ。司令官は金澤出身の先輩で特に面白く相手して下さつた。其純白の髯の下より眞黒の海松パイプで煙草をふかしながら、又負けたとかるたを投げ出しカラ／＼と笑はれた面影が今に目の前に残つて居る。

僕等は十二月一日を以て陸軍士官學校に入校を命ぜられ、一週間の旅行日數が與へられた。一ヶ年間の島生活に飽き果てた僕等は、一刻も早く出發したく、夜半の正零時を期し一齊に飛び出したも面白かつた。僕は故郷懐しく此日數を利用し、郷里に兩親を訪れた。勿論一年振りの歸省で郷里の一同非常に喜んで呉れたが、滞在僅かに二日にして惜しくも憧れの東京へと急いだ。

東京は花の御江戸と豫て聞いて居つたが、來て見ればだゞ廣い、人の多い、砂風のたつ、いやらしい町だつたに驚いた。

士官學校在校一ヶ年は要するに軍事學と語學、馬術、劍術の超特急教育に過ぎなかつた。然し規律が嚴蕭で、教官に重みのあつたことなど、少なからず不可侵の感しを與へた。

僕等の同期生は七百名で、それが四個中隊に分れ、各中隊は、歩、騎、砲、工、輜重の混成生徒隊だった。僕等の中隊長は、松浦寛威大尉、(後の第九師團長)で温厚篤實の人格者として有名なる人だった。

士官學校は、烟草も喫めず間食も出來ず、一週間一度の日曜外出を唯一の楽しみとするのみで、それも下宿に下つてタラフク腹を肥やすのを目的とし、他に何等慰安を求めようとはせなかつた。よく御飯を八杯喰べたとか、牛井三個を平げたとか聞かされたものだ。或日曜日の夕方のこと、生徒の大部が腹一バイに積み込み、ウン／＼唸つて外出先より地極坂を上つて歸つたまではよいが、運悪く週番の一區隊長により食後の運動とあつて、命令一下、駢足をやらされたには閉口した。區隊長自から先登に立つて、校庭内を數十回駢け廻つたので、腹一バイの生徒は一度に苦しみ出し、御腹のものを開帳したので、やつと中止となつたことがある。誠に意地の悪い週番士官だつた。若い生徒が如何に食ひ氣に満足を得なかつたかが分る。

士官學校は何かと言ふとスグ外出止めを喰はず、外出止は、一種の懲罰である。机下に靴足袋が掛けられたとて外出止め、學科の得點が四十點未滿だとあつて外出止め、服裝の手入が不良でも外出止めとなる。これは本校特有の美風でもあり惡風でもあつたが、一週一度の日曜外出は實に絶大の慰安で、これが禁止は堪へ得ざる苦痛だつた。某侯爵の嗣子は此の外出止めに遇ひ、迎への馬車を空車で歸したと云ふ悲劇もあつた。

士官學校の門前に長い坂がある。之は外出の時は、極樂坂、歸る時は、地獄坂と稱へられてゐた。之は露骨の様だが正しく生徒の心裡を穿つたものだと思ふ。然し元帥大將一人として此校を出でざる

ものなく、如何に本校の學風が皇威の發揚に貢獻したかを思ふ時、地獄坂は、地獄坂にあらずして、極樂坂として感謝すべき筈であらねばならぬ。

士官學校の年限は當時一年の短期制で、これは日清戦争後擴張時代に應ずる速成教育のためだつた。此の切りつまつた期間内に、僕等は所定の學術課の外、測圖演習、戰術實施などをも一通りはやらされた。

馬術の演習によく外乗したが、やゝともすれば、落馬の憂目に遇ふので困る。又稀には落馬の主を置き去りにして、馬だけ一足先に、厩舎に歸る滑稽もあつた。僕は在學中落馬したこと五、六度では濟まなかつたが、一時間に三、四回も落つるものから見れば上等の方だつた。戰術實施は沼津でやり、測圖演習は水戸でやつたが、何れも宿舍休養で苦しい中にも、楽しみがあつた。此時代の地方人は、よく歓迎して呉れた。

僕は或冬の夜、暖められた自習室で突然倒れた。翌朝醫務室で目の醒める迄で何事も知らなかつたか、癲癇でもなく、腦溢血でもないと思へば腦充血だつたかと思へる。その後再び起らなかつたことは幸である。

僕は外觀頗る頑健さうだが、内容之れに伴はざる處あり、特に腦に關しては終生何かと故障あるものと考へてゐる。士官學校も無難に過ぎ、茲に明治三十二年十一月第十一期生として、卒業するの光

榮を得た。此時恭くも

小松宮彰仁親王殿下御名代として御台臨あり、陸軍大臣、參謀總長、教育總監、侍立の下に盛大に行はれ、僕は卒業證書を懐にしながら、極樂坂を下り、人力車を飛ばして、新橋停車場へと急いだ。此時の卒業生は總員約七百名で内、要塞砲兵百二十名、由良に復歸するもの二十九名だった。

第八、中、少尉時代

士官學校を卒業した一同は、抱負満々、意氣揚々として原隊に歸つたが、時恰もベスト流行の際とて、隔離を命ぜられ、醫務室の一室に監禁同様の身となつた。一週間は非常に退屈で、論談と、讀書とにより僅かに、鬱を散ずるのみだった。放免後初めて見習士官として晴の職務を執ることになり、僕は新兵掛として初めて、新兵教育に従事した。それこそ「いろは」の字より初め、翌年三月迄に、戦争に出られるだけに仕上げるので、面白味もあり、苦しみもあつた。當時壯丁中まだ靴や袴下のはき方を知らぬもの、姓名を書き得ざる程度のもの、二三にして止まらず、萬事に氣骨の折れること一方ではなかつた。如何に嚴格とは云へ徒らに恐がらしむるのみが、効果を上げるでなく、教育は寛嚴、宜しきを得る處に妙味あること知つた。又二年前、手を取る如くに教へて呉れた老練な下士官を、今は部下として指揮せねばならぬ呼吸も、面白い試練の一だった。彼等は學問として大なる價値

なしとしても、鍊へ上げたる實地の腕前は侮るべからざるもので、新兵教育の眞髓はよく心得てゐる。さて之を如何に操縦するかが、見習士官としての一役だった。運用の妙は人に存すると曰はるゝ又難い哉である。

見習士官は中少尉と同じ勤務だが、將校會議の議を経て初めて責任ある將校の職につくことになつて居る。見習士官は營内に居住するも毎日夜十二時までの外出は自由だ。見習士官は毎旬一圓三十五錢の手當を受け、一切の被服は官給である。新兵教育は第一期が一番骨で、此期の終りに聯隊長は嚴重なる檢閲をする。之を終つて、第二期に移り、以後軍隊教育令の定むる處により、順次第三期と進む。此時に至れば秋季演習が初まり、一年の教育は完了するのである。

僕等は三十三年六月、少尉に任官し、初めて少尉殿と呼ばれた。此時の氣持は惡るいものでないが、初めは自分でない様に思はれた。僕は任官と同時に、紀州深山の第三大隊に轉動した。この時服裝手當として金八十圓を支給されたが、固より足る筈なく、僕は百數十圓を追加し漸く一通りの服裝を整へた。僕は少尉時代營内に居住し將校集會所に起居した。これは至極經濟であり、三十圓の月給は幾分餘裕を生じた。

深山は和歌山より約二里の加太町に近い一部落である。由良町に比し著しく小さいが、若い士官には喜ばれた。これ深山は小なりと雖も大陸であり、淡路の様な島でないからである。元來島生活の氣

分は文明が遮断されるかに考へられ、血を湧かす青年將校として不愉快がるのも尤ものである。中隊長は安藝元久大尉で、大隊長は山路通信少佐だった。何れもよく僕等の公私に關し指導、援助を與へて呉れた。大隊長は加太町淡島神社の境内に住ひ、毎年秋季演習終了後、慰勞の宴を開き僕等一同を招待して呉れた。これは僕等に取つて無上の光榮で、加太の浦の景色を眺めながら飲み且つ騒いだものだ。

特務曹長に後藤仙次郎なるものあり、温厚なる君子人で、僕等は公私多大の世話を受けた。氏は不思議に板橋火藥製造所に技手として奉職し、僕と再び一緒になつた。氏は其後年齢滿滿限で退職したが、間もなく帝國火藥工業會社に入り爾來十年の久しきに亙り、唯々勤勉之れ勤め一般の評判厚かつたが、今は板橋の邸に隱退し自適の生活を續けてゐる。僕は今尙親しく往來し時々深山時代の話を交へてゐる。

師團長は有名な小川又次中將で、雷の様に恐い猛將軍だった。一年一度の檢閲に叱らるゝのが恐くて、隊長以下ビリ／＼したものだ。彼は氣むづかしい將軍で旅館の女中でさへ、兩戸の明けたてに、一苦勞したとのであつた。將軍は日清戰役に山縣第一軍の參謀長をつとめ、日露の役に師團長となり、後大將に榮進した人である。

僕は此時代同期の小林少尉と將校集會所に起居を共にし、最も親しい仲柄だった。一日休暇を利用

し共に和歌山より奈良に旅行した。出發の際別に打合す處なく、御互の懷中は大丈夫だらうと呑氣に出懸けたが、奈良の旅館で初めて其迂闊さが分り、遂に二人は財布を投げ出し計算を初めた。其結果は買った土産を賣り戻し、全く無一文で辛うじて歸つて來たことがある。これは深山時代に於ける笑話の一つである。

此時代中少尉は衛戍巡察と稱し、一ヶ月少なくとも、一、二回、砲臺内の巡視を命せられるのが例だった。真關の山路を唯一人で歩けば、軍人だからとて、氣持よい筈はない。然し流石は腰の軍刀が物を言ひ、軍裝の身は天下何物も恐いものなき別人となることを體驗した。

加太町に淡路屋と云ふ旅館がある。これは陸軍の御用宿兼御用商人で、僕等の爲め何かと便利を與へて呉れた。又陸軍の大官小官、此の地に來るもの、殆んど全部は此家で食事、宴會、宿泊、用達の世話を受けた。此旅館におさわと云ふ美人があり、愛想よく接待するので評判だった。僕等もよく月琴を弾いて遊んだが、彼女は後某大尉の妻となり、子供まで設けたが中年にして死去したと聞いてゐる。

又此時代僕はよく野口篤大尉の家庭に遊び、主人公の尺八と月琴を合奏した。田舎のことゝで、他に慰安もなく、獨身組の僕等は日曜毎に、先輩の家で、何かと遊ばして貰ふのが常だった。間もなく僕は射撃學生として戸山學校に分遣され、大久保の下宿より、堀田丈五郎少尉と共に二ヶ月間通つ

た。毎日射撃ばかりやつたが、要するに射撃の要訣は心、指、視の一致が肝要だと教はつた。僕は歸隊後この要領を傳授し、其任を果した。僕は今日大久保の繁華なるを見て、今昔の情に堪へない。僕は晩食後堀田氏と同伴、四谷方面に露天の古本屋を素見するを唯一の日課とした。

要塞砲兵隊は、毎年秋季に砲臺演習と、實彈射撃演習をやる。僕等は由良及友島の砲臺で此演習に中隊長として参加し、一砲臺の指揮を練習した。

或時友ヶ島の演習中、數日に亙る荒天に遭ひ、陸地との交通は遮斷し、糧食は缺乏し、命旦夕に迫つたことがあり、又中隊が三艘の舟に乗り深山に歸る途中、紀淡海峡の中程で、その一艘が轉覆し、他の二艘により救助されたこともある。この時僕は救助組の指揮官だつたが、要塞砲兵は海に關心を持つこと多く、特に監的船曳行の時など終日小蒸氣船に乗り、射彈の觀測をするなど全くの海上勤務である。越えて三十五年一月砲工學校に入校した。砲工學校は砲工兵科の士官に専門の教育を授くる所で、本校の成績は將來の運命に關する關ヶ原であるだけ、學生として頗る眞面目に勉強するものが多かつた。普通科は一年で、見込あるものは更に選んで高等科學生とし、一ヶ年間教育を補足し、其中最も優秀なる一二は、帝國大學、若しくは海外駐在員に出す規定である。砲工學校は、數學を基礎とする兵器、射撃の理論的學課が多く、従つて高等數學、物理、化學を教授し、其他外國語を初め馬術をも授けに。砲工學校は時間に比し課目多く、高等學校、士官學校、戸山學校などに比し、盛り澤

山の處だつた。學生はよく疲勞のあまり講義中居眠りを初めた。特に馬術後の語學の時間に多いのも最もだ、本校の教官は概して其道に明るき砲工兵科の將校で、中にも教官、武田三郎中佐の火砲理論の講義は、其蘊蓄ある學識と明快なる説明に、學生を感動せしめた。同中佐は後に工學博士となり、東京灣要塞司令官を以て現役を退いたが陸軍では有數の學者だつた。

僕は普通科の末期に中尉に昇進し、次で高等科學生に選ばれ更に一ヶ年間在學を命せられた。此時選に入つたものは二百名中三十八名だつたと記憶する。高等科の一年は對露問題の逼迫した時で、戸水博士以下所謂七博士の主戰論あり、滿韓交換論あり、非戰論あり、一方緊急閣議あり、元老會議ありで、血に燃ゆる學生としてデット講義を聴くには、あまりに騒がしい世間だつた。僕等は自習室にストーブ會議を開き、今にも動員下令ある如く噂し、勉強氣分に多少の弛みを見せて來た。三十六年四月、砲臺見學として廣島、吳に出張し、築城と備砲に關する實地の研究をやつたが、それでも一日宮島に遊ぶだけの餘裕を與へて呉れた。吳の海軍工廠は、立派に整頓され初めて見た僕等を驚かした。此旅行での思ひ出は、瀬戸内海の船中で、悲憤慷慨、大言壯語して軍歌を合唱し、踊り狂つて、日露開戦論に花を咲かせたことだつた。此元氣潑洩たる當年の青年將校も、今は残り少なく、然も現役者の皆無となつてゐるのも心細い。

此時、大阪に内國博覽會があり、學校はこの見學をも許した。又大阪砲兵工廠の見學をもさせた。

然し例の室内作業で遊ぶ暇もなかつたが、それでも、淀川に舟を浮べ半夜の清遊を食ふことは出来た。

僕は大阪の地は初めてであり、全くの素人だったが、只煙突の多い、こせ／＼した町で、見るものとしては、忙し／＼な小僧さんの自轉車乗りと、天満橋附近水境の美が記憶に残つてゐるだけだ。

十一月卒業期を前にして、戦術實施の爲め、甲府地方に出張した。戦術實施と云ふも、そんな權威のあるものではなく、篠田參謀教官の許に日々野外に出て、問題を貰ひ地圖と睨み合つて現地を研究し、決心、理由、處置等を筆記答解し、又宿題を貰つて翌日提出すると云ふに過ぎない。此時甲府附近は極めて寒く爲めに同僚秋光武司氏は、半顔面神経痛に罹り中途歸京した位だった。

僕は本校在學中、中尉となつて、間もなくムラ子と婚約を取り交した。本件は仲介者進藤秀松主計正（後主計監）を通して里方より申出があり、國許より來た父が交渉に當り、速かに話が纏まつたもので、極めて迅速に決定した。次で里方一家は金澤に移住し、越中町の我家の隣りに居を定めた。此家は我家とは庭傳ひに行ける位近いものだった。

僕は休暇後、岸本俊夫、秋光武司兩氏のある大久保の須永下宿に同宿した。岸本氏は同聯隊の同期生で、士官學校は首席で卒業し、後陸軍大將に榮達した逸材であり、秋元氏も同じく同聯隊の同期生であつたが、不幸病に罹り大尉時代に物故した人である。僕は學ぶも遊ぶも、朝夕の食事まで常に一

緒にしたもので、特に岸本氏は僕の造兵廠在職時代の長官であり、特別多大の指導に與かつた人である。

砲工學校在學二年は、多忙の中に夢と過ぎ、茲に明治三十六年十二月二十二日、芽出度卒業するの榮を得た。當日は恭くも

明治大帝陛下の御親臨を仰ぎ、陸軍大臣、參謀總長、教育總監侍立の許に嚴かな式は擧げられ、僕等は恐れながら、大君の御前、數歩の處で、校長の捧ぐる證書を拜受するの光榮を得た。此光榮に浴した一代の盛儀は思ふだに、恐懼感激に堪へない次第である。

僕は卒業式を終り、十二月二十六日金澤に於て結婚式を擧げた。

又學校卒業と同時に、横須賀要塞砲兵射擊學校に乙種學生として、二ヶ月間入校を命ぜられた。これは規定による卒業生一同の入校であつたが、落付きの悪い時に直面して多少いや氣がせんでもなかつた。僕は此時大津の下宿より徒歩で日々通學した。

學校の教へるものは射擊専門の實科教育で、砲工學校教育と相俟つて、其完璧を期するのが目的であつた。此頃戦争氣分は刻々と切迫し動員の下令も、目睫の間に迫りいやが上にも物情騒然たるものがあつた。

二月に入り間もなく、富士の裾野に射擊演習として出懸けたが、已に廟議は決定し茲に全軍動員と

なつて學校は解散となつた。一同萬歳を三唱し演習地を退散し、一旦横須賀に歸つた後、由良の原隊に急いだ。時に明治三十七年二月六日だつた。

本校教官に吉田豊彦大尉があつた。大尉は岸本大將と同じく、「由良要塞砲兵聯隊出身の、陸軍大將で造兵廠長官時代特に長く引立を蒙り、格別によく面倒を見て貰つた恩人である。

第九、日露戦争時代

其一、青泥窪上陸まで

十年に互る臥薪嘗膽、隱忍自重の我が國も、不遜不信の横暴極まる露國の振舞に、最早堪え切れず、遂に、三十七年二月五日、國交は斷絶し、干戈の間に運命を決するに至つた。翌六日、東郷聯合艦隊司令長官は麾下艦隊を率ゐて、佐世保軍港を發進し、二月九日には仁川沖に海戦起り、爪生艦隊は露國巡洋艦、ブリヤーク、コレーツを撃破し、木越旅團は仁川に上陸し、翌二月十日には露國に對し宣戰の詔勅が降されたと云ふ、電光石火の活劇の許に、いよ／＼日露戦争の本舞臺は開かれた。此の時全日本は津々浦々に至るまで、應召兵士の見送りと、戰勝號外の喜びと、萬歳の聲に充ち満ちた。

僕は射撃學校解退後、二月十一日の紀元節に聯隊に歸り、直ちに警急配備として某砲臺に立ち籠もり、一切の戦闘配備に萬違算なき様、日夜其實施に當つた。其砲臺は某海峽を防禦する戰略上樞要な地點で、之れを守備する僕等は一寸も油斷なき様慎重にこれ勤めた。當時守備兵は疑心暗鬼で動もすれば、某々海面に露艦の通過を見たとか、某所の監視所は、「サーチライト」に照らされたとか、色々噂をしたものだが、僕等は只々沈着に何時でも火蓋を切り得るよう萬端の準備を整へるのみだつた。此間守備兵の訓練と戦闘射撃の豫行を怠らずやつたが、晴の戦ひに出征も出來ず、無念に思ひながら長く待期の姿勢にあつた。

此頃第一軍は已に、朝鮮北部を掃蕩して鴨綠江を渡り、海軍亦旅順口攻撃と數次に亘る港口の閉塞で、ペトロパウルスクを沈没せしめマカロフ提督を葬つた。第二軍は金洲、南山を奪取し、旅順要塞を孤立せしめ、將に攻城軍は編成せられんとする時機だつた。

五月一日 午後一時二十分遂に第四師團第七動員は命せられ、徒歩砲兵第二聯隊及由良要塞砲兵聯隊は編成さるゝに至つた。僕等は徒歩砲兵第二聯隊の要員として、乃木第三軍の隸下に入り、旅順攻略のため出陣の名譽を擔ふのだつた。僕は早速某砲臺を後任者に譲り、福良町に歸り、編成の完結に没頭した。僕の職務は、大隊副官として大隊長上島善重少佐を輔佐する役目だつた。この時編成された徒歩砲兵第二聯隊の聯隊長以下は左の如くである。

聯隊長	中佐	公平忠吉
副官	中尉	岸本俊夫
第一大隊長	少佐	辻岡友造
副官	中尉	小林鉦一郎
第一中隊長	大尉	成川松巳
第二中隊長	大尉	隱明寺敬治
第三中隊長	大尉	佐藤潔
第四中隊長	大尉	宮下善舌
第二大隊長	少佐	上島善重
副官	中尉	長谷川鉄次郎
第五中隊長	大尉	安井義之助
第六中隊長	大尉	掛札秀之介
第七中隊長	大尉	佐中幸之介
第八中隊長	中尉	山森正雄

徒歩砲兵第二聯隊は、徒歩牽引の十五珊米白砲隊で、六門編成の中隊八個を、二個大隊に分けたも

のだった。

僕は福良にあつて第二大隊を編成し、暫く應召者の設營、被服、裝具、兵器、彈藥の支給、其他命令の傳達、連絡に従事し、十日間で完全にその編成を了し、待期の姿勢についた。此間官民の送別會、金澤よりの來訪、中井、福井兩夫人及妻などの披露宴、其他同僚仲間の留送別會等半公半私の應接で寸暇を得なかつた。これがため三木、藪萬の兩旅館は賑はつたものだ。

六月十二日いよいよ出陣として屯營地福良を出發した。此日は朝來より豪雨で、ドシヤ降りの物凄

い中を、大隊長を先頭に喇叭の聲も勇ましく隊伍堂々洲本に向つて發進した。沿道の軒々は國旗を掲げ、老若男女は出で、送つて呉れたが、肅然たる中にもシクシクと泣く女の聲や、一側より飛出し我子に近寄らんとする老婆の姿さへ見えて、歡喜の中に一種悲哀さを感じしめた。

此日大隊の將兵約一千人はビシヨ濡れとなり、戰鬪教練を行ひながら、養宜村に著き一泊し、翌十三日洲本町に著いた。此地に滞在すること五日、漸くにして六月十八日神戸に向ひ洲本を出帆した。この際見送りの盛んなること、福良町以上で、由良戰時指揮官伊智地少將を初め名譽職員、男女學生團以下多數のもの、國旗と萬歳で熱狂的に送つて呉れた。

に御用船配給の関係で、七月四日に至る半月の長い滞在をなしたので、色々の思ひ出も深かった。神戸は湊川神社の正式参拜を初め、聯隊長、神港俱樂部服部、知事の招宴、同期生會の開催は固より、小杉丑兵衛氏、仁保龜松氏、續いて京都より兄の來訪、福良より井谷氏の訪問、其他有馬温泉、中の常盤、吟松亭、加藤旅館に於ける私的會談に至る數限りなき連日の勤めで半分は面白かつたが、大いに疲労した。然し多忙の中にも、時には故郷の山河や、旅順の空を夢みるだけの誠意と、勇氣は失なかつた。

大隊本部の主人、大島兵太郎氏は金澤人であつた爲め話が合ふのみならず、當家の家族は悉く熱心なる軍人信者であつた。其女中に至るまで皆然りで、石井まつ子の如きは戦役間數ある同宿者に對し、主人と共に新聞を送り手紙を呉れて大に後援した。又神戸藝者の佐々木美代野の如きも軍人狂と云はれる程熱心なる後援者で、日々通過する幾回となき出征兵士を片つばしより、停車場に送迎し、大事の商賣はそつちのけの奇特者だと聞いてゐた。此等二人はほんの一例に過ぎないが一般神戸人の軍人に與へた印象は頗る深く、感謝なしには居られない思ひをした。斯くてこそ兵士は喜び、戦は強くなり、國威は益々宣揚さるゝ理で、當時獨り神戸に限らず、全日本國民は皆斯の如く、誠心誠意全力を擧げて後援したので、彼の如き大勝を博したのであつた。大隊本部の護衛巡查に清水政爲と云ふのがあつた。偶然にも彼は山下一義氏の親類で舊知の金澤人だつた。互に久闊を述べ其奇遇を語

つたが、聞けば十年前郷里を引拂ひ當地に來たとのことだつた。世間は廣い様で狭いとはこの事である。

滞在中頭を悩ましたことの一つは、兵士の懲罰問題だつた。何にしろ、血氣盛りの若者揃ひのこととて、花柳の巷に親む傾向から、動もすれば晩の點呼に遅れるもの相當多く、僕等も心情大いに察したが、さりとて軍律は飽くまで嚴肅たらざるべからず。遂に警察に依頼し、一時拘留所を借り受け、以て營倉に代ふることにした。軍醫は此豫防に相當骨を折り、中隊長は滞在間の心得を諄々と話し聞かせた。

七月四日午前九時、いよ／＼僕等はみかどの國に別れを告げ、晴の首途に上ることになつた。幸ひ此日は天氣晴朗で、見送の人は棧橋より海岸一帯にかけ山の様に群がり、無慮幾萬を算へた。萬歳の聲は天地に響き、波間隔て、白きハンカチと、赤き日の丸が人波に入り亂れて打ち振らるゝ光景は實に一幅の活繪畫であつた。

船は土佐丸で、七千噸級の大船、機關長は英國人だつたが、御用大事に西へ西へと進ませた。航すること四日、船は軍艦筑紫護衛の下に七月八日午前十一時青泥窪港につき投錨した。

其二、旅順攻撃參加

青泥窪港内に假泊すること五日、漸くにして七月十三日上陸を開始した。先づ火砲材料の揚陸より人員の上陸となり、終つて後岡子附近に一同村落露營をした。當分此處に滞在し前進の命を俟つた。此時大山滿洲軍總司令官、兒玉參謀長の一行は青泥窪に上陸し北方に向ひ、第三軍の各部隊は一齊に旅順を指して前進中だつた。大隊は双頂山に監視所を設置し、前田吉平中尉を所長として派遣したのみで、他はまだ前進準備に専念するばかりだつた、稍々あつて前進命令下り、前牧城址を経て張胡溝に露營したが、此日の行軍は非常に混雜し加ふるに降雨さへあり、大隊の先登は晩七時に到着したのに關はらず、其の最後は實に翌日、午後二時に至つた程の澁滞さだつた。然も喰ふに食なく、燃くに薪炭なく、漸く支那家屋より高粱を徵發し、附近の倉庫より糧食を借り受くることにより漸く飢を凌ぐ位だつた。斯の如くにして僕等は戰鬪苦の前場をつくづくと味ひながら、此の地にあつて専ら攻撃準備を整へた。従つて砲臺の構築も陣地の偵察も皆此地より出懸けてやつたものである。

八月三日午後三時頃、僕は馬丁藤島長次郎を従へ、龍頭附近を乗馬で行進中、大孤山より打出す史火彈の破裂するに驚いた。コハ危しと見て馬を躍らし駈足を以て、龍頭川を渡らんとする刹那、最後の一彈は遂に頭上に破裂し、爲めに直後にあつた馬丁を負傷せしめた。僕は幸ひにして無事なるを得

たが、それでも頭部と肩部に米粒大の破片を受け、帽子と上衣に小彈痕を残した。頭は僅かにかすり傷で済んだが、馬丁藤島には氣の毒だつた。彼の負傷は左背部盲管砲創と左上膊骨折で、直ちに周家屯の野戰病院に入り間なく内地に歸つたが、その後回復したので喜んだ。僕は戰線巡視の第一歩に於て此厄に遭つたが、後より聞けば此地附近は今日までよく狙ひ打ちされた處だとのことだつた。それ以來僕は、戰役間時間に餘裕ある限り、慎重に情況を研究することにした。

八月七日攻城砲司令官豊島陽藏少將より左記要領の訓示を受けた、

訓示

軍が旅順の攻略を急ぐの必要あるは、今更余の喋々を待たない。殊に攻城戰占領後、攻城砲の砲撃開始に至るまでの時日を、なるべく短縮することは攻城の要訣で、余等攻撃の特種作業に任ずるもの努力すべき義務である。之れを以て余は曩に攻城準備作業並に攻城砲兵の展開に要する時日を、十日間と豫定し、之れに應ずる細部の計畫を規定した事、已に諸子に示した通りである。其後敵狀其他の原因により、幾分の相違を來たしたが、軍目下の狀況は豫定放火開始の時期を遷延するを許さない。故に攻城砲兵として其工事の完全なると否とに不拘、明日より十月の後即ち來る十八日を以て砲撃を開始する。諸子が今日萬難を排して日々所命の作業を遂行しあるは、予の信じて疑はざる所なるも、又一方より考ふるに諸子が努力の程度は即ち砲臺完備の程度にして、其反影する處は砲臺

守備員掩護の確定如何にあると思へば、更に一層の努力を要する。諸子深く此の點に注意し、守備兵をしてなるべく損害を被むること少なからしめ、火炮の威力を充分に發揮せしめ、以て軍の勝利を期すると同時に、攻城の初陣に出途せる我要塞砲兵の名譽を保全せんことに努力されたい。

三十七年八月七日

攻城砲兵司令官 豊島少將

以上の如く總攻撃開始前の十日間は、攻城砲兵に取り戦闘以上の戦闘で僕等は毎日砲兵觀測所の構築と、彈藥の運搬に全力を注いだ。此間連日の淋雨は溪間より土砂を流し、道路は泥濘と化して脛を没し、敵の探照燈は雨を透して我が陣地を照し、加ふるに雨と降る敵彈は頭上をかすめて思はず心を亂すなど、何れも僕等の作業を著しく妨害した。殊に道路の濘惡は、彈丸の運搬を極度に困難ならしめドブ糠の様な道は車輪の轂を没し、雨は愈々繁くして止む時なく、時は刻々に進みて再び戻らず、只徒らに雨中の晝を暗黒の夜に代ゆるのみだった。然も總攻撃開始の日は徒らに遷延を許さずとの達示あり、全く泣くに泣けない非常時の場面だった。茲に於てか將校はズブ濡れとなつて飛び出し、持ち上ぐるが如くして車を前曳きし、裸足の下土又後押をなすなど、其苦心の程は映畫としてさへ見られぬ有様だった。斯くの如くにして疲れ切つた可憐の兵士を救ひ、其の恢復を計り、以て運搬繼續の大任を果さんとする奉公の一念こそ、眞に涙なくして見る能はざる戦闘前の闘苦の一つだったと確信する。

旅順要塞第一回の總攻撃は八月十九日午前五時開始された。全軍の砲兵は一齊に火蓋を切つて敵壘の破壊につとめた。僕等の大隊は前面の堡壘、東鷄山に向ひ、砲火を集中した。全線に互る砲聲は天に轟き地に響き、爆煙は蔽ひ火煙は上り、全山、爲めに一場の修羅場と化し去つた。然し暫くは狼狽する敵兵の彼の地、是の谷に逃走するを見るのみで、敵は固く沈黙を守り容易に放たなかつた。これ或は我軍陣地の配置を知る爲めの、魂膽だつたかも知れぬが、八時十分に至り漸く敵は其第一發を放つたので、茲に初めて彼我の交戦となり、大劇戦が演ぜられた。

東鷄冠山竝に砲臺に送る我が集中彈丸は、最も猛烈を極め、之れがため各所に火災を起し、砲臺は破壊され、破片は守備兵を衝へて高く天空に舞ひ上るなど、さながら地獄の光景を呈し實に壯絶慘絶の限りであつた。斯の如くにして午後四時、敵砲臺の半は沈黙したが、砲戦は尙は盛んに繼續された。

第二日も同様、全砲兵の猛烈なる射撃を行ひ、十一時五十分遂に東鷄冠山の火藥庫は爆發した。火煙は濛々として天を蔽ひ、我が軍勢に乘じ益々猛烈に砲撃を加へた。此時全要塞の蒙つた我巨彈の彈痕は、蜂の巢の如く孔を穿け、砲臺構築物亦殆んど破壊されたる如く見えた。茲に於てか軍は、機至れりとなし、全線に互り總突撃を行ふことに決し、こゝに愈々二十一日、拂曉を期して全線一齊に突撃を命じた。砲兵は主として前面の散兵壕と鐵條網を射撃して歩兵の突撃を援助し併せて敵砲臺を制

壓した。斯くの如くにして猛烈に突入したる勇敢な第一線部隊も、難攻不落の堅壘よりする機關銃の猛射を受けては、一たまりもなく美事に打倒され、幾何も残るものなきまでに損害を蒙つた。斯くして折角の總攻撃も功を奏することなく中止するに至つたことは遺憾千萬である。只僅かに東鷄冠山東西砲臺を占領しただけせがめても効果だつたと云へよう。

我軍の攻撃に對する敵兵よりする機關銃の猛射は見るからの地獄で、僕は觀測所より親しく此實況を目撃し、何とも言ひ得ぬ思ひをした。次から次へと突入する我が突撃兵は、斜面や散兵壕の中で、風に木の葉の散る如く、バタバタと倒れる。中には身に數彈を受けながら尙も屈せず勇敢に突撃するものあれば、今將に息を引取らんとして、天皇陛下の萬歳を叫んで、從容死につく勇士もあり、或は死體の腕に残る時計のみが、まだコチコチと其のセコンドを刻んでゐるのもあつて、此凄慘極まる情景を見ては、如何に國家の爲めとは云へ、誰か同情の涙を禁ずることが出來よう。僕は眼前に此の光景を見て只感激するのみだつた。要するに第一回の總攻撃は、莫大なる犠牲を拂ひ、多大の損害を受けたと云ふに過ぎなかつた。八月二十四日、參謀總長より左の勅語を傳へられた。

勅語

旅順要塞本攻撃開始以來、晝夜此の壘城決死の守兵に肉進し、進に其二壘を抜き益々奮進の途にありと聞く、炎熱の候に際し、連日の困苦轉た軫念に堪へず。

朕深く爾將卒の勇武に信賴す。爾將卒一簣夫れ九仞の功を全ふせよ。

以上の聖旨に對し全軍の將卒只々恐懼感激し、一意戰勝の大任に向つて邁進せんことを誓ふのみだつた。

この時第三軍司令官乃木大將は、左の訓示を全軍に通達した。同將軍の心境又察するに餘りある。

訓示

茲に我が軍の將卒に告ぐ。

夫れ旅順の要塞は敵軍の特んで難攻不落となす所、而も諸子の勇武なる連日連夜攻撃、以て第一第二防禦線を略取し進んで本郭に肉迫せり。

見に於てか我

大元帥陛下、皇后陛下、皇太子殿下深く諸子の忠誠を嘉し、曩きに優渥なる勅語及び、令旨を賜ひ、今又侍從武官、東宮武官を派して諸子の勞を犒らはしめらる。我が軍の光榮亦餘ありと云ふべし。獨り憾む諸子の戦友にして敵彈に斃れ、此の天恩を拜する能はざる者鮮しとせざるを。諸子それ更に感奮興起せずして可ならんや。希典固より信ず、諸子の堅忍不拔なる、一難を経る毎に猛氣百倍し、來て遂に九仞の功を一簣に全ふせん事を。

曰者諸子の新戦友陸續來著し、攻城材料亦漸を以て多きを加へつゝあり。而して對壕作業は刻々其

歩を進む、敵は窮鼠の頑を以て残壘を死守するも、已に其の圍郭の二堡を失ひ兵力は日々減衰し、彈藥は盡くるに垂んとす。諸子にして耐忍健闘し機を見て更に絶大の打撃を加へんか、其の運命や知るべきのみ、惟ふに旅順陥落の遅速は全般の戦局に關する大なり。而して北方の皇師は既に敵の大軍を遼陽に撃破し、宇内萬邦の視線一に此の旅順に集まれり。斯の時に方つて我軍之れが合圍の任に當る。惴に軍人の素懐ならずや。希典望むらくは、諸子と共に奮ひ我軍の威武を發揚し、速に攻拔を奏し以て天恩に答へ奉らんことを。

明治三十七年九月十一日

第三軍司令官 男爵 乃 木 希 典

僕は此訓示を見て旅順要塞の陥落の遅速が我軍略上、如何に大なる影響を及ぼすものなるかを知ると共に、軍司令官の決意の程も想像するに難くなかつた。

總攻撃不成功後、八月二十七日の夜は雷鳴と共に豪雨さへ伴ひ、假眠の陣地を襲つた。やがてけたたましい機關銃の音と、銃砲の聲が聞えて來た。それ「敵襲だ」、「夜襲だ」、「前面だ」と騒ぐ遠吠さへ聞えたので、僕は大隊長と共に最先に飛び出し非常呼集を令し、執銃させて砲側へと急がした。然し寸前真黒で見境もつかず、頗る狼狽して持場に辿りついたが、別に何事の異變もなく、「闇から棒」式の一騒ぎを演じたに過ぎなかつた。聞く處によれば夜暗に乗ずる敵の逆襲に對し某一線部隊が之を

撃退したことが分つた、以後斯る日に特に警戒を嚴重ならしむる如く注意した。

第一回總攻撃失敗後、軍は坑道による正攻法を取るに決し、日夜塹壕作業を急いだ。其結果九月十八日より更に總攻撃を再舉し一部突撃を實施した。結果は成功ではなかつたが幸にして第九師團により龍眼北方の高地を占領し、第一師團により、水師營南方高地の四個の角面堡を奮取し、又第一旅團により海鼠山一帯の高地を我が手に收むるを得た。續いて十月二十九日より第二回總攻撃は開始されたが、P砲臺及瘤山砲壘の二壘を奮取したのみで、概して不成功に終り失敗を繰り返したに過ぎなかつた。

然し軍としては一難を経る毎に勇氣百倍し、弛まず屈せず、根氣よく坑道作業を繼續し、次の成功に備へた。

十一月三日は征露第一回の天長節で、天氣はよし、敵前ながら朗かな氣分で、このよき日を祝福した。此日は特に加給された清酒を酌み、一同東京の空を拜して
陛下の萬歳を三唱した。

對陣間、僕等の陣地は時々敵彈に見舞れ、爲めに大隊本部の天幕は打貫かれ、砲側は破壊され、前田少尉以下數名の犠牲者を出した。對陣中は攻撃の時でなくても一日、片時として砲聲を聞かぬことはなかつた。それは、それ程長い攻城陣地の何處かで、必ず打ち合つて居るからであつた。

戦闘で一番困るものは彈藥の不足で、それは内地製造の不十分より來るのであるが、射撃の都度彈丸の數を制限されたには閉口した。今日軍需工業を刷新し其生産能力の増大を計つて居るのは皆此苦い經驗から來て居る。

鮫島中將、曾て軍司令部にあつた時、戦線を巡視し其の長く戦況の進展せざるを慨し

來て見れば 今日又昨日を繰り返す

彈丸に限りの あると知らずや

と歌つた。之は當時の状況をよく穿つてゐると思ふ。

十一月二十六日、第三回目の總攻撃は決行された。聯隊は新た構築したる陣地より二十八瓏米榴彈砲を以て二龍山及松樹山砲臺を砲撃した。初めて使用した本砲の威力の絶大さには、敵も味方も驚いた。同時に聯隊は十五瓏米臼砲と、戦利加農を以て第十一師團の攻撃を援助したが、之又失敗に終り、徒らに多數の犠牲を拂ふのみだつた。茲に於て軍は萬難を排して、二〇三高地の占頭を決意し、第一師團及第七師團の如き、殆んど其全員を犠牲としてまで戦つた。其結果遂に成功し十二月五日確實に占領せられ、我が軍の手に收めた。この報一度到るや全攻圍軍の志氣大いに昂り、手の舞ひ足の踏む處を知らなかつた。攻城軍は直に重砲を以て港内軍艦の射撃を開始し、聯隊亦二十八瓏米榴彈砲を以て之に参加した。多數の命中彈は多大の損害を與へ、或は傾け、或は沈め以て敵の東洋艦隊の殆

んど全部を、數日ならずして撲滅せしめた。茲にいよ／＼旅順陥落の端緒は開かれ爾後順調に攻撃は進展された。之より先き十一月二十四日第三軍に左の勅語を賜つた誠にかしこき極である。

勅語

旅順要塞は敵が天嶮に加工して金湯となしたる處なり。其の攻略の容易ならざる素より怪むに足らず。

朕深く汝等の勞苦を察し、日夜軫念に堪へず、然れども今や陸海軍の情況は、旅順攻略の機を緩ふするを得ざるものあり、此の時に方り第三軍總攻撃の舉ありと聞き 機を得たるを喜び成功を望むの情甚だ切なり、汝等將卒夫れ自愛努力せよ。

何んと恐多い御言葉ではないか聖旨の程只々感激恐懼するのみである。

此勅語に對し軍司令官は左の奉答文を捧げた。

奉答

旅順要塞の總攻撃に關し、

勅語を辱ふす。臣希典感激恐懼に堪へず。將卒一般深く聖旨を奉體し誓て速に軍の任務を遂行せんことを期す。謹んで奉答す。とある。

忠臣無比の第三軍司令官は、以上の如き奉答文を奉つた。僕等は將軍の心中を察し只涙あるのみだ

つた。

十二月十七日更に乃木軍司令官より左の訓示が下つた。

訓示

旅順要塞第三回總攻撃を實施せんとするや、事、上聞に達し、畏くも特に優渥なる勅語を賜ふ。希典答らく我軍の將卒深く聖旨を奉體し、誓つて速かに軍の任務を達成せんことを期すと。是れ諸子が熟知する所なり。惟ふに第三回總攻撃に於て千古殆んど稀なる勇敢壯烈の攻撃を實施したるものは是れ豈將卒一般深く聖旨を奉體したるの致す所にあらずして何ぞや。諸子が奮闘に對し、本防禦線の攻撃は豫期の如く成功せざりしも、敵が全力を擧げて頑強に抵抗せし、二〇三高地は十二月五日を以て我が有に歸せり。蓋、該高地は旅順要塞の死命を制すべき要塞にして其占領は實に港内に於ける敵艦隊の全滅を促したり。即ち二〇三高地の占領後一週日を出でずして敵の堅艦は殆んど我重砲彈の爲めに撃沈せられ、目下餘す所は僅かに小艦數隻に過ぎず。此等殘艦の餘命亦指を屈して算へ得べきのみ。

敵は既に衣食に窮せり。其の戦員は減耗せり。加ふるに彈藥も亦將に竭きんとす。此窮境に際し我重砲は日夜敵の殘艦と、要塞内部にある軍用資源とを破壊しつゝあり。又敵の本防禦線中其重要な點に對しては諸子が堅忍と勇敢とに頼り益々肉迫せり、之れを攻略するの時機遠きにあらざるを知

るべし。

今や時近寒に向ひ攻撃の活動逐日困難の度を増進すると雖も、亡战友諸子が勇敢忠烈以て殉國の義を致したる所以を回想すれば、豈感奮興起せずして可ならんや。諸子が君國の爲めに盡す、正に此秋にあり諸子奮勵努力せよ。

明治三十七年十二月十六日

第三軍司令官 男爵 乃木 希典

僕はこの勅語と、軍司令官の訓示を讀んで感極まつて言葉が出なかつた。恐らく全軍の將兵皆同様だつたと考へる。

此頃敵はいとゞゞ彈丸に缺乏したと見え、よく不發彈を發射して我軍を喜ばせた。又古彈を再利用し空中で異様の音を出させた。僕等は之を汽車彈と稱しあざけた。斯くの如くにして敵は著しく彈藥に窮したと共に我軍の情勢は二〇三高地占領以來頗る有利に展開した。十二月十八日には第十一師團により東鷄山北砲臺は爆破され、鮫島師團長自ら總豫備隊たる、歩兵第三十八聯隊を率ゐ第一線に突入し、奮戦の結果遂に午後七時に至り確實に占領した。陣中の一同思はず萬歳を叫んだ。

十二月二十八日には午前十時第九師團により二龍山砲臺は爆破され、同時に猛烈なる重砲火の攻撃と最も激烈なる接戦により之又午後七時遂に占領するを得た。此戦闘に於て我聯隊の勳功は認められ満

洲軍總司令官より感狀を附與された。感狀文左の如し。

感 狀

徒歩砲兵第二聯隊

右は十二月二十八日敵の要塞北面の重點と頼みし二龍山堡壘を攻撃し、椅子山、案子山よりする敵の猛火を冒して終日奮闘劇戦、遂に頑強の敵を撃退し、確實に此の重要な堡壘を占領せしは其の功著大なりと認む、依つて感狀を附與す。

十二月三十一日午前十時、第一師團は松樹山砲臺を爆破して突撃を決行し激戦の後之れ又午後二時完全に占領した。

越えて三十八年一月元日、支那圍廓を初め盤龍山新砲臺、H高地、野臺、N砲臺、R砲臺、東鷄冠山砲臺及其の附近一帯はそれ／＼前面師團の手により占領され、遂に敵をして開城の已むなきに至らしめた。思へば三十八年の元旦は僕等に取りて忘れ難い愉快なる日だった。

此日午後四時三十分、敵の軍使は我水師營南方の第一線に來たり開城の希望を告げ、翌二日早朝我軍使は同所に於て承諾の旨を傳へ、茲にいよ／＼開城條約は締結さるゝに至つた。これは實に上、陛下の叡慮を安じ奉り、下一般國民の期待に添つた作戦上最も大切なる戦局の一段落だった。旅順要塞の戰場たる半歳の久しきに互り幾萬の血を流し骨を埋めた激戦奮闘の修羅場だったが、今や一變し

て、朗かな旭旗の許に彼我握手を交はす古戰場となり移つた。昨日の鬼は、今日の友ではあるが、降服の露兵を見ては、寧ろ不憐に感ぜらるゝのだった。

戦地の正月はかくして開城と共にいよ／＼朗かで、緑の門松は、土窟の陣地に翻々たる國旗と共に飾られ、一合の清酒は粗末な御雑煮と共に芽出度き新年を祝ふに十分だった。

僕は陥落後、敵砲臺の接手委員の副官を勤め、大隊長以下數名の將校と共に、黄金山砲臺に至り露軍委員と受授に關する打合せを行ふた。これは兩者立合の上兵器、彈藥其他一切の砲兵材料を受領するにあつたが、工兵委員は別に工兵材料、特に地雷埋没地點につき嚴密に實地を踏査し、其申送りを受くるのであつた。

或日白銀山砲臺に於て、彼我委員砲臺内の掩蔽部で會食した。其時、某露國大尉は「日本の將校は戦争には強いが、我が軍は兵卒が強い、將來日露同盟して共同戦線を張れば世界何物も恐るゝに足らず」と豪放した。僕は「日本は東洋平和の爲め貴國と戦つた、若し露國にして眞に永遠の平和を東洋の天地に求むるの意あらば、日露同盟必ずしも不賛成でない」と答へたが露國一大尉と、日本の一中尉が此外交談を交はすも滑稽だった。彼等は日本の小隊長が軍刀を引き抜き、いつも先頭に立つて突撃したことを勇敢に思ふたからだと思像した。

僕は射表受領の爲め、通譯を伴ひ旅順の要塞司令部に副長格の某中佐を訪れた。彼は懇懃なる態度

で僕等に應接し机上の抽出より要求の書類を渡した。話は別になかったが、唯一件だけ願事ありとて、一枚の紙に本國の住所と妻の名を記し、之れが電報方を依頼した。其用件はと聞けば「開城したるも無事なり」と報するにあつた。通譯は承知して之れに要する切手を受け歸つた。通譯の話によれば彼等はこゝ數ヶ月は、一切の通信は斷絶され故郷の情況全く不明だつたとのことである。

僕は受領委員の仕事で、露國某軍醫の官舎に宿泊した。固より主人も家人も居らぬ留守居だつたが、それは行李以外持出しを許されずして我軍に捕虜となつた空家だつたからだ。然し隣りの家には残留の看護長一人が居り、彼よりマカロニーの御馳走を受けながら話を聞いた。此家の主人は病院の副院長で、ビヤノ其他の裝飾品は贅澤品揃ひで、然も箆筒の中には日本産の友禪縮緬の振袖服さへあつた。僕は此看護長の勧めに従ひ紀念品として其一枚を貰つた。

一月十三日に旅順入城式舉行され、各部隊よりそれ／＼代表を出して、此盛典に参加せしめた。乃木大將は新市街の中央に位置し、乗馬のまゝ全軍代表者の分列式を行ひ、奏樂の中に堂々たる戦勝日本の威武を示して式を終つた。續いて、

翌十四日に水師營北方高地に於て第三軍戦病死者の盛大なる招魂祭典が舉行された。代表部隊の参加は入城式と同様で、僕も此祭典に參列する光榮を得た。思へば今日滿洲國の獨立して我國と同心一體たる關係に至れるもの、皆此の尊き犠牲者の賜物に外ならない。

旅順開城に關する公式の業務は一通り終了したので、僕は大隊附の主計中井三之助氏と大隊長の許を得て物資調辨のため大連に行つた。此日は早朝月を踏んで陣地をたち、長嶺子より汽車にて鯨島中將、加藤少將等の一行と一緒に青泥窪に行つた。僕等は將軍連と別れ、別に中井氏の知人丁汝來氏の宅に落ちつき、久し振りで娑婆の風にあつた嬉しさ、早速入浴をすませ、緩くりと支那式の食事を取つた。宿の主人は戦勝日本の將校を優遇し、早速小さい美少女フンエンを出して接待せしめた。見れば可愛らしい綺麗な娘でまだ十二、三歳に過ぎないが、將來傾城の卵子かと思へる程の御自慢の逸物だつた。丁汝來氏顔を出し筆して曰く「祝酒子杯何等快、寢食加新美女魚」と書き去つた。攻城間陣地の模様につき二、三の解説をすれば、攻城戦に於ける重砲隊の多くは砲臺の位置を低地若しくは物蔭に隱蔽し、其觀測所のみを高地に設け、以て射彈の觀測を容易ならしむるのが普通である。觀測所と砲臺とは電話により連絡するから、相當距離があつても差支へない。僕は毎日大隊の觀測所に通ひ、此處より精巧なる眼鏡によつて常に敵狀を監視した。又射撃に際しては同所より大隊長の命する諸元を電話で通達するのを任とした。言はゞ觀測所は火見櫓であるが、敵より見られては價値なしであるから、適當にカムフラージュをなし、且つ相當強力なる防護を施して土窟とするのが一般である。只對物鏡のはなるたけ小なる孔を設けて、前面の見える様構築することが違つてゐるだけだ。對陣中入浴に相當苦心したが、内地より追送品として來るビスキットの大鐘を應用して浴槽とな

し、之れを野天に据ゑ付けて間に合せた。この鐘は二尺四方もある角形のブリキ鐘で、一人用として辛うじて入り得べき大きさだつた。又水は容易に得難い處から、支那人苦力を使役し、石油鐘一パイを一錢で請負はせ、谷間より運ばすのだつた。支那人苦力は彈丸には大膽であり、運搬中時々此等の洗禮を受くることあるが、錢の爲めには危険をも敢て辭せなかつた。これには何か堅い信念があると聞いた。

對陣間内地より來る手紙には敬意を拂つて難有く讀んだ。又新聞、雜誌、慰問袋更に酒、煙草の如き恤兵品も豊富に貰ふので、不自由なしにやつて行けた。少し遠くに行けば、酒保の如きものさへあり、食料品外若干の日用品が賣られて居るのも重寶だつた。慰問袋ではよく話のあることだが、これが動機となり手紙のやり取りは勿論、寫眞の交換から更に進んで、結婚とまで實を結ぶものさへあると云はれた。僕も中山末子と云ふ顔しらすの婦人と手紙の交際をしたが年も知らず、職業も知らぬ程度で自然消滅となつたも無理からぬ次第だ。

大激戦が終了すれば彼我共に斃れた死體の收容を初める。之が爲め一時休戦するを例とする。豫め場所と時間を協定し、約束の時間が來れば擔架を以て死傷者を收容するのだつた。而して時間が過ぐれば再び打ち出すと云ふ如何にも紳士的なやり方で、全く文明の戦争だつた。實際戦死者に對しては敵味方の區別なく互に敬意を拂ふのが禮儀であらねばならぬ。我軍の將兵よく此間に酒樽を持ち出し

て酒を酌み合ひ露兵を搞つたものだ。露兵亦喜んで之れを受け敬禮して別れた。彼等は「祖國の爲めには敵となつて戦ふが個人としては親しき友である」との信念を持つて居る様に見えた。

僕は開城後早くも一月二日、大隊長に隨ひ敵の砲臺を視察した。先づ第一に東鷄冠山北砲臺の外壕が尤大で、壕幅及壕底が豫想に反し廣く、且堅固なるを見て驚いた。云はゞ猿とキングゴングのゴリラ程の思ひ違ひをしたのだつた。外壕内のベトン壁には古い肉塊と、黒く染まつた血痕が附着し、又潰れた土砂の下に、無數の腕なし死體や腸を露出した憐れな殘骸のあるのを見た。次に支那團廓より東鷄冠山砲臺に行つたが、砲臺内の通路で、計らずも露西亞の一人婦人に遇うた。彼女は某少尉の妻だと聞いたが、唯一人戦闘直後の血醒ぐさき此砲臺に姿を現はすなど、何か理由があつたとしても、實に大膽なるものかなと一同噂をした。

其三、奉天附近の會戰

旅順陥落後、砲臺受領、入城式、次で大招魂祭等一通りのプログラムを終へたので、僕等は攻城材料を撤收し、大孤山北方の龍頭村に移り同地で北進の命を待つた。聯隊は奉天附近の戦闘に参加する目的を以て、北進を命ぜられ、二月十三日遠く長興甸に向つて行軍することゝなつた。

此時僕は滿洲熱に罹り四十度の高熱に昇つた。已むなく本隊と別れ旅順兵站病院に入院する身とな

つたが、幸ひ經過は良好で間もなく平熱に降り、入院後一週間にして退院するを得た。此時大隊長野口篤少佐より本隊の所在地は五里街より西北方約二里、秀詳屯なることを知らせて来たので、従卒と唯二人汽車便にて原隊に復歸した。途中遼陽の停車場で兵站宿舎に一泊したが、時恰も嚴寒の候で、到着した夜半の一時は零下三十度だった。これは病後の僕には堪へ難い寒さで、眞に身に浸む思ひとしたのは此時が初めてだった。漸くの如くにして、二月二十四日、秀詳屯に到着したが直ちに、戦闘準備に取りかかり、紅綾堡の富岡枝隊と密接なる連絡を取り、陣地と觀測所の構築に全力を注いだ。觀測所は第一線に近く、常に小銃弾に見舞はれ、危険此上もない所だった。僕は此觀測所にあつて敵偵察中、午前十一時五十分、間近の掩蔽部に入り、食事に取りかゝつたが。此瞬間ズドンと一發大音響と共に觀測所の一部は破壊された。もう二分間も早かりせば僕の命は危なかつたかも知れない。總ては運命である。

大隊は富岡枝隊に屬し、滿洲軍の中央部に位する第四軍の中軸部だった。此時第三軍は滿洲軍の最左翼となり敵を遠くより迂回し、後方より之れに迫るべき作戰だった。

滿洲軍は二月二十三日より一齊に行動を開始し、最右翼の鴨綠江軍先づ靖河城を抜き、次で全軍攻撃前進を始め、茲に奉天大會戰の幕は開かれた。聯隊は前面の敵に對し威嚇砲撃を續行した。

奉天戰は其戰線數十里に互り然も運動頗る敏速だったので、刻々の戰況は全く不明で、只正面僅か

に二三里を知るに過ぎず、面白さから云へば旅順攻圍戰に比し全く雲泥の差だった。

三月一日より射撃速度を増加し、南沙河堡、小孤家子、大武鎮營、黒林屯に互る前面の敵を砲撃し、我歩兵の前進を容易ならしめた。此時二十八珊米榴彈砲の砲撃は、其威力頗る甚大で、敵も味方も舌を捲いて驚いた。我猛烈なる集中火に對し敵は十五珊米加農砲の迅風射撃を以て應戦し、茲に殷々轟轟物凄ひ戦闘を交へたが、三月四日には鐵道監視所附近の散兵壕及英禹の重砲陣地に多大の損害を與へ、以て敵を鎮壓し、次で三月七日、午前八時より官屯東方の砲兵陣地を猛烈に射撃し、之又敵に多大の損害を與へ、更に九時より漢城堡に目標を變へ、軍の砲兵相應呼して一齊に砲火を集中し、其威力最大に達した頃歩兵は前進攻撃に移り、十時急速に突進した。茲に於てか一大劇戰は展開され、肉飛び血は流れ、殷々轟々、悽絶言語に盡し難きまでに至つた。前進歩兵は更に益々勢を得て、幾度もなく突撃を繰り返したので、さすがに頑張る敵も遂に陣地を捨て、漸次退却を始めた。我歩兵隊、愈々益々猛進し、踊るが如くして飛び入り、以て大孤家子一帯を占領し、更に同夜引續き官屯及び高力屯、沙河堡等一帯の敵陣地を奪取した。尙も我軍餘勢を弛めず、退却する此等の敵兵を追撃し、以て敵を壊滅に陥入れた。

三月十日奉天を占領し一部の部隊は退却する敵をドン／＼と追撃したので、僕等の重砲隊は暫く留まつて後令を待つことになつた。

此戦闘に於ける我大隊の奮闘は花々しく、遂に軍司令官より感状を授與されるに至つたことは、一同の名譽此上なく、永く聯隊の歴史を飾らしめた。

感 状

徒歩砲兵第二聯隊第五、第六中隊

奉天附近の會戦に於て明治三十八年三月七日漢城堡附近の攻撃に參與し、他の砲兵隊と協力し、猛烈なる敵の砲火の下に、有效なる射撃を繼續して、堅固なる防禦構築物を破壊し、敵を制壓して大に歩兵の攻撃前進を容易ならしめたり。且強大なる數回の逆襲に對して、巧に是を砲撃して、多大の損害を與へ、敵を潰亂に陥れ、漢城堡附近の占領を確實ならしめたり。其功績著大なりとす、仍て感状を附與す。

明治三十八年三月二十三日

第四軍司令官 伯爵 野 津 道 貫

三月十八日聯隊長より左の命令を受けた。

一、敵は遠く北方に退却、第一、第四軍の先進部隊は鐵嶺を占領し、騎兵第十聯隊並に秋山枝隊は、孤家子附近より八寶屯に向ひ前進し、敵情を搜索する筈。各軍は左の部署を以て戦闘力を回復する筈。

第一軍は先進部隊をして、柴河堡を占領せしめ、軍の主力を范河の左岸丁家溝附近に集合。
第三軍は先進部隊をして老邊、(鐵嶺西北方約三里)附近より遼河の渡河點を占領せしめ、軍の主力を石佛寺附近に集合。

重砲兵旅團は第四軍司令官の令下に入り奉天の東方及東南方地區に集合。

二、聯隊は白頭堡附近に集合し、戦闘力の恢復を完結せんとす。

三、各部隊の宿營地區分左の如し。

第一大隊本部並に第四中隊

白頭堡

第一中隊

三家子

第二、第三中隊

蘇家崗子

第二大隊本部並に第五、第六中隊

稜子山

第七、第八中隊

干山屯

四、宿營地移轉は、明廿一日より著手し、可成速かに完結し戦闘力の回復を計るべし。
五、聯隊本部は明二十一日白頭堡に移轉す。

聯隊長 公 平 忠 吉

僕等の大隊は本命令に基き行動を起し、三月廿五日稜子山著、支那家屋に舍營した。

本日重砲兵旅團より左の情報を得た。

一、三月十二日朝までに知り得たる戦闘の結果は、

1. 捕虜約三萬五百（外に奉天病院に傷者千三百）
2. 火砲四十八門
3. 遺棄した屍體三千五百
4. 敵の死傷者約十一萬五千
5. 我軍の死傷者四萬五千八百
6. 軍旗二旒
7. 馬匹九百、外に車輛許多

二、三月十八日午後二時秋山枝隊の一部は開原を占領せり。

三、秋山枝隊は退却する敵を追撃し二十一日午後二時昌圖を占領せり。

滿洲軍は以上の如き大勝利を以て、奉天を占領し長驅して敵の要衝たる鐵嶺、開原、昌圖を占領し殘敵を遠く其以北に驅逐し、再び起ち能はざるまでに壓迫を加へた。僕等は此情報を得て意氣頓に振ひ、ハルビン攻略の日を樂んだ。

爾來秣子山に在つて専ら衛生、教育、休養に努め同時に油斷なく戦闘力の回復を計つた。秣子山に

待命すること約四月、七月に入りて北進の命を受け、鐵嶺に近き山頭堡に移つた。秣子山待命四ヶ月の僕等の境遇は内地部隊と同様で、日々教練と體操とをやらすのみで、戦地にありながら、砲聲もなければ銃聲も聞えず、夜分の如き寧ろ淋しさと、退屈を感せさせられる位だつた。

此間五月六日に、聯隊内戦病死者の招魂祭あり。豊島旅團長以下多數の將校參列の下に、聯隊長は祭文を読み、次で一般の焼香となり、終つて芝居、角力の餘興があつた。芝居も角力も皆聯隊の兵士で擔任し、何れも専門家裸足の藝人により演せられた。三味線はビスケツト空罐を巧に利用して造られ、本物に負けないよい音色を出した。又た鬘の如き、衣裳の如きは、或は紙、或はメリケン粉の空袋を巧に利用して造り、内地の田舎芝居より遙かに立派な舞臺だつた。此等はとても戦地とは思へぬ程の興業で、あまりの藝人揃ひに見物者一同をアツと云はせた。

此附近に野犬が多く、然も惡質にして良民を苦しめた。これ等の犬は戦死者の肉を喰ひ、其の味を知り、人に喰ひ付く奴で、夜間など兵士の一人歩きさへ危険視されたものだ。此機に於て大隊は野犬狩りを決行した。之が爲め、銃劍の兵士をして遠くより村落を包圍せしめ、逐次其線を收縮しつゝ次第に之を壓迫し、次で各兵の間隔を一米突以内に迄短縮せしむるのである。此時勇敢なる野犬は此の攻圍線を突破せんとする。之を見かけてし刺殺すと云ふ段取で、此日は幸にして十五頭の野犬を撲殺した。軍人が其神聖なる銃劍を以て、野犬撲殺をなす如きは、稍々不淨なりとの誹あらんも、苟しく

も人命を防護すると云ふ考よりして、之は當然の手段なりと信じたのである。銃剣は使用後綺麗に消毒し拭ひ清めたことは勿論である。僕は秣子山待命中、第五中隊長に榮轉した。但し當分は中尉のままの大尉職務であつたが、五月五日に砲兵大尉に昇進した。中隊長は部下二百五十名の生命を預る職務で、僕は此時彼等と身命を共にすべく誓つた。然し一度も戦はずして、平和克復に至つたことを口惜しく思つた。

山頭堡は凱旋に至るまで半年の久しきに互り滞在した宿營地で、實に滿洲第二の故郷だつた。山頭堡の地たる東に連々たる山地を控へ、西に延々たる遼河を眺め、風光明媚にして、地高く水清く物質の調達亦容易で、舍營地として住みよい處だつた。

滞在中米國大統領ルーズベルト氏は講和を勸告した。幸ひ兩國の容るゝ處となり、彼我全權委員は、ポーツマスに會し、以て講話談判を開くに至つた。九月十五日第四軍司令官より左の通報を受けた。

通 報

一、日露兩軍の休戰條件協定委員は、昨十三日午前十時より沙河子に於て會見し、同日午後七時三十分調印を終れり。

其協定書は左の五ヶ條より成る。

第一條 滿洲全軍に於て戦闘を休止す。

第二條 本議定書と共に交換したる圖面に示したる日露兩軍第一線中間を以て離隔地帯とす。

第三條 兩軍に一切の關係を有するものは如何なる口述を以てするに不拘、離隔地帯に入るを許さず。

第四條 双苗子より沙河子に至る道路を以て兩軍の公用道路とす。

第五條 本議定書は千九百五年九月十六日露曆九月三日正午より效力を有す。

之と同時に滿洲軍總司令官大山大將より左の訓示を受けた。

訓 示

一、講和談判の結果彼我兩軍間に休戰條役を協定し、九月十六日正午より之れを實施することゝなれり。然れども講和法約の批准交換に至るまで、一時戦闘行爲を中止するに過ぎざるなり。故に敵若し講和を欲せず休戰條件を無視して戦闘行爲を再びするか、或は講和條約批准に至らずして戦闘繼續となるか、是れ固より未だ知るべからず。敵兵如何なる手段を取るも、我々油斷さへなくば、何時にても、敵の企圖を挫折し得べし。之れに反し我々若し不覺を取る時は、敵の行爲不法、背戻に屬するも、不覺の結果は敵の行爲をして正當のものたらしむるに至ることなしとせず。故に休戰間と雖も各部團體をして深く戒心し、戦闘行爲の發生に當り、何時にても兵力を集結して、之れに應

する準備にあらしむるを要す。

二、戦闘行為を中止したる結果、搜索、偵察等を出して敵状を探知するを得ず。然るに第一項に述べたる如く、不時の戦闘に應ずる準備の爲めには、戦闘間と同様、敵状を明かにして置かざるべからず。故に絶えず間隙を放つて、敵の行為を探知するを要す。敵にして果して、日露講和全權委員の協定せる休戦條款第四條を、確實に實行するや否やを探知すること亦甚だ緊要なりとす。故に従來の如く長春、公主嶺等の停車場に於ける情況を知悉することを力めざるべからず。

三、従來の戦争を要するに休戦間彼我相往來して交際を結び、爲めに失態を現出したること、其例乏しからず我軍に於ては嚴に之を禁止すべし。

明治三十八年九月十五日

滿洲軍總司令官 侯爵 大山 巖

斯くして遂に十月十六日平和條約發布となり、同日陸海軍に對して勅語を賜はつた。

十月十九日第四軍司令官より左の命令を受く。

命令

一、平和條約の批准は十月十六日發布せられ、日露兩國の平和克復せられたり。我滿洲軍（第十四、第十六師團共機關銃部隊及師團輜重を除く）は本國に凱旋せらる。第十五師團は第二軍戦闘序列よ

り脱し、韓國駐劄軍司令官の隸下に屬せらる。第十四、第十六師團は別命あるまで現在の位置にある筈。鴨綠江軍は奉天東方より營盤間の地區に、第三軍の第七師團は、奉天西北方に宿營移轉する筈。

二、軍の各團體を自今行動を止めず、専ら休養、衛生、及教育に顧慮し、特別の任務ある外は、概ね現在の位置に駐在し、滿洲軍凱旋計、晝同凱旋に關する細則に規定する順序に基き、逐次凱旋上途の準備にありて輸送開始の命令を待つべし。

三、軍隊區分上一時配屬の諸部隊は、各固有の戦闘序列に復歸せしむべし。但し其復歸の時機及地點等に關しては別命を待つべし。

四、旅順要塞の従來の守備兵は交代すべく、同地附近にある第十六師團の歩兵一聯隊及工兵一中隊を一時當該要塞司令官の隸下に入らしむべし。

明治三十八年十月十八日

第四軍司令官 伯爵 野津 道貫

十月二十四日大山滿洲軍總司令官より、十一月一日、第四軍司令官よりそれ〴〵訓示あつていよいよ凱旋の準備となつた。

訓示

戦争の目的を貫徹する爲め重任を負つて吾人の努力しありし日露戦役は、茲に終結を告げ平和克服せられたり。回顧すれば開戦の初めより年を閲すること殆んど二歳、此間我滿洲軍は能く互寒を凌ぎ、隆暑に堪へ、堅を摧き、銳を破り、百戰百勝、終に其任務を達成し得たるのみならず、本職の乏しきを以てして、敢て大瑾なきを得たるは、全く我將卒の忠誠に職由せずんはあらず。是れ本職の敬慕感謝する所なると同時に、生命を本戦役に殞したる將卒に對しては、悲痛哀悼の情を禁ずる能はず。

今や、日ならずして我滿洲軍の大部は凱旋の途に就かんとす。此の時に當り依然滿洲に於て守備の任に留まる者は勿論、平時の軍務に復し、若しくは武装を解きて郷里に歸る者と雖も、武功に誇らず、陣中の辛苦を忘れず、自重して健康を保ち、常に戦役間に於ける心を以て心とし、戦勝より得たる自己の名譽を保持し、以て模範を後世に貽さるべからず。又本戦役に依り吾人の經驗したる所尠少にあらざるべし、各官宜しく其經驗したる事に就て、探究研磨し、帝國軍進歩の資料を提供するは本職の特に希望する所なり。

惟ふに極東に發生すべき事件は、將來益々深く、列國の注視する所となるべし。此の間に處して本戦役より得たる戦勝の光輝を失墜せず、更に國威を發揚し、國力を増進せんには、勢ひ帝國軍の整備と、充實を必要とすべく、茲に於てか吾人の任務は一層の重きを加ふるものと云ふべし。

然れども苟くも常に前述の精神を以て、誠實に邁進せば、恐らくは目的の過半を遂行するに難からざらん。將卒宜敷益々奮勵して、各々其職務に盡瘁すべきことを望む。
右訓示す。

明治三十八年十月二十四日

滿洲軍總司令官 侯爵 大山 巖

訓 示

海陸に於ける我偉大なる戦勝の下に、日露兩國の平和條約は締結せられ、今や出征諸隊は相續て、凱旋の途に就かんとす。回顧すれば我第四軍は、昨夏大孤山の一角に上陸し、爾來一年有半、常に滿洲軍の中軸となり、柞木城に、遼陽に、沙河に、奉天に、至る所、敵の中央堅壘に衝突し、其至難なる戦況に在て、左右赴援の重任に當りしこと、亦屢々なりしが、不敏道貫の統帥にも不拘、幸に毎戦其目的を達し得たるは是れ、皇威に依ると雖も、抑も亦各部團隊畫策、措置其當を得、協力奮戦、能く其術を盡したるの結果にして、道貫茲に滿腔の熱誠を以て深く謝意を表し、又本戦役中鋒鏑或は疾病に斃れ、又は廢疾となりたるものを切に追悼す。惟ふに東洋前途に横はる所の禍機は、決して本戦役の結了と共に、全く消滅し去りたるものと云ふべからず。領土の擴張、國威の發揚、竝に日英新條約等の結果は、皇國の前途に更に一層の明目張膽を促し、吾人の責務を益々重か

らしめたり。予は堅く信ずる、諸子深く思を茲に致し、敢然として社會濁流の表に立ち、彼の戦勝國民の通患たる驕奢、華美、儉安の弊風を未發に防ぎ、留つて軍務にあるものと、散じて郷關に歸るものと論なく、各其健康と、名譽を保持し、其本分と職責を砥勵し、一朝有事に際しては國家の干城たるの實を擧げ、至尊の股肱たるの重寄に恥づることなきを。

明治三十八年十一月一日

第四軍司令官 伯爵 野津道貫

僕等は山頭堡滞在間に於て、第二年目の越年をした。

三十九年の元旦は何んと云ふ朗らかであらう。本年の春は凱旋を控へて浮々としてゐた。宿舍の前には美しい門松が樹てられ、和やかな春風は日の丸の旗に小鍬さえ立たせて居つた。又鶏肉料理の雑煮は、旅順の正月に比して勝るとも劣ることのない美味さであつて、「加ふるに分配された恤兵の酒は將兵を満足せしむるに十分だつた。兵舎では隱藝の浪花節や、端唄などが喝采され、士官室では僕に義太夫をやれと勧めた。早速唸つて見たが、調子はづれで次ぎのものに譲つた。

僕は三十九年一月三十一日附にて、大阪砲兵工廠各員に轉任を命せられたが、我中隊の凱旋を控へ單獨赴任は心残りもあり、赴任延期を願ひ、聯隊と共に凱旋することとした。斯くして二月九日、山頭堡を出發し、鐵嶺より鐵路柳樹屯に出で、二月十三日同港出帆の上、神戸に一泊し翌十七日無事

由良に凱旋した。

凱旋に至る途中の歡送迎は、大凡出征の際受けたと同様で、熱誠なる國民の催しに對し只萬感激するのみだつた。尙山頭堡滞在間得たる二三の回顧は左の通りである。僕は山頭堡滞在中再三滿洲熱に犯されたが、これは一種の長期回歸熱だつたと信ずる。又それ程珍らしきものだつた。

第一回 旅順で發熱し四十度を最高としたが十日間で恢復した。

第二回 九月十六日より發熱し、最高三十九度五分。十日間で恢復した。

第三回 十月七日より九日間を要し最高四十度に上つた。

第四回 十月二十九日より發熱し、中途一回盛り返し十三日間を要した。之は最高、第一日目の四十度と、第七日目の三十九度の二回だつた。

僕は凱旋に際し中隊の全員に贈るべき記念品を考へた。然しこれには金が要することは云ふまでもない。又徵集するも見識がないので、思ひついたのは饅頭屋を開くことであつた。これは兵士の食氣の強いことから考へたことで、早速資金として金參拾圓を出資し中隊の將校に謀つた。滿場異議なく通過したのみならず、各將校又應分を出資し之を援けた。僕は中隊の兵士中饅頭製造に經驗あるものに命じ早速に開業させた。彼は練兵よりも此仕事を喜び、メリケン粉と、小豆と、砂糖をわざ／＼營口まで買出しに行つた。さうして支那釜の大きい鍋で餡を作り、木工卒の造つた蒸枠で蒸すなど、全く

堂に入ったものだった。之れを一個につき二錢で賣り出したので、ドン／＼賣れて行き、利益は上り、遂に支那人も買ひに来ると云ふ賑かきで、三十九年一月末までの決算で、資産は八百圓となつた程に成功した。隣りの第六中隊又遅蒔きながら餛飩屋を初たが、之れも相當賣れた。

僕は感状文を金文字で現した、記念木杯四百七十個を紀州黒井の漆器屋に豫約注文し、別に戦闘経過と住所人名簿とを載せた記念帳を添附し、凱旋記念として一同に分配した。此時調査した第五中隊の在籍者は將校以下四百五十九名で内譯は左の如くである。

減員

二百三十一名

一、戦病死

四十一名

二、負傷疾病

百六十六名

三、轉出

十四名

四、召集解除

十名

減計

二百三十一名

増員 補充

二百三十一名

内曹長以上の在籍名は、

大尉	安井義之助	少尉	藤木兼直
大尉	轟暉夫	少尉	山内丑松
大尉	矢用武次郎	特務	森久三郎
大尉	長谷川鉄次郎	特務	上杉繁太郎
大尉	上田晋	曹長	和田文治
中尉	井上忠常	曹長	服部新次郎
中尉	吉田二郎	曹長	武内八百楠
中尉	宮崎則美	曹長	高木駒之助
少尉	酒井金藏		

滞在間宿舍の防寒設備は、温土爐と二枚障子で完全に外氣を防ぎ得た。宿舍の男兒インフォアは姉と一緒に遊びに来た。何とか御世辭を云うて僕を三箇大人と呼んだ。三箇大人と云ふは大尉のことである。僕は餘つた菓子を蓄へて置き、之に與へるを常とした。一體に満洲の子供は物覚えが早く僕等半年の滞在間に彼等子供は一通り日本語を解するに至つた。然し大人となれば早婚の爲めボケると云はれてゐる。

僕は此間酒を飲む事を感じた、僕は内地では甘口の葡萄酒以外は用ゐなかつたが、戦地に來り大隊

長に従うてからは飲む機会が多く、加ふるに聯隊長公平大佐も大の酒好きであたので、一層に僕を刺戟した。それに滿洲の氣候は夏は甚だ暑い處から汗を出して練兵から歸ると、先づ一杯の冷しビールが呑みなくなり、斯くの如くにして僕はビールより誘導されて、日本酒へと進展した。

僕は兵士の一人より義太夫を教はつた。大関記の十段目をブリキ製の三味線に合せ、一週二回位稽古したが、半年にして凱旋となり物にならずして終つた。

圍碁は野口大隊長より手ほどきされ、四ヶ月間に五目にまで進んだが、それ以降更に上達しない。それが僕の限度と見える。

僕は滿洲より露國士官の飼犬だつた、セッターを連れ戻り、戦争記念とした。評判のよい犬だつたが、宇治時代に犬殺の爲に撲殺されたので、家内と女中は泣いて悲んだ。この評判の飼犬の名はロスと云つた。

滿洲に於ける僕等の俸給は銀本位の軍票により支給された。軍票は邦幣より一割引の計算で受けたが、凱旋の時餘つたものを兩替した結果は、邦貨と同一價格だつたので、之が爲め一割の不勞所得を得た。

又僕等の本俸は留守宅渡により受領したので、戦地では四割だけの増給で暮らした。然し衣、食、住の全部は官給であり、反て手許に若干餘裕があつた。

徒歩砲兵第二聯隊第五中隊宿營地一覽

年	三	十	七	年	宿營地	戰	事	項
五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	一月
加太町	福良町	福本町	神戶市	神泥窪	青泥窪	張胡溝	由良山陣地	由良山陣地
十一日 動員下令 出征準備 編成完結	十二日出發 途中滞在	十三日 神戶出帆 青泥窪上陸	十四日 神戶出帆 青泥窪上陸	十九日 第一回總攻撃 盤龍山、東西舊砲臺占領	二十日 龍眼北方高地占領 水師營南方の四個の角面堡、海嶺山一帶高地占領	三十日 P 堡壘(一戸堡壘)嶺山占領	五日 二〇三高地占領 十八日 東鶴冠山北砲臺占領 二十八日 二龍山占領 三十一日 松樹山占領 同日 聯隊へ感狀附與	一日及二日 全砲臺占領 二日 旅順開城降伏

年九十	年 八 十 三											
二 一	十二	十一	十	九	八	七	六	五	四	三	二	
月 月	月 月	月 月	月 月	月 月	月 月	月 月	月 月	月 月	月 月	月 月	月 月	
由山 良頭 町堡	山 頭 堡	山 頭 堡	山 頭 堡	山 頭 堡	山 頭 堡	山 頭 堡	山 頭 堡	山 頭 堡	山 頭 堡	山 頭 堡	山 頭 堡	
休養、教育 凱旋準備 復員下令、解散	休養、教育	休養、教育	十六日 平和克服	待命 十六日より休戰	待命、休養、教育	十六日 稜子山發北進 二十一日 山頭堡著、舍營、待命	待命、休養	待命、休養 日本海々戰	七日 軍司令官より感狀附與	二十日 奉天占領 二十五日 稜子山著待命	六日 漢城堡占領 七日 大孤家子、官屯高力屯沙河堡占領	十三日 由良山陣地撤去、龍頭に舍營 十五日 北進 二十七日 長興甸著、戰鬪準備 二十七日より奉天會戰に參與

奉天附近溫度表(月平均)

月	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二
最高	四度	十度	十七度	二十二度	二十二度	二十二度	二十二度	二十二度	二十二度	二十度	十八度
最低	零下二十一度	零下十五度	零下三度	零下二度	零下二度	零下二度	零下二度	零下二度	零下二度	零下七度	零下十一度
摘要											

第十、大尉時代

僕の大尉時代は頗る長期で、奉天戰の終りより大正六年夏に至る滿十二年の一曆であつた。之が爲

め世間より珍無類と評されたが、これは戦後人事行政の行きづまりの結果で、此時代大尉で讖首されたものさへあつた位だ。僕は、大尉時代に三人の親となつたはよいとして、大尉で生れた長女が十一歳となるも、まだ親は其まゝだつたので、學校の先生に恥かしいとさへ云ふのだった。板橋火藥の職工連も僕に同情して、

桃栗三年柿八年、長谷川大尉は十三年

と言つて嘆じて呉れた。

其一、宇治時代

宇治時代は日露戦役凱旋直後より板橋に轉任するまでの三年半で、僕の技術方面に轉向せる最初の發足地だつた。僕は三十九年三月一日戦地より宇治火藥製造所に著任したが、兩親に凱旋を告ぐる爲め金澤に歸省した。兩親の喜びは素より山下氏、増泉氏の如きは國旗を手にして、プラットホームを飛び廻つて祝つて呉れた。

宇治火藥製造所は板橋と同じく我國唯二つの軍用火藥の製造所で、當時明石東次郎中佐が所長だつた。所員として朽木綱貞、相浦民雄、齋藤晴五、林菊太郎、山口百枝氏等あり何れも有爲な専門家揃ひで、僕は新米として此の間に伍し、製造の實務に當つた。然し戦地より歸つたばかりで、火藥の製

造には全くの素人だつたので、第一役員や職工の使ふ言葉から分らぬので困つた。工場は風習として器械部品を原語にて話し、軸のことをシャフトと云ひ、調帯をベルトと云ふが如きで、つまらぬ事であるが、之には恥かしいまでに苦勞した。

間もなく、栃木少佐は去り、僕は後任として酒精工場を擔任した。これが爲め大學のノートを借り受け、専門の書籍を齎き大に俄勉強を初めたが、何にしろ前任者は此道の専門家で、酒精製造で工學博士となつた人であり、僕は醸造に縁遠い戦地の中隊長だつたので、精力の續く限りは只々勉強するより外仕様がなかつた。

僕は獨逸より買つたエーテル蒸餾機の据付を命せられ、續いて英國より購入の脱脂機機の組立てもやらされ、次第と實地の方を覚え初めた。斯くして三年半の在職中には、棉の精製、硝酸の製造、棉藥、無煙藥の製造等一通りは擔任し、終期に及んで土木、建築の工事監督までやつて來た。此の中で眞にむづかしく感じたのは棉藥の製造で、之は氣候就中濕氣に關係を持つこと多く、却々思ふ様な一様の製品が得られない爲めだつた。

明石東次郎中佐は中尉時代よりの火藥屋で、島川大將輩下の先輩格として、其深き經驗と崇高なる人格とで、従業員をして心服せしむるものだつた。所長は間もなく火藥研究所長に榮轉し東京に赴任したが、僕は宇治時代より板橋にかけ厚き温情を蒙り、屢々官舎の碁會に招かれ、雉子と猪の御馳走

に與かつた。これ等は、大佐の趣味とする狩獵の獲物だつた。

此時代の所員齋藤晴五氏は、火薬専攻の工學博士で勅任技師に進み、後内務省に入つて今日に及んで居る。所員相浦民雄氏は砲工學校出身だが、京都大學の撰科に數學と化學を専攻し、退官後滿鐵に入り火薬製造の實務に従事した學者風の人であつたが、健康勝れず晩年は振はない。

山口百枝氏は同期の親友で、一つ二つ年上でもあり、兄格として尊敬し互に相援けて今日に及んでゐる。今は千歳村に隠退し平和な生活を送つてゐる。

黄檗山の本山は製造所の眞向ふの森林中に古色蒼然として壯嚴なる威容を示してゐる。此時代の管長柴石禪師は、明石所長と親交あり、僕は所長に連れられ、屢々同寺で禪師に見ゆるの光榮を得た。其都度得意の書畫を戴いて歸ること一再でなかつた。今に觀音像を法華經の細字を以て描かれた軸物は唯一の記念として保存して居る。

毎年秋季に松茸狩が山の射撃場で行はれた。これは家族本位の連合大慰安會で、現場で穫たものを其場で調理して食べる愉快なる秋季行樂の一つだつた。

松茸狩の楽しみは其搜し出す迄の面白さであつて、喰ふ味なら八百屋のものも變りはない筈だ。

此附近正月の遊びとして「茶かぶき」なるものが流行した。これは茶の本場だけに、各種類の品質を鑑定せしむる遊戯の一つで、僕等はよく家族同伴で同僚の催す此の會に招かれた。茶は先づ其品位

に従ひ、五種類が提供される。最初其少量を一通り飲ませて、味覺を興へ置き、後勝手に順序を狂はして其適否を點數によつて決する仕組である。これは靜かな遊びの様ではあるが、連續の喫茶は味覺を麻痺せしめ、舌の混亂は勿論ながら、決勝時に於ける一座の混亂も亦かる。會以上の場面を呈する。明石所長の轉任後は大阪工廠の江川作業課長を兼任として迎へたが、之又間もなく轉任され、後は専任所長として菅野周三少佐を迎ふるに至つた。

宇治には名物として、懸神社の懸祭と云ふのが有名だつた。毎年五月五日は此の祭禮日で、大阪、京都、奈良附近より續々と數萬の人が集まる。之が爲め町内は大活氣を呈するが、此日素人家は疊一枚をいくらかの相場で貸與し、相當の儲をするのが慣例となつてゐる。又神様は夜半燈火なしで暗黒の町中を渡御されるのが特長で、之が爲め昔は風儀上の問題があつたと聞いたが、今でも警察の苦勞は一通りでないと云はれて居つた。

僕は宇治在勤中日露戰役の論功行賞に預かつた。間もなく火薬製造所の他の職員も發表されたが、金鷄勳章を賜はつたものは出征した僕以外、明石所長と相浦大尉の二人だけだつた。内地勤務で殊勳者を出したのは、陸軍省、參謀本部の外、砲兵工廠の一部だけで、此戰役間火薬製造所が如何に危険を冒して必死の努力をしたかが之を見ても分る。そこで敍勳の一大祝賀會が計畫され、宇治町萬屋で開かれたが僕は實行委員長となり製造所開闢以來の大宴會を開き、田舎者をして、其豪奢振りにアツ

と言はせた。宇治町に電話開通式があり、これが宇治川堤の露天で開かれたが、僕は冷酒に酔ひが廻り、人力車で家に歸されたことを覚えてゐる。之は一生中酔酒の最大なるものだった。

此時代職員に自轉車が流行し、齋藤技師も相浦大尉も伏見よりの往復に之れを用ゐた。僕も宇治町から之で通つたので、或日此三人で遠乗會を催し奈良に遊んだ。奈良では公園に近き一旅舎に休憩したが、其時日本製のシャンパン酒を飲んだ。之が今日のシャンペイン、サイダーで僕は珍らしくも、シャンパン酒かと騙されたのも迂闊千萬だった。

自轉車で尙一つ思ひ出がある。或日一人で石山寺に遠乗りし、逢坂峠よりの下り坂で、荷車と衝突して左側の溝に投げ込まれた。幸ひ傷は軽く附近の醫師で繙帯し、再び乗つて石山寺に參り、無事我家に歸へつたが、口悪るの隣人は何か喧嘩のたゞりだらうと評した。

當時製造所で、鑛業用棉火薬を多量に造つて居つたが、之が試験をよく水中爆發によつて行つた。僕等検査員は此試験を利用し、宇治川で鯉漁をやつた。電氣雷管でドンと一發爆發せしむると、多數の大鯉が衝撃を受けて水面に浮き上つて来る。之を捕へて愉快がるいたづら半分の仕事だった。取り損じの鯉はまんまと附近の漁夫にせしめられ、此等漁夫を恐悦せしむるも、慈善の一つだった。

其二、板橋時代

僕は板橋火薬製造に轉任を命ぜられ、四十二年九月九日板橋町氷川神社の祭禮日に著任した。早速松村孫兵衛氏の家に入り、こゝより通勤した。此時の轉任でまだ若かつた妻や義妹は、荷物の梱包や發送手續についてよい經驗をした。其代り多數破損品を出したには閉口した。當時義妹は家事見習として我家にあつたが、其後婚期に達して歸郷した。これが今の眞田辰次郎氏の妻である。

板橋の所長は中川茂氏で、佛國駐在員を命ぜられて間もない時だった。これが爲明石大佐は所長兼勤として火薬研究所と兩方に出務され、深尾七郎博士、有本完氏など所員として皆それ／＼工場の監督を分擔し、銳意製造の實務に努力してゐた。僕は前後八年に互り王子工場と、板橋工場とに勤め大正五年一時岩鼻所長代理として同地にあつて勤務した。

王子分工場では技師有本完氏と一緒に服務し、後中山徳治大尉もやつて來た。當時陸軍技術界では、接觸法による硫酸製造と、茶褐薬の經濟的製造法が研究問題であり、前者は有本技師主任となり獨逸の設計にかゝはるテンテレフ式の据付に必死の努力をつゞけてゐた。

又後者は僕が主任となり加舎技手を助手とし大に研究を進め、中山大尉も之に參加し眞劍になつて銳意努力した。板橋では低壓力小銃薬の研究を行ひ、一時は中川所長と併行して、各分擔を定めて急いだものだ。これはメキシコよりの注文に應ずる火急の場合だったからだ。僕は必死の努力を拂ひ、兎に角一つの試製品を造り上げ、これにより此小銃薬の授受を了することにした。

此火薬はスペインの尖弾なる雑誌よりヒントを得た表面硬化法による一種で、後石河大尉と協同研究で秘密特許を得たものと同種のものである。今日我が國に於いて低壓力の小銃火薬と稱するもの皆之れと類似の者かと思ふ。

中川所長は頭腦明敏な學者風の人で、火薬に關し自信を持つ佛國謳歌者だつた。之れに反し火薬研究所の朽木少佐は獨逸信者の一人で、化學に關する一般的學問の所持者であつた。之れが爲め何かと意見の相違を見ること一再でなかつた。中川所長は公私の區分嚴格で、又細事に涉り綿密だつたので部下の判任官は執務上大に困まらされてゐたことがあつた。彼は元來學者肌の人で家庭人ではなかつたが、宴席に臨めば別人なるかの如き愉快な人だつた。

當時火薬の品質改良が問題となり、上司に於て之れが研究を獎勵した。これが爲、研究委員會が新設され、明石大佐を委員長とし、山崎、朽木、中川、井上、松岡氏等の權威者を委員とし一舉に其研究に當ることにした。斯の如くにして一年有餘の歳月を費し、漸く出來上つたものが今日の火薬製造要領の前身だつた。不完全なから之により其基礎が出來たもので先輩各位の勞を多とせねばならぬ。

此共同研究に従事した當年の權威者も、今は殆ど故人であるのは遺憾である。特に中川氏の如きは多年腦を病み、眞人間に歸らずして此世を去つた如き同情に堪へない。獨り中川氏のみならず、井上隆則少佐も板橋所長より岩鼻所長に轉じた後、同所に於て健康を害し腦をも患ひ遂に病死した。又朽

木中佐も火工廠長に榮進して後、間もなくなくなつた。其他山崎氏、高野氏、松岡氏などの當年の關係者は揃ひも揃つて此世を去つて居るのも不思議な現象である。然し當時の後輩組たる鈴木、千秋、久村、僕などが残存してゐるのは其埋め合せであるとも云へる。只明石大佐だけは今日七十歳の高齡を以て、滿洲の新天地に愈々益々活躍されあるは番外として見られる。僕の板橋在勤中の思ひ出して左の二三がある。

一、無煙火薬工場の捏和室が作業中突然爆發して死傷者數名を出し、遺骸三個を正門に送つたこと。
二、獵用無煙火薬 N.N. 號が高壓力だつたのに氣づかず、民間に拂ひ下げ狩獵者の銃身に龜裂をを入らしたる件により責任を受けたこと。

三、メキシコ國注文の實包のことより銃包製造所と、製造技術上に關し意見を異にし、議論と研究で徹夜作業をなしたること。

尙、阿川彈少佐は是等研究の爲め、夜間風邪を押して出務し、連夜の劇務に歸因し、病氣に罹り遂に死去したること。

四、僕は金澤市越中町二番地に分家したること。

五、長男武文の生れたること。

六、久振りに一家擧つて歸省したが

明治大帝の崩御に遇ひ哀悼裡に急ぎ歸京したること。
越えて三年四月十一日再び

皇太后陛下の崩御に遇ひ重ね／＼の諒闇に遇つたこと。

七、同期生淺井卯吉大尉は検査官であり、村井、岡島、鈴木、千秋、深尾の諸氏皆此時代の所員であり、公私共格別御厄介になつたこと。

八、野々村大尉は厳格な検査官で職務に熱心のあまり検査の結果は一時に不合格品が殖え、大いに困つたが、僕としても少し大局より見ての八ヶ間敷さが欲しかつたこと。

九、明石大佐と井上少佐の三人で筑前琵琶を稽古したが、何れも上達は遅かつたこと。

十、板橋官舎の隣人に、矢頭、後藤の兩氏あり、共に淡白な賑敷い人で今日に至るまで交際を續けてゐること。

十一、其他大正三年十二月十四日に父を亡くしたことである。父は糖尿病で歿したが、死ぬまで病氣を僕等に知らせなかつた。之は役所勤務の僕等に心配を懸けさせない爲の親心であつた。又亡くなつた際は母は朝鮮の兄の處に行き、一人留守居の時だつた。

僕は十二月十三日平常通り出務し夕刻歸つて一枚の葉書を見た。それは親戚山下一義氏より來た病氣の知らせだつた。曰く「父はからだ一面に腫れ上り糖尿病だと云ふにあつた。僕等は大に驚き歸

郷の相談をした。次で十一時一通の電報を受取つた。曰く

「父糖尿病昏睡す山下」とある。僕は更に

「父危篤か皆んで歸る、すぐ知らせ」と打ち返し準備に取り掛つた。翌朝五時。

「父危篤すぐ來い増泉」と報じて來た。僕は「午後たつ明朝九時つく」と知らせたが間もなく、

「八時父死す、直ぐ來い」と三度目の電報を受け終り一家愁然として暫しなす處を知らなんだ。

何事も運命なる哉と諦めては見たが、せめて臨終の一目なりと見たかつたと、思ひに暮れながら出發した。

十五日午前九時金澤驛着、山下氏に迎へられ雨中を急ぎ歸宅した。父の遺骸はまだ其儘で其居間に靜かに横たへられてゐた。僕は枕頭に暫し瞑目して歸らぬ父を伏し拜み、感慨無量、落涙しはし禁じ得なかつた。僕は當分の處置につき一同と相談し、葬儀を十九日午後一時と決定し、朝鮮より母と兄との歸宅を待つた。母は十六日の晝に、次で翌十七日の早朝に兄と照子は歸國した。茲に肉身の一同打ち揃ひ豫定に従ひ其の實施を見ることになつた。葬儀は幸ひにして壯嚴に行はれ、生花、造花、六十餘車、供物車、放鳥車を先頭に僧侶、親戚一般の會葬者等之れに従ひ延々數丁に亙る大行列を以て出棺し、一旦之れを城端別院支院に移し、讀經の上再び廣岡の火葬場に送つた。翌廿日は骨上をなし、翌々廿一日は中陰の法要を營み、斯くの如くにして一切の儀式は滞りなく終了した。

當時金澤の習慣として兎角葬禮に見榮を張り、徒らに多くの人を集めることを、一種の誇りとする傾向がないではなかつた。父の場合通夜は五晩も續き、毎夜の僧侶丈でも相當の人数に上り、丁寧は丁寧だが、今時の時勢にはどうかとさへ思ふたが、斯くする事が死者に對する榮譽でもあり、子の親に對する義務でもあると考へたので、僕等は之に満足して、一般に對して其厚意を感謝した。父は行年七十三歳満足して成佛したことと思ふが、肉身の暖き看護を受くることなく、一人淋しく瞑目されたのを、今に至るも心苦しく思へてゐる。

十二、大尉の末期に於て、「進級せば地方へ轉出するやも知れず」と噂が立つた。僕は東京にお別れの積りで、まだ見た事のない、鎌倉、江の島行を實行し、子供連を喜ばせた。その時の大要は左の如くである。面白味はないが、之により大尉末期の一日の行樂を知ることが出来る。

鎌倉江の島遊覽記

豫ての約束が延び／＼して今日となつた。

五月二十七日は東天まだ白み渡らぬ頃、早くも一同起床した。枕頭の目醒時計は四時二十分を示しベルの鳴らない前だつた。今朝の準備は非常に敏速で、六時には一切が完了した。幸ひ天氣もよかつたので、巢鴨まで長い中仙道を徒歩でブツ通した。此時僕等の一行は尋常四年の貞子、次に尋常一年の武文、次は長身瘦軀の妻、最後に背廣服に麥藁帽子を戴く僕が續いて、巢鴨街道を急ぐのだ

つた。

七時半に東京驛につき、鎌倉江の島行の遊覽切符を一圓七錢で買つた。汽車は八時十五分横須賀行の直行で、東京驛ではかなりの客があり、新橋では一層に多くなり、品川驛では満員となつた。汽車は大森、川崎等横目も振らずズン／＼馳せ進み、武文は汽車中煤煙で眼を痛めたが、水筒の水で洗ひ落すなど手當をする中、早くも鎌倉へつた。プラットホームは人の山で雪なだれとなつて、改札口に押し寄せた。此日鎌倉は中々に暑くとも五月の氣候とは思へぬ程で人力車に分乗することにしたが、十八貫匁もある僕が、武文と合ひ乗りをしたので車夫も中々御苦勞だつた。

鎌倉宮で神官より説明を聞いたが、如何にも月並的で、「鎌倉宮は後醍醐天皇の第三皇子護良親王を祀る社で、恐れ多くも 明治天皇御宸筆の勅額が表の鳥居に燦として輝いて居る。又其後方にある土牢は同親王が永く幽閉された處で、此處で伊賀守義博の毒手に罹り薨去された」と説明した。當時國內亂麻の際とは云ひながら、斯くも憐な最後も遂げ給ふた宮の御身を偲び奉つて、暫らくは感慨無量だつた。次で、

頼朝公の墓所と、白旗神社に參拜した。何れも頼朝公の靈志のある處だが、僕にはあまり敬虔の念が浮ばなかつた。然し兎にも角にも、鎌倉幕府の創立者として七百年後の今日、數萬人の參拜者を斯くも盛んに集めるなど、何より雄辯に其偉大さを示すものと思つた。次に、若宮神社を経て、鶴

岡八幡宮に向つた。八幡宮は三十年前の鐵道唱歌で名高かつた如く、高い／＼石段の上に建てられた宏大なる御宮だつた。山門を潜り恭しく参拜し、裏に抜けて石段を降り、建長寺の山道に向つた。こゝは上り數丁の難道で、僕等は車夫の流す滾々たる汗水に同情したので、こゝから徒歩で御寺を拜觀したが大した感想も浮ばなかつた。更に、

大佛に行つたが、奈良の大佛を知らぬ子供は、其の大きいのに驚いた。此頃より子供の元氣は頓に衰へ、空腹を訴へた。早速間近の掛茶屋にて簡單なる晝食を喫し、それから長谷へと向つたが、途中西洋人の一行に會ひ、只イエスの一點張りで簡單に大佛の道を致へ、高い石段を上り廻つて觀音堂につき参拜した。觀音像は千三百年前のもので身の丈三丈と云はれたが、燭火の光で漸く見える位の暗さだつた。終つて長谷の停車場で、片瀬行の電車に乗り江の島に行つたが、停車場は押すな押すなの大混雑で、電車の中は固より立錐の餘地がなかつた。内にはハイカラ嬢も、髻ボウ／＼の田舎爺も、氣取つた腰辨も、金縁眼鏡の紳士も、學生も、小僧も、兵隊もあらゆるものが乗つて居り身動きも出來ぬまでに壽しづめとなつてゐた。

チン／＼と電車が動き出すと、ドカ／＼とヨロけ出す、實に亂暴な運轉振りだつた。七里ヶ濱へさしかゝると風は次第に強くなり、電車は又いやに早くなり、ハイカラ嬢は髪のはつれが氣に掛ると見え、頻りと手を上げようとするが容易に上らない。隣りの紳士は買ひたての帽子を吹き飛ばされ

て青くなる。第二の紳士も又同じ運命に陥つた。其内に電車は片瀬に著いて乗客は一度に下車した。狭い道路の兩側より、賣店と茶屋の女にウルサク呼ばれながら見晴しのよい海岸へ出た。呼べば答へんばかりの江の島は、棧橋を隔て、僕等を迎ふるのだつた。此時風は一層に強くなり、長い棧橋は動揺するので、手を取つて漸く渡つた。狭い道路を眞一文字に上り、邊津神社についた。中央の石段は普請中で右方の階段より上つたが、随分苦しかつた。再び岩石道を上り下り廻り廻つて漸く斷崖絶壁の裏海岸に著いた。逆巻く怒濤の岩に碎けて噴霧と化する其壯絶なる光景は眞に心膽を寒からしむる程だつた。流石は都下の女學生だ。此岩間に本陣を構へ、或は談笑し、或は脚を浸して、大自然に親しむ元氣なる有様を見た。岩間の小道に續いて粗末な橋がある。其長さは數十間で、窟の内部に達して居る。窟は自然のトンネルで橋の盡くる處に御神體があり、これは富士の裾野へ通じて居ると云はれた。

疲労し切つた僕等は足を曳きつゝ、往路を再びして、江の島の入口なるゑびす屋へ著いた。案内を受けて奥二階の一室にドツカと腰を下し、一服した。座敷は展望自在片瀬方面は手に取る如く見え、其風景侮るべからざるものがあつた。歡談の後食事を取つたが、御馳走は吸物、刺身の御定りを別とし、鮑や榮螺の子供の口に合はないものばかりだつた。僕はホロ酔氣分となり、五時を過ぐるこゝと五分、急いで此家を辭した。

風は幾分和らいだがまだ平穩ではない。棧橋上で武文は僕の帽子を吹き飛ばした。僕は無帽の恥かしさ、小さくなつて片瀬驛の隅つこに納まつたが、間もなく汽車に乗り安心した。走ること一時間にして、品川驛に着いたが、此時陽は全く没し、構内の電燈只皓々として寂寥を破るのみだつた。更に一時間板橋驛につき、次で我家の人となつたが、一同嬉しく今日の行樂を物語り、入浴の後グツスリと寝入つた。

以上は大尉末期の行樂の實況で、團樂たる家庭の一部を映した積りである。今や當年の長女は嫁して子供の母となり、長男は婚して一家を持つてゐる。過去二十年は斯くの如く變つて來たが、さて次の二十年はどうなること哉。

其三、岩鼻時代

岩鼻は所長井上少佐病氣の爲め、僕の代つて代理として行つた所である。岩鼻はダイナマイト工場で、危険の多い所だけに、僕は危害豫防と規律嚴肅に専ら意を注いだ。當時所員に阿野健虎技師あり外に杉谷真次郎大尉と柳井三之助大尉がゐた。皆それ／＼職務を分擔し、熱心に勉勵して呉れたので、僕は大綱を誤まらざる如く、其全般を監督するのみにした。當時ダイナマイトは外國より多量に輸入され、國策上之を撲滅する必要があつたので、威力の低下せざる、價格の安い新製品を賣出すこ

とが、何よりの急務だつた。此の見地に基き、阿野技師主任となり、其研究に努力した。僕も試験實施の爲め、足尾銅山に赴き、坑内深く入つて爆發の實狀を研究した。僕は足尾の俱樂部で、採鑛部長や、同行の大木啓太郎氏と、新火薬に付き、意見を交換したのは此時である。

當時日本は、露西亞より軍需品の注文を受け、砲兵工廠は頗る多忙の時期だつた。當製造所亦御多分に漏れず、黒色火薬の製造に追はれて居つた。

岩鼻は高崎より一つ手前の倉ヶ野驛から程遠からぬ村落で、役所の關係者以外は、氣のきいた住民がゐないと云はるゝ程の寒村だつた。従つて以前よく狐や狸が出て來るとさへ云はれてゐた。

職員俱樂部は唯一の慰安場で、玉突もあれば圍碁も出来る。宴會場にもなれば、御客の宿泊所にも供される處の萬能俱樂部だつた。僕は大正五年一月當所に赴任の當初、先づ此俱樂部を宿所と定めた。然るに此俱樂部は、單に寝るだけの宿舍で、食事は別に仕出屋より取り寄せるのだつた。然も俱樂部の給仕は、役所の消防夫の兼務で、風呂の世話から、食事の給仕まで一切の雜務に使はれるので重寶は重寶だつたが、髯武者の給仕では興味は薄かつた。然しこれは此俱樂部の特長であり、美風であつて、喜ぶ人には喜ばれたものだ。僕は此俱樂部の奥座敷に唯一人泊つた。其晩十二時を過ぎて、トントンと叩く音に眼を醒ました。誰れかと問へど返事はない。不思議と思ひながら、氣にもかけず其儘寝入つたが、翌晩も亦再び叩いた。僕は少し氣味悪くなり、役所の職員に其旨話して見た。する

とそれは狸の悪戯だと評議一決され、間もなく新酒屋の二階に移った。

當時俱樂部のすぐ隣りに、大きな竹藪があり、狸が巢を造つてゐると云はれて居つた。僕は其藪を一思ひに切り開き、電燈をつけて明朗化せしめた。或る夜俱樂部で玉突會が行はれて時の移つるを知らなんだ。僕は正面格子窓に對した一側に座を占め、戦況を見守つて居つたが、格子の窓から鳥田髷の女がぐつと覗いてゐるのに氣がついた。これは妙齡の美人であり、今時此處に訪づれるなど、誰れか知らんと考へたが、同時に彼女の顔をヂット見詰めた。彼女は落付いた態度で、ニッコリ笑つて見せ、暫くにして立ち去つた。僕の話して一同急ぎ飛び出し追跡したが、遂に影だに見ることを得なかつた。

新酒屋は田舎の銘酒屋で下座敷は常に賑つてゐた。時に酔つばらひの大聲で困ることもあつた。俱樂部の淋しさに比し、これは何たる騒々しさであらう。幸ひこの家は純粹の銘酒屋で、接客女も居らず、三味線の音も聞えず、堅氣一點張りの飲食専門だつたので仕合せでした。

阿野技師とは常に往來した。遠足其他玉突皆一緒にやつた。或時は神武の温泉に、或る時は深谷の浴場に、其他高崎、前橋の自轉車遠乗等、元氣に活潑に飛び廻つた。當製造所に、某二等軍醫があつた。僕は一日彼を善光寺参りに伴つた。出發の日は僕の下宿で落ち合ひ、勢揃ひをしたが、下宿の婆様は曰く「今日は日が悪いから次になさつては如何」と忠告した。僕は一笑に附して決行したが、軍

醫はこれを大に氣にしたのだつた。其夜は高崎を見物し、翌朝早々長野についた。早速善光寺前の宿屋で朝食をしたが、生ひ憎く食膳に魚が盛られ、これが神聖なる善光寺詣りに不淨だとあつて、又氣を悪くした。次に善光寺の本堂下なる、四角の暗室に案内され、計らずも側壁の板面で頭を打ち、三度彼の神経を刺戟した。僕は彼の氣持を察したので、親切に宥めすかして、早速歸ることにしたが、さあ歸つてからが大變の騒ぎで、彼は翌日より氣が變んになつた。妻君は驚いて僕に尋ねた。「善光寺でどんな事が起りましたか」と、僕は詳細に情況を説明して安心を與ふると共に、只管彼の安靜をすすめた。僕は一方ならず心配したが、氣分の病等は氣分で直すに如かずとなし、時々見舞つて迷信打解の説教をした。幸にして二、三日で恢復したが、僕はこんな心配した事は初てだつた。彼は氣の小さい、眞面目な青年だつたので、純真であるだけこんな場合に危険である。

此頃工廠は緊急作業で多忙だつた。それで年度末には特別賞與を貰つた。こんな恩典は軍人仲間では、砲兵工廠だけだつた。此時中川所長より呼ばれ板橋に歸つてゐた時だつたので、所長の計畫で松岡技師、深尾技師、有本、村井などの所員を加へ祝宴を開いたが、後で上野、淺草邊と歩き廻り、大に元氣を示したことがある。今より思へば中川氏や、松岡氏の爲め二度なき記念となり、當夜の愉快だつた顔付が思ひ出さるゝも懐しい。

松岡技師は、幼少より佛蘭西に學び、ポルテクニクを卒業して日本の砲兵士官に任用され、同時

に陸軍技師になつた、珍らしい出身の人だつた。佛蘭西語は達者で西洋人其儘の發音を出し、通辯には重寶と思つた。彼は山縣元帥の露國戴冠式に派遣さるゝや、其隨員として案内役を勤めた。彼は佛蘭西に於て火藥學を専攻し、我國では岩鼻火藥製造所の所長、帝國大學の講師をやり、火藥界の先輩格だつた。彼は中年にして内務省に入り警保局に勤めたが、病氣に罹り早く物故した。

僕は大正五年六月二日、岩鼻火藥製造所所長代理を免せられ、鈴木貞造氏に後を譲り、板橋に歸任した。岩鼻に於ける僕の在勤は僅か半年に過ぎなかつたが、ダイナマイトにつき經驗を得たことを幸ひと思ふ。

第十一、目黒火藥製造所所長時代

僕は大正六年八月六日、砲兵少佐に進級と同時に、所長として目黒火藥製造所に赴任した。僕は此光榮に感謝すると共に、如何して此重責を果すかにつき考慮した。然し火藥には十年の長い經驗あり、たとへ不敏なりとも、聊か自信と抱負を持つてゐた。

當所は古い歴史を有し、其創立は明治の初年で、初めて火藥の製造を開始したのは、明治八年だつた。當時は海軍省の所管で、陸軍に移つたのは日清戦役の前年で、僕は初代所長より第十五代目だつた。當所は黑色火藥専門の日本唯一の工場で、軍用藥もやり鑛山用、獵用火藥も造つた。當所は澁谷

と目黒の兩町に跨り、六萬六千坪の廣大なもので、官舎は澁谷町に屬し、三千坪の地域をしめて居つた。

僕の住まつた官舎は、海軍省所管時代、外國教師の居住に當てられ、千坪に近き庭園と、幾多の居室を持つ堂々たる西洋式の家屋だつた。従つて夏は冷しくて難有かつたが、冬は燃料費節約の爲め炬燵を用ゐて居つた。厩舎と馬丁家屋は此官舎に附屬され、運動の爲めにする外乗と、廣大なる庭掃除の爲め、馬丁の同宿は大變に便利だつた。馬丁は須田徳松氏で相當の年輩だつたが、夫婦共善良なる人柄だつた。

此時代の所員は、角廉吉大尉と渡優大大尉の二人で、所附軍醫は岡田仁吉氏だつた。何れも篤實なる中年の家庭持で、僕等は親しく交際した。岡田氏は其後澁谷町に開業し、公私親密に付き合つたが、僕は禁酒以來昔日の如き酒友達ではなくなつた。然し話相手としては今でも、兄弟の如き氣分であつてゐる。

角氏は今姫路の日本火藥の所長を勤め、渡氏は廣島にあつて活動を續けてゐる。庶務にゐた手塚半甫氏は、今間近の江古田に住ひ、火藥工廠に勤めて居り、十年一日の如く顔を合はせてゐる。

僕は豫てより斯く考へた。「仕事をやるものは人であり、人にして若し不平あれば、効果は上るものでない」此信念の下に、先づ職員以下特に職工につき、其待遇と給料の比較調査を初めた。固より

一般世間の職工を基礎としての事である。調べた結果は、果して附近の如何なるものよりも安かつた。又官業工場の板橋、王子、小石川のものに比し同様だつた。僕は先づ、此の解決を計るを急務とし、材料を揃へて、提理及作業課長平瀬頑六氏に、臨時昇給方を懇請した。幸ひ上司は了解され、此際突然の昇給は他所に波及の虞れあるも、暫く忍んで次の昇給期を待つ様にと、心よく回答されたので、話は纏まり昇給期を待つた。斯くして十二月一日、特別多額の昇給を實施し、先手を打つて彼等の希望を満たした。僕は同時に彼等の思想を善導し、奉公心の養成に心血を注いだ。僕は職員を諭して常に言つた。

「職員は職工あつての職員である。職工を懇切に指導し、思ふ如き製品を出すことが、第一の責務である。職工に對し常に親切を以て臨め」之は製造所統治の僕の哲學だつた。

六年十月一日、關東地方に未曾有の大暴風があつた。此時構内を貫流する、三田用水路は決潰し、工場内は一面の洪水となつた。此時隣接の二軒は爲めに倒壊し多大の損害を受けた。僕は防水作業に必死の努力を拂ひ、晝夜兼行應急工事を監督し、漸くにして喰ひ止むるを得たが、地方一帯の被害は頗る甚大で慘狀を極めたものだつた。此時より市場の木材は暴騰し、次に米價は急奔し、遂には壹圓につき一升五合にまで至つた。之が爲め困るものは獨り給料生活者のみならず、一般社會人に大なる脅威を與へ、越中に米騒動さへ起つた事は、未だ記憶に新なる處である。

僕は此時代用食を獎勵し、率先之れが工夫に任じ、遂に製造所の一室に、うどん製造を開始した。之は米食辨當を廢止せんとする魂膽だつた。此計畫は幸ひに功を奏し、逐次全員はうどん食を代用するに至つた。今造兵廠の各所に於て、うどん食の販賣を見るは、此の時の筋を引いてのことである。

僕は發頭人たるの自覺より、退職に至るまで十五年間日々うどんを晝食として用ゐた。これは、

第一、經濟であり

第二、米の消費を少なくし

第三、主婦として辨當調製の手間を省けること

の利がある。當時まだ一般職工は腰辨と稱し、辨當持參で通勤したものだつた。

此の頃世間一般に労働運動が盛んに流行し、煽動とストライキで日々の新聞を賑はした。當時労働者は、外來思想に無理解であるだけに、煽動に乗る好奇心を多分に持つてゐた。役人又徒らに職權を振り廻して、之れが鎮壓に當る癖があつた。従つて兩者の間に溝が生じ、其の勢ますます強烈となつた。當時彼等は只單純に團結の力により、一意生活の安定を得んとしたまでのもので、何等深い魂膽あつての事ではなかつた。

當所で製造上一番困難と思つたのは、信管に用ゐる火導薬だつた。從來の火導薬は、燃燒不規則で、高空に於て消火する缺點があり、之を改良すべき研究が必要だつた。此研究は僕の著任より後任者に

引き繼ぐまでの永いもので、僕は滯歐中の久村少佐報告を参考とし、炭材の改良と、新劑の添加により、根本的の改良を試みんとした。幸ひ四年の在職中に於て大體の見透をつけ、基礎條件を決定することを得た。今日の火導薬は、實に此時代のものに、幾分の進化を見たものだと思ふ。

大正八年一月、早稻田大學講師を囑託され、採鑛冶金科に火薬の講座を擔任した。毎週一回二時間の約束で、二箇年間同様に教鞭を執つた。之は前任講師、西松帝大教授の外國留學中の代講だったが、僕として先生商賣は初めてであり、一週二時間の講義の爲め、實に十數時間の準備がかり、却々容易ならざる重荷だつた。僕はマーシャルの火薬學を主とし、之れに若干他の材料を取り容れ、口授録を作つた爲め、第二年目より大いに氣樂だつた。當時早稻田大學の總長は、大隈侯爵で、學長は平沼叔郎博士、主任科長は徳永博士だつた。又全校の講師は百數十名の多きを數へ、各専門の大家を集めたものだつた。

大正九年十月二日の夕、目黒構内で火災が起つた。それは鹽斗薬工場で、原因は火薬の自然發火だつた。一時構外に働く鮮人工事に疑が懸つたが、それは間もなく解消された。次に自然發火の原因が研究され、陸軍技術界の權威、田中弘太郎少將（後の陸軍大將）の判定まで受けたが、結局不明に終つた。僕は此日夕食後の散歩として、澁谷方面にぶら／＼出懸け、昨夜來の豪雨による目黒川、氾濫の跡を見てゐたが、計らずも半鐘の音を聞かされた。然しどこかの火事位に、軽く思ひ、人の行く方

へとついで行つたが、其中、半鐘は早打ちとなり、駆け出す人はゑびす驛を目がけて「火薬庫だ」と叫んだ。此時僕は大に驚き、急ぎ門前に駆けつけた。見れば奥の方より上る黒煙は濛々として、物凄い勢だつた。然も正門は堅く閉され、群衆は門前に騒々しく揉み合つて居つた。僕は和服のまゝ、側門より飛び込み、現場に於て萬般の指揮に當つた。間もなく一軒を焼く丈で鎮火を見たが、次級者の渡大尉や、家族のものは一時大なる恐怖に襲はれたとのことである。所長はめつたに外出も出來ず、又外出をしても、火薬製造所を背負つてゐては、常に不安の念にかられ、人に知られぬ氣苦勞をするものである。

僕の時代、當所の拂ひ下げ火薬が、運搬請負者の手で某所に運搬の途中、省線目黒驛附近で、電車に衝突して爆發を起した。これが爲め乗客の一部と運搬夫を死去せしめ世間を騒がしたことがある。某新聞はその日の夕刊に、早速本記事を載せ、「所長は自分の造つた火薬を、爆發せしめて、無責任の言動を敢てする、宜敷恥を知れ」と責めた。然し僕は軍醫以下看護團を現場に派遣し、萬遺算なき様、それ／＼應急の處置を取り、心からなる同情と援助を惜しまなかつた積りだが、僕は「鐵道省の遮斷夫や、監督權外の運搬夫の仕事に迄、責任を持つ程不忠實の所長でない」と新聞記者に説明したので斯ることを書いたことと思ふ。當時外勤記者がよく認識を得ずして、徒らに筆誅を加へたものだが、大に慎むべき事だと思つた。

當時製造所附近は俄かに發展し、それが爲め近火に見舞はるゝこと屢々あつた。これが爲め目黒川沿岸一帯の地を避害地に買収し危険を豫防したが、何れは遠く移轉するを適當の處置と認め、上司に於ても内々其計畫をすゝめ、僕等も命を受け一、二の候補地を視察したことがある。今では他に合併されたが、今日此處に海軍技術研究所の設立されあるは此の結果である。

八年夏僕を除く全家族は、房州館山に避暑した。之れは開闢以來初めてのことであり、一應贅澤の様に見ゆるが、決してさうではない。壽美子の死亡により妻は疲勞した爲め、それが恢復を計ることに、虚弱なる子供の體質改善が主たる目的だつた。幸ひ岸榮太郎氏の周旋により、農家の一軒を借り受け、滞在中は同氏と往來し、楽しく一夏を過ぐることを得た。僕は毎日曜日を利用し、一晚泊りに出懸けるを常とし、留守居の世話は馬丁一家にやつて貰つたので家族に心配をかけずして終つた。此一夏海岸生活の効果は、其年風引きの少なかつたことで、妻も子供も大變に丈夫になつたことを幸福に思つた。岸榮太郎氏は家内の親戚で、海軍大佐を以てやめ會て水産講習所の講師を勤めた温厚無比の人だつた。

第十二、庶務課長と勞働問題

僕は永い間現業本位の製造所に勤めたが、中佐に昇進と共に東京砲兵工廠の庶務課長に轉任した。

これは大正十年の七月のことで、進級は初停年であり然も上位に拔擢されたので、愈々微力を致さんものと決心した。

時の提理は松浦中將で、廠内の事なら目を閉ぢても、歩き得ると云はるゝ程、事情に明るい練達堪能の人だつた。僕は此提理の下に、全般の人事を掌理し萬般の事務を擔任した。當時工廠の隸下には、遠く朝鮮より名古屋、岩鼻にかけ、十數ヶ所の製造所を有し、職工總數二萬に餘る大世帯だつた。それに提理は頗る緻密の人で、僕はたまかの人間であり、謂はゞ其配置が逆であるので、そこに言はれぬ苦勞があつたが、人を使ふに妙を得てゐる提理は、細部の事務には一切口出さず、課長に一任するの雅量を示された。斯くして僕も働き甲斐があり、懸命に努力した。

課長として技術課に井上與一郎大佐あり、作業課に阿部保太郎中佐あり、會計課に松尾經喜主計正があつたが、各其の道に精通した、長年勤務の人ばかりで、僕は課長中一番の新參だつた。僕は職務上是等課長に對し事務上の連繫を取り、又陸軍省へは五百度參りをする、工廠の幹事役で僕の下に、山本小彌太大尉と、兒島豊大尉あり、特に手足となつて働いて呉れた。その勞働問題の八ヶ間敷かつた時、某雇員は曰く「兒島大尉は一日少くも三十回は階段を上下し、然も昇降共二段飛びの駆足だつた」と云ふたが、當時それ程多忙でもあり、又それ程働き手でもあつたことが分る。此働き手の山本、兒島兩氏も今は故人となつて相見ゆるを得ないのは、實に悲しき極めである。

此頃世間は運動問題で、騒然として居つた。僕等は此等の對策と處置について、研究を怠らなかつた。僕は此時労働運動史や、労働立法の原理など一通りは研究した。當時廠外に、労働ブローカーとして安達和、芳川哲などの猛者があり、砲兵工廠を喰ひ物として、日々の如く活動し、或は職工を煽動し、或は演説會を開き、或は面會を強要して、いやがらせをやつた。僕等は協調會と憲兵隊並に警察官などと連絡と取り、合法適切と信ずる手段に於て對應した。僕等の根本方針として、職工の云はんと欲する意志が、部外ブローカーの手を経て申出さるゝ如きは間違つてゐる。少なくとも廠内問題に關する限りは、廠内それ〴〵の機關によるべきだ、と云ふにあつた。僕等は當時の情勢より見て、職工代表者の制度を、今少しく強化確立するを必要とし、其原案作成を協議した。早速委員を擧げて之が立案に著手し、間もなく實施を見るに至つた。要旨の要は、本會は職工の意志發表機關として又上司の樞間機關として存在し、之が要素たる職工代表者は其半數を職工長より取り、残り半數を一般職工の被選者を以て充つると云ふのであつて、用途により之を三種に分類するのであつた。

即ち

一、一工場内の代表者會

二、課所毎の代表者會

三、工廠全體の代表者會

實施の結果は、懇談よりはむしろ議論に傾き、時には議會の如き觀を呈し、又或時は法廷の如き感を抱かしめたことあるが、これは一時的煽動運動の殷盛なりし時だけであつて、他は運用の妙さへよければ、彼是兩者の緩衝機關となり、頗る有效なるものと認められた。

砲兵工廠は當時職工の人員過剰で腦まされ、之が爲め當局間に或は工場間の轉屬問題から斷然解雇すべしとする大問題に至るまで、雜多の意見が闘はされ、頭痛の種だつたが、これこそ實に労働ブローカーの付け込むに芳ばしい時だつた。此頃僕は構外の一電柱に、「南部所長を葬れ」と書いた貼り札のあるのを見て驚いた。僕は其の「葬れ」の意味が那邊にあるやを解し兼ね、種々と調査せしめたが判明しなかつた。當時憲兵は僕等末輩に迄護衛を付し、私宅に張り番さへつけて呉れた程、物情騒然たる世間だつた。僕等はこの險惡なる状況下にあつて、常に彼等の行動を探知し、先手を打つて彼等の氣勢を挫くのに骨折つた。然し早晩三、四千人の職工を整理せねばならぬ運命に立ち至つたので、僕等は隱密の中に、早くも之れが對策を決定し、準備をさ〴〵怠らなかつた。對策と稱するも別に名案あるに非ず、只相當の退職賜金を與へて誠首するにあつた。然し此れには之れに應ずる政府の豫算を必要とし、従つて議會の協賛を経るの面倒があつた。是等大問題は、大藏、陸軍兩省間で行はれたが、具體的小問題に入れば、僕等の手に移り未解決のもの多々あつた。其最も困つたものは祕密の關係で、僕等は随分と慎重に取り扱つた積りだが、關係面の廣いだけ、どうしても匂ひ位は、漏るるも

の見え、頻りと言質を得んと迫つて来た。僕は彼等に對し常に相手を激昂させぬ様努め、向が怒れば、こちらは笑ふと言ふ態度で、頗る不得要領振りを發揮した。之が爲め面會の強要を受くるも、徒らに撃退せず。幾回にても二、三分の會見はしてやつた。さうして要領を得させないのが、僕の取つた戦法だつた。これが爲め僕は彼等より「瓢箪鯨」と言ふ綽名を貰つた。當時某新聞に僕の談話が掲載され世の注目を引いたが、これは解雇に關する否認事項を除き、大體に於て當時の情況を寫してゐると見て差支ない。其全文を示せば左の通りである。

補充せずにも早くも三千人減少

軍縮の實現には新兵器の製造が心頼み

長谷川庶務課長談

右につき同工廠庶務課長、長谷川中佐は、松浦提理の意を齎して語る。「解雇の噂が一部のもの、中にあるとは聞いてゐるが、それは餘りに穿ち過ぎた考へである。成る程一般の趨勢に漏れず、工廠の方も過般來、可成りの窮狀にあることは事實で、これが爲めには、昨來春以來十時間作業を九時間に短縮し、月々減耗する二百數十人からの職工に對しては、一人の補充をも行はないのである。その爲め昨年三月以來現在までに、約二千人に近い職工が減少してゐる譯で、時間短縮と相待つて、辛うじて調節を計つてゐるが、現在職工の總數は一萬五千人でも、猶且多少の職工冗員はある。然し工廠と

しては先般來、外國に人を特派して註文を取つてゐるし、又民間拂下の火藥類も相當にあるので窮境はどうにか押し切つて行ける積りであるが、外國の註文が何の程度まで來るか、目下疑問である。孰れにしても、今暫くは職工の移動に補充を行はず、自然淘汰の形で行くだらうと觀測して居る。それから軍縮問題に依る工廠の影響は、現在詳かでないが、私等の觀測では現在名古屋の工廠が、飛行機製作の爲め異常な多忙を極めてゐる様に、新兵器採用の折柄、續々と之が出て來る様になれば、陸軍にたとへ軍縮が實現されたとして、工廠の方は多忙になる筈である。今議會に對する豫算の關係は忽ち大きな影響はあるが、目下の所餘り心配されてゐない。然し外國註文の不況、豫算の減少などが重ねて來れば、方法も考へねばならぬが、それとても現在の方針の自然淘汰に依れば、三、四月頃までは、優に一千人の減少があるので、此調子を何時まで續けて行くかが問題で、これから一年餘りも此儘で通うせば三、四千人の職工を減することになる」と以上の様に語つた。

僕は退職手当支給決定に際し、吉田兵器局長、鈴木工政課長支援の下に大藏省書記官などと大に折衝した。特に常備者と請負者の不均衡につき、多大の努力を拂ひ、其結果合理的解決を見た。

此時代、東京、大阪兩工廠の合併論あり、一元統制の下に資本の運用を計るは、時宜に適するものとなし、兵器局長吉田少將等以下大に主張する處であつた。遂に十二年四月一日新たに陸軍造兵廠が出来し以て兩工廠を一元的に統轄した。此合併と同時に前記大問題の人員淘汰は斷行され、茲に内容

外觀共に一大改革が行はれた。僕は庶務課長在職二年で相當頭を痛めた。又可なりに健康を害した。僕は此時代性質に合はぬ交際官を勤めた。協調會理事添田敬次郎氏、職業紹介所長豊原又男氏など、皆此の時代に知己となつた人である。其他憲兵隊方面や警察官にも數多の知人を得た。

松浦提理在職の末期だつた。同提理に隨行して、事務打合せと民間工場視察の爲め、關西地方に旅行した。此時の旅程愉快で朗かなことはなかつた。確か十一年の夏だつたが、屬官拔きの提理と只二人で氣樂に出懸けた。先づ最初に姫路に降りて日本火薬の黒色薬工場を見た。同所で角所長を初め、東京より來た同會社の石藤豊太氏と高橋達太郎氏の案内を受け、偶々内務省の松岡技師も一緒に共に構内を一巡した。時正に炎暑の候、焼くが如き日照りの日で、汗かきの僕等は顔より背にかげ、流汗滾々たるものがあつた。事務所で冷ビールの御馳走になり、雑談數刻の後辭して京都に向つた。當所は僕の目黒にゐる頃、石藤豊太氏の設計により出來たもので、僕も多少材料は提供したと思つて居る。所長の角氏は會ての部下であり、縁故淺からぬ人だつた。

京都では近太旅館に入り、此處で初めて暑さを忘れ、自由の身となつた。野人禮に倣はずで、晩食は浴衣姿の半裸體で、チビリ〜と氣樂に飲んだ。松浦提理は、どちらかと云へば、長酒の方であり、僕はグイ〜の早酒だつた。その間多少そりの合はぬ所もあつたが、僕は機を見て散歩を勧めた。一パイ機嫌で十時頃より夜涼みと洒落出した。四條通を足に任せて歩き廻る中、いつとはなしに譯の分

らぬ處に上り、飲み直しを初め、遅くなつて歸つて來た。翌日は大阪工廠に横山提理を訪ひ、公務上の會談を遂げ、構内一部を巡視して、再び京都に引き返した。

翌八月四日は武豊町の帝國火薬工場を視察した。此處には前工廠技師有本完氏が所長として居り、然も舊知の間柄だつたので、特に懇懇に案内された。十萬坪に餘る廣い構内を説明を聞きながら汗を拭きつゝ一巡した。こゝは厚狭の日本火薬會社と共に、日本で唯二つの民間ダイナマイト工場であつた。此の日も昨日に劣らぬ暑さで、巡視後一パイの冷水を難有く頂戴し、辭して龜崎町の旅館に入つた。

旅館の二階からは、海岸一帶の風景手に取る如く見え、海より來たる涼風は、徐ろに面を拂ひ、疲勞し切つた僕等の氣分を大に好轉せしめた。間もなく有本氏は來訪され、晩餐が初まり、一座は次第に賑はつて來た。此時陽は既に没し、皓々たる月は天空にさえ互り、其まん丸い影は、銀色の波間に映じて、凄味ある情景を呈して來た。そこへ藝者が現はれ、一座を取り持つ、銚子は倒れる、酔は廻る。小唄も出れば義太夫も始まる、却々陽氣の場面に展開した。流石に嚴めしい中將閣下も此時ばかりは、相好を崩して好々爺となり、御機嫌頗る斜めならずだつた。斯くの如くして十二分の懇親を重ね有本氏は辭去した。僕等は此夜、此宿に一泊したが、蒸し暑い晩で、扇風機を夜中かけながら寝んだ事を覚えてゐる。此夜は舊曆六月十四日の晩で、宿の名は野洲樓と云つた。此旅行でまだ一つ愉快

な話がある。それは辨天島の宿屋の話で、僕等は不意に此地に著き出し抜けに丸文支店を訪ふたので、驚いたのは此家の主人だった。然し普通なればお断りを喰ふべき大入満員の際にも拘はらず、中將閣下の御威光により無理が通り、漸く女中部屋に通され、臺所の真中で晝食を喫つた。元より双方承知の上で、僕等は反て此場合に處する臨機の優遇を感謝した。又其晩食が痛快だった。縁先の冷しい處に座を占め、猿又一つの布袋腹で幾本もビールを傾け、飲み過ぎて腹をこわしたと云ふ滑稽なる場面は、實に松浦中將現職中最後の記念として、忘れ難い平民的旅行の思ひ出であつた。

僕の庶務課長なる仕事は三千二百人と云ふ多數の職工を、一擧にして整理したことを以て一段落とし幕を閉じた。然も何等不平なく無事圓滿の中に實行し得たことは、獨り僕一人の幸福のみではなかつた。

第十三、火工廠課長・所長時代

大正十二年四月一日、新たに陸軍造兵廠條例が發布され、同時に元東京砲兵工廠の十條にあつた製造所と、岩鼻、宇治、目黒の三火藥製造所とが合體し、一つの火工廠が編成された。此時火工廠長として、前東京工廠提理南部中將が就任され、王子町下十條に本部を開設した。火工廠は全國の火藥、爆藥、火工品の製造機關を統轄する工廠で、僕は此時此工廠に作業課長として新たなる職務についた。火工

廠は僕に取つては古巢であり、從て廠内事情にも明るく、何かと便利だつたも難有かつた。

僕は間もなく、板橋火藥製造所に轉じたが、作業課長は當分兼動だつた。

此間九月一日に例の關東大震災が勃發した。之が爲め王子火藥製造所は全滅し、板橋火藥製造所は半壊となり、十條構内亦同様の被害を蒙つた。震災より受けた此作業力の缺陷を、如何にして速かに復舊するかは、國防上より見て當時の大問題だつた。然し僕等は只應急工事により、若干なりと仕事の出来る様にとそれのみを急いだ。幸ひ一同必死の努力により一週間後に、煙突より微かなる煙が上るに至つたので、世間一般を驚かした。此時吉田局長、横山長官より御褒めの言葉にさへ與つたことを覚えてゐる。

震災の起つた瞬間、僕は本部二階にあつて、造兵廠と電話中だつたが、其震動のあまりに強かつた爲め、中途より逃げ出し、よろけながら階段を降つて、室外馬車廻しへと難を避けた。續いて會計課長は、御膳を冠つて出て來た。更に給仕は大聲を立て、逃げ出し、松の樹と間違へて僕の脚に縋り付くなど、其狼狽と混亂とは筆紙に盡し難たい光景だつた。満目只これ震動と破壊あるのみで、人心恐々其爲す處を知らざる有様だつた。此時、間もなく瀧の川方面に當つて黒烟の上るを見た。僕は瞬間火藥だと直感し、宙を飛んで板橋火藥製造所に駆け付けたが、火事は向側の砲兵工科學校の分析場だつた。

板橋構内の被害は、煙突の倒壊、橋梁の墜落、煉瓦造家の破壊等頗る多數で、手のつけ様もなかつた。その日は調査と非常警戒に全力を盡したが、通信機關の杜絶と、點燈の不能で、夜は物凄く暗黒の世界だつた。翌日より流言蜚語もぼつ／＼初まり、不逞鮮人の襲來など盛んに傳へられ、物情騒然たる中に數日を送つた。幸ひ地震突發の時間は晝食時であつたので我板橋構内に於ては微傷程度のもので僅かに二人を數へるのみだつたのは仕合せだつた。

自宅では僕の歸りが遅いので、大に案じたさうだが、夜半近くに至り歸宅したので安心した。自宅より見たる當夜の東京は只一連の猛火で、火災各所に起り濛々たる物凄しい勢は、一同の恐怖心を募らすのみだつた。加ふに鐵道線路上遠く銃聲さへ聞え、暗夜の静けさを破るばかりでなく、強盜か、殺人か、鮮人かなどと徒らに家人を怯へしむるのだつた。僕は夜中女中をつれ、提灯片手に我家の周圍を自警した。此時大小の餘震は間斷なく來襲し、未だ危険を脱するの時機に達しなかつたので、家族一同は開放の縁側にあつて半身を庭に出したまゝ、假眠をなし、隣家の白倉氏の如き、庭の真中に蚊帳を張り込んで寝んだ程だつた。

我家の被害は柱は傾き、壁は落ち、瓦は飛ぶ位の程度で半壊とまでは至らなかつた。斯くの如くにして當分の間は、内も役所も、此事件の跡始末と復舊工事で寧日なしたつた。

僕は板橋火藥製造所に於ても執務の方針を従來と變へなかつた。僕は益々職工思想の善導に努め、

之が手段として敬神の念を鼓舞し、國民精神の増長を計つた。僕は先づ、

第一、構内に出世稻荷社を建設した。

御神體は曾て此地に祀られ陸軍用地となるに及び、板橋町に遷座されたものだつたが、今度再び舊地に還御を取り計つたのである。本社は従事員一同の勞力奉仕で出來上つたもので、他所のものは其筋道を異にしてゐる。

第二、毎年正月に於て、従事員一同を引率し、明治神宮に參拜するを例とした。當日は早朝を選び、まだ夜の明けぬ一番電車を利用して、板橋を出發し拂曉を期して一齊に參拜を行ふので、歸途は其儘登應出務するを例とした。僕は常に「至誠神に通ず」と聞くが、此の森嚴極まりなき、神の御前に心を込めて、手を拍ち、靜かに眼を閉ぢ、我れを忘れて自然に頭を下げる其時の氣持は、確かに之であると思ふ。

第三、僕は毎週二回、職工の全員又は一部に對し、講演を行つた。之は我國體の特異性と、國民義務の根本感念についてであつた。

第四、僕は製造所の一隅に、臨時託兒室を造つて、職工生活の一部を援助した。

板橋構内正門を入りて、石造の記念碑がある。之は我國火藥界の恩人、澤太郎左工門氏の偉業を偲ぶ記念碑である。其本體は壓磨機を以て造られ、當時の火藥製造機械を標本として示してゐる。

我國に於て西洋式火薬の製造をやつたのは、明治九年、板橋火薬製造所竣工以來のこと、澤太郎左工門氏の力に俟つことが頗る多い。幕府は慶應元年、和蘭に留學せる役人、澤太郎左工門に命じて火薬製造機械購入の爲め、其取調べをさせた。彼は和蘭陸軍少佐、バルハンシューズ氏と相談の上、白耳義國コープアル製造所の器械を購入せんとし、當時同製造所が工事中なるを幸ひ、工事人夫として入り込み、七十日の長きに亘つて、機械の圖面と機能とを十分調査し之を機械技師ヘリビリオン氏に註文した。其苦心慘澹したる此等註文の機械は、見事出来上り慶應三年横濱に到着した。間もなく据付工事に著手したが、明治元年、戊辰の役に際し其機械全部は取り外され、次で瀧の川火薬製造工場は悉く破壊された。然し機械の手入と保存がよかつたと見え戦後再び之が建設を見、明治九年八月に竣工した。今の板橋火薬製造所は之である。

僕は大正十二年七月、今の住宅に移つた。之は住宅組合により建てられたもので、組合員は東京砲兵工廠一部の職員約三十人である。年限は二十年で、地代として最初十年は三錢だったが、目下四錢五厘となつてゐる。それでも附近一帯十錢の相場に比し、頗る格安であるのは仕合せである。今は漸く市街地となつたが、當時は全くの畑地で、二三の農家が點在しただけの、所謂練馬大根の本場だつた。

僕等の一區劃は、特に六軒の集團で、大野健明、松井勝二、鈴木市太郎、渡優大、白倉司馬太の諸

氏と僕の六人が住まひ、十年以來善隣として、親しく交つてゐる。

第十四、陸軍造兵廠各部長時代

僕は大正十四年五月より昭和六年七月まで、滿六年と二ヶ月、造兵廠本部で部長を勤めた。最初は技術部長となり、次で總務部長を兼勤し、終りに作業部長として三年を送つた。最初の長官は今の吉田豊彦大將で、次は緒方勝一大將だつた。何れも後輩を懇切に指導され、僕は兩大將より多大の恩顧を被つた。

技術部長時代に外國出張を命ぜられ、約七ヶ月間職務を見なかつたが、大部は長官指導の下に、「セッセ」と勉強した。此時代震災復舊、土地整理、國防充備に關する設備上の問題が輻湊し、此等の仕事に忙殺された。此等は皆年度内に竣工せしむる必要があつて、然も會計検査院の検査を受くべき大事なもので、工事一切萬遺漏なき様、其實施を監督する必要があつた。

震災の苦い經驗は、兵器製造の如き重要な工場の設置は、其種類毎に少なくとも二箇所以上に分置するの必要を教へた。これ有事に際し一地點を失ふも、他の地に於て一半の補給をなさしむると云ふ考から來てゐるもので、我造兵廠に於ける小倉、名古屋の設備の如き皆此根本策より出發してゐる。

當時技術部には僕の外、後藤尙、富永倉平の兩技師あり、孰れも學識、經驗に富み其道に堪能な人

であつて、此二人が機械と建築をそれ／＼擔任して呉れたので、僕は部長として職を執る上に、頗る便宜を得た。

此時代研究問題の能率化を計る目的で、陸軍技術本部が主宰者となり、各官衙學校の研究問題を検討する會議があつた。これは眞に國軍として、緊急缺くべからざるものを先きにし、同時に各所間重複研究の無駄を省き、以て陸軍全體として、其能率を向上せんとする爲めのものだつた。

又制式兵器の單純化の計畫も、同時に進められた。之は各種兵器の材料部品の寸度、品質を整理し其單純化を期するにあつて、委員を擧げ研究した結果は、豫想外の收獲があつた。

又從來より工業品規格統一問題あり、之は商工省主宰で、各所より委員を擧げ研究を續けたものだが、造兵廠よりも能村少將以下を送り研鑽せしめた。當時螺子問題が議論の中心で、萬國式とか、英國式とか云うて騒いだ時だつた。

以上の事項は、悉く技術部擔任の業務で廠内工藝技術の獎勵と共に、大に努むべき重要事項だつたが、専門者にあらざる僕は、此等の事務を纏める爲め随分と骨を折つた。

僕は長官隨行若しくは、部長として屢々管外各地を視察する機會を得た。或時は秘密裡に小倉工廠敷地偵察として、瀬戸内海沿岸に、或は九州地方に、又或時は工場視察として滿洲、朝鮮、北陸、其他四國中國を歩いた。

小倉工廠の敷地買収は、僕の部長在職中に行はれ、僕は奥主主計を伴ひ此任に當つた。此時小倉の所長は小川大佐で、小倉市長は神崎氏だつた。

忠海兵器製造所の設立も、僕の技術部長時代で、吉田長官に隨行し、よく此地を視察した。當時忠海町長は望月忠吉氏で、氏は政友會の長老、望月圭介氏の息だつた。

忠海兵器製造所の工場は、同町より海上半里もある大久野島にあり、所長以下従事員一同悉く船で出勤退廠してゐた。

一日、吉田長官に隨行し、瀬戸内海を船で渡り、忠海に行つたが、著港と同時に數發の煙火が打ち揚げられ、町長以下、學校長、警察署長、町會議員等埠頭に整列して之を迎へ、國旗と提灯で、大に歓迎されたことがある。之には長官も反て恐縮され、田舎はこんなものだと言はれた。臨濟館は當地隨一の旅館で、長官も工廠長も皆此宿に入るを常とした。僕は火工廠長として檢閲の爲め、當地に來た時も、門前に砂を盛り、幕と提灯で之を飾り、「火工廠長閣下御宿舎」と貼札して待遇されたのに閉口した。田舎とは云へ僕等の如き末輩にまで、斯る取扱ひをなすはむしろ我身を恥かしく思ふた。

昭和三年八月十日長官の更迭があり、吉田中將は技術本部に榮轉し、緒方中將代つて、研究所長より就任された。僕は同時に技術部長より作業部長に變り、作業經營の任に當つた。當時造兵廠は濱口内閣の餘波を受け、不景氣に襲はれてゐた。陸軍省よりの註文品は減少する一方で、一萬餘人の職工

を食はずにはあまりに仕事が多かつた。どうしても收支の計算が取れず、極力雑費の節約を計り、同時に就業時間の短縮を行ふより策はなかつた。之が爲め新たに實行豫算を編成し、各工廠の支出を陸軍省豫算以外に制限した。

造兵廠の作業會計は、法律により定められたる獨立會計であつて、一定の資金が與へられ、之により一切の運用を一任すると云ふ建前であつた。換言すれば一般會計より分離し、毎年支出の上に國庫に迷惑をかけないと云ふ制度であつて、それだけ順調の時にはよいが、不景氣の際には都合悪く、僕等は當時大に苦勞をさせられた。只然し最善と信する方策により邁進するより外なかつた。方策と云うても別に妙案あるでなく、只眞劍に廣義の節約を厲行するだけのことで、節約と稱する中には原料材料の節約は固より、創意工夫、廢物利用、試験研究等、人的物的の能率増進を包むもので、換言すれば、生産費の低減を意味した。長官以下一致協力之が遂行に努力し、以て此時代を漸く押切つて來た。然し同時に國家總動員の見地に基き、輕易なる軍需品は之を民間工場に出す計畫も行はれ、此場合としてはむしろ、反對の處置をも取らねばならぬ情勢に迫られたので、造兵廠としては二重の痛手に遭遇したのである。

作業部長在職中、長官檢閲に高級屬員として、管内各地に出張し、引續き滿洲に旅行したことがある。

五年六月十二日、緒方中將外九名の檢閲屬員は東京を出發し、先づ宇治火藥製造所に向つた。翌日より二日間當所の巡視をすませ、第三日午前には講評があつた。檢閲として見たものは、軍紀、風紀、警戒、經營、技術、會計、衛生に就てであつて、長官は親しく執務の實際を検し、所見を開陳し、以て將來の改善に資するので、之が爲め屬員は、各其分擔に従ひ、特に詳細なる事項を検し、書類は固より現場の隅々までも隈なく廻り、其の實況を報告し、長官講評の參考材料を與へるのである。講評案の作成は普通高級屬員に於て擔任し、長官より適宜修正を受け決定されるもので、之が一年間に於ける其の製造所の成績となるのである。宇治檢閲中本部は澤文旅館に置かれ、僕等は日々檢閲事務に服し、就中講評案の作成に勉強したものである。案の作成に當り時には屬員間に議論が起り、稀に激越なる口論となることさへあるが、何れも皆熱心、努力の結果で、屬員の功勞も大なりと云ふべきである。

次は忠海兵器製造所に行つた。本部を臨濤館に置き先づ一服したが、初日の晩は問題なしで、屬員一同も此處では、旅館の二階から日本百景の一たる夜の港を眺めながら、晩食に一杯傾け、談笑に耽ける餘裕があつた。翌十七日は、大久野島に渡り、島内の檢閲を初めた。小さい製造所だけに、見るものも少なく一日を以て終了し、午後四時再び船で歸館した。それからは又明日の講評準備で勢ひ相當に多忙だつた。

次は小倉の検閲で、廿一日より三日間に互り施行されたが、其要領は前二者と同一だった。朝鮮では、東萊温泉で半日の慰安を取り後平壤に向つた。平壤では鐵道ホテルを本部としたが、これは官營ホテルで、確か經營主任は、女雇員だと聞いた。當地では一日閑を得、日清戦争の戦跡たる牡丹臺と玄武門を遊覽し、續いて大同江の美しき景色を賞し、キースンのサービスで製造所職員と會食するの餘裕もあつた。席上、キースンの速席自筆の、扇繪を貰ふ光榮に預つたが、其の技巧却々侮り難いものだった。

平壤検閲は三日で終了し、こゝで一同と別れ、北川軍醫正と二人で滿洲視察に向つた。安東縣についたのが其日の夕刻で、僕等は一吋下車して、市内の見物をなし、滿鐵會社のバスで奉天に向つた。

汽車は朝鮮でも、滿洲でも、廣くて氣持がよい。特に滿鐵特急車の一等展望車は、頗る明快で乗り心地のよいこと東洋一と感じた。

奉天驛では、明石東次郎氏に迎へられ、直ちに審陽ホテルに入つた。早速同氏外二、三の案内により張作霖の兵工廠を視察した。構内は幾十萬坪の廣さで、立派な工場が幾つもあつたが、内容から云へば、獨逸式あり、英國流あり、又日本型も混つて居り、一貫した筋がなかつた様に見えた。然し實質に於ては堂々たる工廠で、當時張作霖の威勢のよいことが分つた。然し同時に民衆を絞つた金の力

だとも思へた。工廠長米春霖氏とは明石氏の紹介で會見し、午餐を共にしたが、此時彼は、腹意なき意見を求めた。僕は「設備は誠に立派だが、之を運用する經營の方面に尙ほ改善の餘地なきや、又經費の節約もまだく出來ると思ふが如何、第一人間の使ひ方が甚だ多い様に見受けた」と卒直に答へた。彼は感謝して懇懃なる態度で、「まだ創業早々で、實のある處に到つて居らぬが、將來も宜敷頼む」と挨拶し終つて、「近々の中東京を訪問するから、見學方宜敷頼む」と懇望し、別れを告げた。

翌日は奉天市街の繁榮振りを見、北陵、東陵で清朝の古跡を尋ね、次で撫順炭坑と、オイルセールの工場を視察した。此時露天掘の炭坑附近でアンペラ屋根の土窟を見た。これは苦力の住ひ家で、そのあまりに原始的なる憐れな生活の實況を見て、むしろ氣の毒に感じた。同時に貧富の差が斯くも大なる世の中かと感ぜられ、若し赤色の男にでも見られてはと、餘計な心配までした程だった。

此晩は明石氏の晩餐會に招かれ、支那音樂の餘興を聞いた。料理は甚だ美味だったが、音樂は騒々しいだけで、深い感じを呼ばなかつた。僕は折角の厚意を感謝し、其晩遅く旅順に向つた。

翌七月一日は旅順で、徳田速雄氏を訪ひ、會食後同氏の案内で戦跡の見物に出懸けた。昔の戰場は大して變つて居らぬので、懷舊の念に堪へなかつた。白玉山では忠魂碑に戦友の靈を弔ひ、東鷄冠山では、第一回總攻撃の失敗を偲び、二〇三高地に登つては、頂上と半腹に小乃木兄弟の墓が淋しく其骨を埋めて居るのを見、特に感慨無量だった。終りに水師營に來たり、乃木、ステツセル會見場に於

ける昔其儘の支那屋を見、せめての記念に繪端書を買ひ求めて持ち歸つた。旅順より大連までは、海岸を自動車で走つた。沿道の景色は頗る美しく、そこ等の別荘も、住宅も皆満鐵社員のもので、却々豪華なものだつた。

七月二日は大連市を見物し、夜は本通りと支那街を散歩し、支那緞子一二反を買求め土産とした。滿洲陸軍倉庫は僕等の宿舎で、食事の世話から給仕一切の仕事は、職員家族の特別サービスにより行はれると聞いて僕等は大に恐縮した。下の關では新聞記者に捕へられ、質問を喰つたが、適當にあしらひ別府に急いだ。

別府では一晚ユツクリ休養する積りだつたが、然し僕には初めての處であり、見物を逃す譯にも行かず、急いで海岸の砂風呂や、地獄泉をかけ廻り、一泊だけで下の關より一路東京に歸つた。これが二十六日間の旅行で、國內出張として一番長期のものだつた。

僕は大正五年八月一日、陸軍少將に昇進し其儘作業部長を續けた、此間會計検査院の検査を受けること一再でなかつた。會計検査院は二年に一度位の割合で検査に来てゐた。一行は四五名のことが多く、見るものは書類と現場で、就中金錢、物品の出納が嚴重だつた。又不當支出の有無と利益の抱藏については詳細に検討される。僕等の掛員は此検査に立會ひ答辯するが、不當と思はるれば審理書が來たり、筆記答辯書を提出する。尙意に満たざれば、不當支出として議會に判斷を求める。此權威あ

る検査あるが爲め、僕等は平時より執務の上に細心の注意を拂ふのであつた。

六年五月には特命検閲を受けた。特命検閲は、勅命を奉じて行はるゝ、最高の検閲であつて、軍隊は毎年施行されるが、造兵廠の如き作業廳は例外に屬し、此の時の検閲はたしか第三回目だつたかと思ふ。

此時の検閲使は、陸軍大將白川義則閣下で、高級屬員は今の參謀次長西尾壽造中將だつた。其他參謀本部、陸軍省の課長以下十數名を屬員とし、堂々として乗り込まるので、我等は、勅使の禮を以て之を迎へ、伺候式より初め嚴肅なる検査を受くるのであつた。検閲第一日に試問があり、長官以下部長一同別室に於て、業務上に關する質問を受けた。長官は検閲使より直接に、部長は高級屬員により間接に、以下全將校夫れく、速座の問題を受け、其能力を検査されるのであつた。

第二日に、本部並に東京工廠聯合の、動員演習が検査された。僕は本演習の指揮官を命ぜられたが軍隊に於ける野外演習と異なり、派手な景況を見せることも出來ず、只事務上の連絡を一目瞭然たらしむる如く、各種の機關と掛を近く數室に集め、想定と情況を與へつゝ、質問しながら適當に指導し、以て執務の方向と、事務の實際が動員計畫書の要旨に合致しあるや否やを、展開せしむるに過ぎなかつた。幸ひ結果は概して良好なりと講評され、造兵廠全體としての成績も又上位の方だつたので一同少なからず喜んだ。

第十五、歐米視察旅行

其一、訓令の要旨と一般經過の概要

僕は大正十五年六月、歐米各國に出張を命ぜられ、七月左の要旨の訓令を受けた。

- 一、歐米主要國に於ける、火藥、爆藥類、制式變遷の狀況調査
- 二、歐米主要國に於ける、最近火藥の製造法、填藥法並に之が原料に關する調査
- 三、歐米諸國、主要たる工場、特に兵器工場に於ける、危害豫防設備の狀況調査
- 四、其他一般軍事工藝、技術に關する調査
- 五、差遣期間は、往復共約七ヶ月とす

此出張は、吉田藤助中佐と一緒に、初の海外旅行者には氣強く思ふた。但吉田中佐は別の訓令を貰ひ、調査は別だつた。

僕等は八月五日神戸港より、日本郵船會社の諏訪丸で出帆し、九月十三日、佛蘭西馬耳塞に上陸し、爾後、佛蘭西、獨逸、瑞典、チェッコ、瑞西、伊太利を巡り、十二月三日英國に渡り、昭和二年一月十五日倫敦出帆、一月廿四日紐育著、約一ヶ月間米國內を旅行し、二月十五日桑港出帆、日本郵船

會社の太洋丸にて、三月四日無事横濱に歸著した。

此間日を経ること、二百十四日、内航海日數六十八日を除き、残り百四十六日を以て、各國を歴訪した。其國別、期間左の通りである。

- 一、佛國 九月中旬より三十二日
- 二、獨逸 十月中旬より二十四日
- 三、瑞典 十月下旬に於て四日
- 四、チェッコ 十月下旬に於て二日
- 五、瑞西 十一月上旬より九日
- 六、伊太利 十一月中旬より十四日
- 七、英國 十二月上旬より四十三日
- 八、米國 一月下旬より二十二日

英國の滞在比較的長かつたのは、語學の關係で調査に便利だつたからである。

出張の目的は半ば各種の工場を視察することにより達せらるゝので、出發前豫め各國の大使館附武官並に駐在官に交渉を依頼することゝし其手續を取つた。此旅行に於て視察した各種の工場は左の如くである。

第一、佛 蘭 西

- 一、「ルアーブル」火砲工場
 - 二、中央火薬研究所
 - 三、「ブトール」工廠の一部
 - 四、「ブールヂー」工廠
 - 五、「ピロテクニク」火工學校
 - 六、「アングレーム」火薬製造所
 - 七、「サンメダール」火薬製造所
 - 八、「ツォルーズ」火薬製造所
 - 九、「ソールヂ」火薬製造所
 - 一〇、「シヤンシヤモン」製鐵工場
 - 一一、「ダルン」機關銃工場
 - 一二、「シナイダー」鐵鋼工場
- 第二、獨 逸
- 一三、「クルツプ」兵器工場

- 一四、「シーメンス」電機工場
- 一五、「アルグマイネル」電機工場
- 一六、「フリーツ、ウエルネル」機械工場
- 一七、「グルーゾン」工場
- 一八、「ゴルツエルン、グリンマ」機械工場
- 一九、「バデツセー」アンモニヤ工場
- 二〇、「ツァイス」の「レンズ」工場
- 二一、「スコットゼン」硝子工場
- 二二、「ロツヒリング」鐵鋼工場
- 二三、「ボツシユ」磁石工場
- 二四、「カルマール」ゲージ工場
- 二五、「ウエルネル」機械工場
- 二六、「ドルニエー」飛行機工場

第、瑞 典

- 二七、「エス、ケ、エフ」軸承工場

二八、「ボフォース」鐵鋼工場

二九、「エスキルス、チユーナ」鐵兜工場

第四、瑞西及チエツコ國

三〇、「スコダ」兵器工場

三一、「スミウス」火藥製造所

三二、「チユーン」實包製造所

三三、「バトロネン」「エ、シ」工場

三四、「オーリコン」機械工場

三五、「ウツウエル」機械工場

第五、伊 太 利

三六、「フォンタナリリー」火藥製造所

三七、「ボロナ」實包製造所

三八、「ブレッツシャ」「メタルジャ」工場

三九、「ノバラ」「アンモンヤ」工場

四〇、「フィヤット」自動車工場

第六、英 吉 利

四一、「アムストロング」兵器工場

四二、「ノーベル」火藥製造所

四三、「クツクス」爆藥製造所

四四、「リバー、ブラザー」石鹼工場

四五、「アーサー、バルフォア」鐵鋼工場

四六、「トーマス、バリス」及「サミュエル、フォックス」鐵鋼工場

四七、「ノボ」鐵鋼工場、及「ウイカリス」工場

四八、「バイミンナム」、「ビー、エス、エ」工場

四九、「エンフィールド」王國小兵器工場

五〇、「ウールウイッチ」兵器工場

第七、米 國

五一、官立陸軍火工廠

五二、陸軍士官學校

五三、「バイオニヤ」飛行機器具製作所

- 五四、「ビュロー、オブ、スタンダード」
- 五五、「ドッチ」自動車工場
- 五六、「シカゴ」屠牛工場
- 五七、「シカゴ」通信販賣所

總計 五十七箇所

前記五十七箇所の視察は、何れも短時間で行ひ、其午前午後交互るものと雖も、午前二、三時間午後又二、三時間に過ぎなかつた。只英國ノーベル會社に限り、二日間に涉つて繼續され、質問答に十分の餘裕を與へた。以下各國に於ける視察の情況を示せば、

第一、佛國は官民の工場を通じ、概して氣安く開放した。又案内に高級の職員を以てし、頗る丁寧だつた。只ブツシニュー火藥製造所だけは、何か祕密の研究でもあるのか、許可せなかつただけである。佛國の視察は、仙波大使館武官と、西濱駐在官の配慮で、非常なる便益を得た。同行者は、吉田中佐、青木大尉、鈴木海軍技手で、火藥製造所の視察には、特に英國より、長谷川少佐が一行に加つた。

第二、獨逸

當地では官業の全部と民業の一部は絶対に許さず、許されたものは全部民業工場で、三井、三菱、

イリス等の如き海外商店の紹介によつた。一般の態度は、懇切丁寧だつた。僕等の一行は、吉田中佐、間藤大尉で、一部西濱大佐が加つた。

第三、瑞典

當國はチエルブリヂ會社の懇切なる案内で、前記三箇所を愉快に視察した。尙、日、瑞協會長オーカル、クラナー氏は僕等を公使館員と共に、午餐會に招待した。尤も此時、此國、皇太子殿下は、日本漫遊中だつただけ、兩者の氣分は一層に好かつた時である。一行、西濱大佐、吉田中佐、間藤大尉と外に、獨逸駐在の白倉少佐も加はつた。

第四、チェッコ國

此國ではスコダの大工場を見ただけだが、デレクターの懇切なる案内で、隔意なく思ふ存分の説明を聞いた。僕等は此國で、國民の一般が精勵恪勤だと觀察した。一行は、西濱大佐、間藤大尉と吉田中佐と三人であつた。

第五、瑞西

イリス商會の方で、同會社のウイガン氏が特別に同伴した。之が爲め視察に頗る便宜を得た。一行、吉田、間藤の兩氏のみ。

第六、伊太利

伊太利は、官業の工場として火薬製造所と、實包製造所の二つだったが、何れからも特別の歡待を受けた。之に反して民業のノバラのアンモンヤ工場の如きは、折角大使館附武官より、交渉があつたに限らず、誠意を缺いてゐた。當國は吉田中佐と二人のみの旅行だった。

第七、英吉利

此國では、二宮少將、長谷川少佐の膽煎りで、萬事都合よく視察するを得た。民業工場は、三井、三菱の紹介により、何れも愉快に其目的を達した。當地の視察は、長谷川少佐の案内で、他の各國に比し、一層に多く了解され得る處甚だ多かつた。

第八、米國

米國で見た官業工場は、ピカチニーの火工廠だけだったが、豫期に反し頗る平氣に開放し、且懇切に案内して呉れた。當時爆發後の混亂した時機だったに關らず、所長官舎の午餐にまで招くなど、大に歡待して呉れた。

陸軍士官學校參觀に際しては、一行として、荒城大佐、大江大佐、中島大佐、柳下中佐等優勢なる一團が加つたのでか、校長以下、氣持よく歡迎し、打ち解けたる態度で案内した。

以上は、各國の僕等視察者に對する態度の大要であるが、續々として送る我國視察者に對し、各國一様に相當の好意を以て迎へて呉れたことは、一つに我國威の然らしる處で、同時に在外陸軍武官の御骨折りの結果であつて此等の厚意に對し感謝すると共に、三井、三菱、大倉等の海外商館が、單に營利の爲めばかりでなく、誠意、奉公心に狩られ、努力して呉れた厚意に對し、深く敬意を表せざるを得ない。

其二、各地の見聞と其行動

一、東京出發と神戸及門司(吉田中佐と同行)

八月四日、午後七時、東京驛發、神戸に向つた。停車場には横山、能村兩中將、近藤、村瀬、井上の各少將、後藤・阿野兩技師、石藤、深尾の諸博士、其他親戚、知己無慮數百人、中には林、立花の如き少女から、造兵廠の小使に至るまで、あらゆる方面の人が、送つて呉れた。之に引き換へ、神戸では、僅かに大阪の眞田父子と、京都の越山一豊氏以外は、新聞記者の一二人だけの淋しさだった。

下の關では、小川乙吉君が、わざわざ小倉より迎へて呉れ、小倉へ同行した。同地で大平少將を訪ひ、夕は小川氏宅で晚餐を共にした。

船は良船長奥野由太郎氏の指揮の下に、船員一同懇切に世話して呉れた。僕の室附ボーイは金子誠八郎氏で、東京人だったが、之れ又親切な人だった。同船の一等船客は五、六十人で、内三分の一

は西洋人であり、南洋行きの御客も相當に多かつた。

二、上海上陸

八月九日朝、船は上海に著いた。三井物産の福田氏に迎へられ、駐在武官岩松中佐を、其宿舍に訪うた。會談數刻の後一同、同船の寺田海軍少佐も加へ、公園内日本料理店で晝食を取り、終つて吉田中佐と、午後一時半汽車で杭州に遊んだ。此時汽車中は、猛烈な暑さで、一時どうなることかと心配した程だつたが、暑い番茶を飲んで、漸く渴を凌いだ。此暑さに暑い番茶は、矛盾の様だが、流るゝ汗の補充に冷水では、反て渴を覺えて駄目だと聞いた。杭州では、井上駐在武官に案内され、支那料理の御馳走になり、終つて聚英旅館に入つたが、連日微風もなく夜半に至るも尙ほ且つ、九十度を降らないと聞いてなる程と思うた。又井上大尉も之が爲め睡眠不足で、已に神經衰弱に冒されてゐると語つた。僕等の寢られないのも道理で、悪いとは知りながら夜分扇風機のかげ通しで夜を明かした。

翌十日、朝六時早くも井上大尉の來訪に接し、案内されて西湖に遊び、舟を浮べて半日の清遊を試みた。なる程天下の勝地だけあり、全く繪に見る通りの景色だつた。午後二時再び汽車中の人となり、昨日と同様半死半生の思ひで、夕刻上海に歸り漸く眞人間に戻つた。晩は支那料理の夕食と、四馬路の夜景見物を以て上海見物を終り早速歸船した。船は十一日午前十時拔錨し香港へ向つ

た。

三、香港

八月十四日早朝、船は香港々外檢疫所に假泊し、形式だけの検査を終り入港した。早速三井物産の太刀川氏に迎へられ、香港島一週に出懸けた。一行六人は自動車を疾走し、海岸なる上海香港ホテルについた。こゝで暫時休憩し、山の半腹道を廻り登つて、千八百尺のビクトリヤ、ピークに上つた。全島を眼下に見下しながら、案内者の説明を聞いたが、高所より見る市街地の美觀は實に東洋第一だと思つた。

香港は人口八十萬、内日本人二千人と謂はれ、さうとうに活動してゐる。僕は東洋の天地に、この殷盛なる都市あるを見て、さすがは、老大帝國英國なる哉と敬服した。これに反して郊外に住む支那人の苦力は、一日十錢の殆んど人間でない生活をしてゐるを見て、實に皮肉な對照だと思つた。

四、新嘉坡

香港を出帆して四日、赤道直下のシンガポールに著いた。黒色の人間が丸木船を操つて船に近寄り、大聲を上げて十錢を投げろと頼む。皮膚の色から見て紛ふことなき印度人である。銀貨一枚を投げると、海中に没して拾ひ上げる。又葉巻煙草を、倒さに銜へながら沈み、間もなく浮き上つて煙を

出すなどの藝當をやる。棧橋では日本人を澤山見たが、日本婦人は皆洋装で、黒人多き此地に来ては皆美人に見えた。僕は山野健明氏の令弟、高橋禮本氏に迎へられ上陸した。此處で南洋特有のシヤアツに遭つたが、道路がよいので白靴でも平氣だった。三井物産の三階で、軽いランチを取り、二臺の自動車で博物館、植物園、水源地、其他島内の小ゴム園を視察した。博物館は南洋の動植物より、衣服、住宅、美術工藝品に至るまで珍品多く、中にも絲織機械の如き、日本と同一型のものを見た。植物園は熱帯地方の草花、今を盛りと咲ひ競ひ、紅、白、黄と色とりどりで、椰子や、檳榔樹、さては、バナナの樹などが色彩絢爛たる熱帯花に混り、何とも言へぬ奇綺さだった。水源地は一種の公園で、細かい芝生、煉瓦色の小道、水中に突出する休憩所、白色塗りのベンチなどを、風致よくあしらひ、夕方からのドライブに適當の地だと思はせた。ゴム園は大平氏投資の七、八千本位の小園で、構内には大神宮が祀られ、日本人守護の神となつてゐた。流石は日本人なりと、僕等も恭しく參拜し、神前に畏つて、前途の安全と家族の無事を祈つた。このゴム園の中央には、高き粗末な一軒家があり、それは長い脚柱の上に建てられた、南洋特有のバラック建築で、其左右前後に四、五軒の假屋があつた。日本人の夫婦と、子供は中央の高家に住まひ、黒人の手傳は周圍の小屋に居住してゐた。僕は偶々此園内の廣地で、五、六歳位の二人の子供が、無邪氣に遊んでゐるのを見た。一人は隠れもない日本娘で、他は純粹の黒人娘だ。此等二人は、ズロース一つで、嬉

嬉として遊び戯れてゐる。黄色の顔と炭色のからだが入り亂れて撥ね廻つてゐる組合せは、何んといぢらしい相手であらう。黒人娘は日本娘を、羨ましくはないだらうか、と考へながら此場を立ち去つた。晩は三井支店長の晩餐に招かれ、清楚たる南洋趣味の邸宅に行つた。主人夫妻に接待されて、食堂に通されたが、驚いたのは天井から、ぶら下る室大の布製ファンだった。之が前後に動いて風を送つてゐる。なる程扇風機の如き、局部的の送風では涼しくない。僕は十二分の厚意に感謝し、此家を辭し、福本氏の案内で目貫きの市街地を見物した。此地で福本氏の紹介にかゝる、印度の商人から御土産品として、指輪用ダイヤモンド若干を買ひ求めた。

五、彼南上陸

彼南では日本人經營の朝日旅館に入つて、蛇寺と極樂寺見物の相談をなし、自動車の談判を頼んだ。蛇寺は彼南より二里位ある小高い丘上に建てられた觀音寺で、拜殿には綠色の斑點ある、數十匹の蛇が、樹や、蠟燭臺にノダレて、靜かに眠つてゐた。

極樂寺は結構人目を奪ふ壯麗なる御寺で、これには廻廊あり、五重塔あり、樹あり、水ありで、回々教の盛んなる馬來半島唯一の、佛教巨刹である。此寺には參詣者の名簿が備付られ、又、東郷、乃木兩大將と、副官谷口、吉田兩氏署名の扁額が掲げられてゐた。これは明治四十四年、英國皇帝陛下の戴冠式に東伏見宮殿下の隨員として、當地に立寄られた時の記念である。僕は序に彼南ヒ

ルに登つた。山は海拔二千三百呎で、登るに鋼索電車によつた。此時印度人の車掌より、片道一弗の切符を買はされた。山頂は一望千里、ベンガル灣や、印度洋が見え暑さ知らずの別天地だつた。キオスクと云ふ喫茶店で、繪端書を買ひ、サイダーを飲みながら、早速二、三枚を書き認め、緩つくり憩んで下山した。

朝日旅館で南洋果物の試食をした。其主なるものは

- 一、「ドリアン」……………土人の好むもので糠味増臭あり口に合はず
- 二、椰子の實の汁……………普通の味
- 三、「バタイヤー」……………最も美味なり
- 四、「マンゴステン」……………先づ可なり
- 五、「オレンチース」……………右に同じであつた。

此地で見た兵隊は、日本の小學生の様な半スポンを用ひ、如何にも涼しさうで、南洋向きだと思つた。尙彼南十萬の都市に、四千臺の自動車のあるのを見て盛んなることを知つた。

六、古倫母

八月二十六日古倫母に著いた。新嘉坡より乗つた、デツキ、バツセンチャーが皆降りた。デツキバ

ツセンチャーと云ふのは、甲板上に、ごろ寝する旅行者を云ふので、此時百名に近い御客があつたが、特別割引の方法で会社が歓迎することだつた。

古倫母には、二千萬圓を投じた宏大なる防波堤がある。此防波堤内に數多の船舶が碇泊されてゐた。海上から見た夜の古倫母は、電燈の點綴された龍宮であつた。同船客にキャンデイ行きをやつたものがある。僕は釋尊の齒骨や、象の行水を見る勇氣もなかつたので、市内見物だけに止めた。土人の案内で、博物館を見たが、珍らしく思ふたのは、葉蟲であつて、全く木の葉と同色同形であつて一寸見ただけでは、分らない位、一段と進化したものだつた。

土人の習慣に、シリを嚼むのがある。殆んど全部の土人は、口から離さない。常に赤い汁を出して嬉しさうにしてゐる。それはキンマの葉を二、三枚重ねて、其上に練つた石灰と、焼いた檳榔樹の實の細粉とを載せて巻いたもので、之を嚼むと爽快を覺ゆるとのことだつた。

七、印度洋とアデン

印度洋の航海は長い。古倫母よりアデンまで、二千二百哩に八日間を要した。朝から晩まで眼に映するものは、只青海原ばかりで、此邊でよく貿易風が起るが、ことに夏季に多い。

僕等は八月三十一日、天長節の日から、小さいモンスンに遭ふた。風速は十米突から十五米突で、甲板上の歩行が、漸く困難となる位だつた。それでも丈餘の波は、船首に碎けて白瀧の様になり、

次で細雨と化して降つて来る。船内は舷側も、正面も、鐵蓋のある處は皆閉め出す。船の動搖は益々益甚だしくなつて、船體は船首より波間へ、突込む様な思がする。此瞬間壯快ではあるが、恐ろしい感じもする。然し今では船に慣れて船酔はなくなつた。天長節を祝する爲め、日本人の一等船客十一人は、食堂の一テーブルを占領し東京に向ひ、

陛下の萬歳を三唱した。此時僕は故參の故を以て、音頭を取つたが、隣席のシヤム國皇族の一行は、起立して恭しく敬意を表して下さつた。其他の外人客も或は起立し、或は其儘で拍手を送つたので、僕は厚く禮を述べ散會した。

僕等は古倫母を出て、八日目に初めて陸地を發見した。これがアデン港の入口だつた。次第に燈臺が見え出す。測候所が見える、次で兵營と砲臺らしきものさし明瞭となつた。港内には伊太利の軍艦一艘と、汽船三艘が碇泊して居つた。僕等は僅かの時間を利用して、此地を見物したが、樹のない砂質の岩石地で、殺風景なる山麓の諸所に、赤色屋根の集團家屋を見るだけだつた。又雨水溜の水源地を見に行つたが、途中ラクダの荷物曳きと、ネグロ婦人の黒布で顔を被ひながら歩く姿を見るのみで、謂はゞ人里遠き荒野原で、無頼漢にでも出會つた様な感じのする處だつた。僕は同港に就ては、只紅海の入口を扼する戦略上重要な地點だとのみ知つてゐたが、最近伊エ戦争が起つてから初めて、同港が紅海を距て、エチオピアと向ひ合つて居ることに氣がついた。

八、スエズ運河と埃及

運河は延長八十七哩で、水面の幅員三百二十呎、水底の幅員三十呎、水深三十二呎で、通行時の速度は五哩以下に制限されてゐた。僕等の船は九月八日夜半一時にスエズに著いた。僕等は早速上陸し、沙漠地を自動車で横斷し、早朝漸く埃及についたが、此時の寒かつた事、これが沙漠の夏かと思はれた。南部氏の案内でコンチネントホテルで朝食をすませ、早速、ピラミッド見物に出懸けた。途中歴史で有名なナイル河を渡りクレオパトラとアントニーが、此河に船を浮べて、長夜の歡樂に耽つたことなど、中學校時代の講義を思ひながら、駱駝に乗つて埃及人の案内者に従ひ、ピラミットとスフィンクスのある處に進んだ。此處にて一同記念撮影をすませ、雄大無比、神の業としか思へぬ此人工の極致を眺め、只驚きの眼を以て別れを告げ、市街地へ引返した。僕等が見たギザの金字塔は六十七箇所もある中の最大のもので、高さ四百八十一呎、面積約五町二反の六千年前のものであつた。

埃及博物館はナイル沿岸で發見された、古代埃及の古物が多數に收容され、最近ツタンカルメン王の墳墓より發見された、珍寶稀器が陳列されてゐるので、歴史家にあらざる僕等でも、賞讃を惜まなんだ。此館で、石造の彫刻品や、ミイラや、金銀細工の巧妙なものを澤山に見たが、中にも帝王用遺骸の容器が、全部純金製で、其重量四百吉瓦に餘るのを見て、一寸驚かされた。

僕等は紀元前千三百年の或夜半、突然に起つた大地震の爲め、陥没全滅した舊埃及市街地に於て、今尚残る人骨を見、又各種陶器製品、ガラス製品の一片を採取するを得た。又當時大官の住宅跡や、浴室、便所、井戸等の残骸により、その三千年前の文化の有様を偲び、同時に今に至るまでよく其原形を留むるを得たものかと、むしろ不思議に感じた。僕等は引續き二、三の寺院や、動物園を見たる上、汽車で、ポトサイドへ歸つた。此地で一通の電報を留守宅より受取つた。見れば英子の無事出産を爲したものだつた。僕は喜び、吉田中佐も祝うて呉れた。互に葡萄酒を酌み交して、暫時練馬談で花を咲かせたが、これが今年十一歳の英子の出産時だつたも早いものだ。

五、馬耳塞上陸

八月五日、神戸出帆以來、日を経ること四十餘日、その間僕等の一切を船員に委せた、乗船諏訪丸は、遂に九月十三日、佛蘭西馬耳塞についた。僕等は船長奥野由太郎氏以下船員一同に深く感謝の意を述べ、特に船長には絹ハンカチーフ一ダースを贈り敬意を表した。尙ほ日本人一等船客九人は一人當り八十圓を醸出しボーイに贈つた。これは所謂チップであつた。

僕等は豫て依頼して置いた中山氏に迎へられ、税關検査をすませ、旅館ノアイユーに入つた。憩む間もなく同氏に連れられ、見物に出懸けた。見物は盛り澤山ではあるが、時間が足らぬので、まるで超特急の五分間停車の様な忙しさだつた。それでもノートルダム寺院から、主なる市街地を初

め、カフェーと料理店、映畫とノゾキ更らに進んで、銀髮美人の接待も、葡萄酒や、シャンペンのも、匂ひだけは嗅ぐことが出来た。斯くの如くにして、急行早やめぐりの結果は、午前一時と云ふまだ更けやらぬとき早くも歸宿し、茲に歐洲第一夜の情景を探訪し、疲るゝがまゝに、グッスリ寝入つた。

十、巴里滞在

翌十四日午前九時二十二分、馬耳塞を發し巴里に向つた。汽車は一等急行で、途中僅かに、オーリアン、*「バランシー」*、*「リオン」*、*「デイジョン」*に停車するのみで、早くも晩十時、八百十二吉米を突破し、花の都巴里についた。相馬大尉と湯淺氏に迎へられ、早速アンテル・ナショナル・ホテルに入つた。

巴里は大使館も、駐在官も、其他日本人数に居り、何不自由なく愉快に暮らした。最初二、三日は型の如く赤ケットで市内名所の遊覧をなし、且つモーニングや、外套等、歐米旅行の服装を整へた。當時巴里の大使館武官は、仙波大佐で、技術駐在官は、西濱大佐であり、此兩氏には多大の御世話になつた。

佛蘭西は葡萄酒の本場だけに、安くて味い。毎日の食事には必ず、之を用ゐた。當時爲替相場は邦貨に有利で一フラン僅か六錢八厘だつた。之が爲め僕等の生活は割合樂だつた。此ホテル最上の室

代は一日、百八十フランで僕は吉田中佐と二人で此室に入った。田舎に行けば、四十フランから、八十フランが相場で、勿論食事は別物である。チップ制度は歐米を通じて一貫し、何んでも一割をやれば安全と見て差支ない。佛蘭西は美術工藝の本場たること云ふまでもなく、我國よりも多数の畫家が勉強に行つてゐる。さうして美術館や博物館が此等觀覽者で賑つてゐた。

一日福島少佐(故福島大將の息)とヴェルダンの戦跡を視察した。一行は吉田中佐と三人で、一臺の自動車を備ひ、戦場の跡を詳しく訪ねた。此時の運轉手は、世界大戦に参加した騎兵の下士で、説明を聞くに好都合だつた。市街は今に至るまで諸所の弾痕は其儘で、戦禍の恐ろしさを偲ばせてゐる。運轉手から「死の谷」の現地を指示され、これが、數十萬の死傷者を一度に出した大劇戦の跡だと聞き、旅順の「二〇三高地」を思ひ出し、これ等尊き犠牲者に對し、最高の敬意を表した。巴里滞在中に、唯一人で見物したのは、エフフェル塔と、ベルサイユ宮殿で、英、佛、獨、伊の對照會談書持參の御蔭で、辛うじて用を辨じた。

十一、佛蘭西國內旅行

九月十九日から約二週間、佛蘭西、國內諸工場の視察に出懸けた。視察は「ルアートル」なる「シユナイダー」の火砲工場よる初め、中央火藥研究所「ブルジョ」の火工學校、「アングレーム」の火藥製造所と順次に巡り次で、「ボルドー」に行つた。「ボルドー」は葡萄酒の産地で、同時に歐洲大

戦に際し一時政府の避難した舊都である。僕等は此地よりアルカッションの海水浴場に行き、久振りに海に親んだが、秋季の涼しさにも關はらず、多数の男女がまだ海水着で水泳をやつてゐたのを豪氣だと思ふた。

此地で「アランプラ」と云ふ寄席を見た。寄席は粗末な建物だが、満堂眼もまばゆいばかりに燈飾され、人目を奪つた。第一幕は二十人あまりの「レビュー」で第二幕は、滑稽芝居の歌劇だつた。この頃まだ日本には「レビュー」のなかつた時で、東京で公開されたのは、僕等の歸朝後だつたと覺えてゐる。

此地にメール先生が居られ、一晚緩つくり話をしながら會食の機會を得た。先生も昔を偲び大に喜んで呉れた。先生は曾て我國に來たり、板橋火藥製造所で、火藥の講義をした人である。

ルアートルは港で、僕等の一泊した町だが、船員を目前に、海岸通りはカフェーやバーで賑つてゐた。僕等は雜沓する此等の町を、夕飯後の散歩として歩き巡つた。黒人の船員が、白いカラーから黒い顔を出し、白い婦人と音樂に合せて踊つてゐるのを見て、吹き出す位におかしかつた。然し踊るも、踊らすも皆金の力で、金の前には人種の區別はないものと分つた。ツールーズの火藥製造所は、百萬坪にあまる廣大な構内で、僕等は午前中其三分の一を見て、一旦晝食の爲め歸つた。僕は昨夜來の下痢で疲勞に堪へず、午後の見學を失敬して、途中の居酒屋に休憩し、一行の見學終了

を待ち合せた。僕はよい機会と思ひ此家で、田舎生活の實狀を知るべく努めた。此家は居酒屋で、御客としては職工と、魚釣本業の釣り竿擔ぎの下流人が多かつた。彼等是小コップ一杯を美味さうに飲んで、何事か家人と語りひながら、三十乃至五十サンチームを支拂ひ、半時間ほど遊んで行くのだつた。その質素な容姿と、丁寧なる態度は、日本の田舎と類似してゐると思ふた。此の三十サンチームの支拂ひは、此時日本の二錢強に當つてゐるから安い酒である。次はアビニオンにきてソルジの火薬製造所を見た。アビニオンは第十四世紀の頃、法皇の居所で堅固なる城壁が築かれて居つた。

リオンは大都會で、絹織物の産地で有名である。僕は此地で博物館を見物し、天鵝絨を買ひ込み土産とした。

シャン、シャモンやクルゾーは世界一流工場で、僕等は専門上興味を以て視察したが、何れも規模宏大で不景氣と云はるゝ當時でさへ、二萬の職工を使ひ、八千疋プレスを据付け、三萬二千馬力のエンヂンと四十二瓏米の火炮を造つてゐるなど、特にクルゾー工場の偉大さを感じた。

十二、北歐竝に獨逸旅行

十月九日の晩より獨逸に旅行した。最初ライン河岸なるケルンに著いた。間藤大尉と、イリス商會のウイガン氏の紹介で、火薬界の名士、マイスナーとマッター氏に會見しマッター氏邸で新爆薬の

説明を聞いた。

エッセンは世界第一と稱するクルップ工場のある處で、クルゾーを知つた僕等は、敢て驚く程のこととはなかつたが、素ばらしい大工場なることが分つた。然し技術上の能力や、研究の内容など比較する餘地はなかつたが、クルゾー以上の大工場たることは競はれないことと思つた。

エッセンより伯林まで、約五百吉米は途中、三箇所の停車だけで、七時間で走つた。然し今日日本の超特急車が、五百八十九軒の東京、神戸間を八時間半で走つてゐるから、狹軌としては相當のもたと云ひ得る。

伯林では、木村、白倉、杉浦諸氏に迎へられ、エーデンホテルに入つたが、日本人倶樂部の刺身や、味噌汁が口に合ふので、時々此倶樂部に出かけて日本食を取つた。

獨逸には獨逸風があり、よい處は多々あると思ふが、人間に少しこすい處があるのを不愉快に感じた。然し遊ぶ人に云はせると、向ふの女は親切で日本人を大事にすると云ふが、それには理由があつてのことである。

滞在間、渡邊少將、笠井監督官の訪問を初め、主なる海外商會に敬意を表し、視察上の便宜を受けた。一日、木村少佐の案内で、警察博覽館を見た。此處には残酷なる犯罪手段の模型や、寫眞が並べられ、別に祕密室には、性に關する犯罪の參考資料が集收されてあつた。其他ボスマンの宮殿

や、動物園、博物館、美術館、映畫、芝居等の觀覽は型の如く實行した。

僕等は滞在一週間に於て瑞典旅行に出懸けた。瑞典では十月二十一日早くも雪にあひ、寒氣強く、日は短かく、晝間僅か七時間に過ぎない淋しさだつた。又國內の人口は稀薄で、國道を晝間數時間に互り、自動車を通つたが、眞に指折り數へる程しか往來人に遭はなかつた。家屋は木造が多く爲めに、日本風の感じを與へたが之は森林の多い爲めであらう。伯林よりの國際列車は、寢たまゝ海峡を渡り、知らぬ間に瑞典に行き得る重寶なものだつた。瑞典からの歸途、丁抹に立寄りコッペンハーゲンで散髪したが、西濱大佐と二人で、十クローネを取られた。之は今の日本貨にして十圓に當り頗る恐ろしい値段だつた。僕等は言語不通で抗議する勇氣もなく、取らるゝがまゝに渡したので、或は東洋人と見て馬鹿にしたものかも知れない。

伯林に歸つて間もなく、南部獨逸に向つた。ドレスデン、ライプツヒ、フランクフルド、スツツドガールを見、最後にポーデン海の沿岸、フレドリツヒ、ハーヘンに著いた。當地はドルニエ飛行機の製作で有名なる處で、曾て我國を訪問したツェツピリン伯號も此處で造られたものである。僕等はドルニエ工場を視察したのみならず、ドルニエ二世主人の招宴にも列し、飛行機の模型さへ貰つて來た。僕等は此地よりポーデン海を渡り瑞西へ向つた。

獨逸國內旅行で感じたことは、此國は國內到る處文化が普及し、大都市集中の弊が少ない様に見える

た。

十三、瑞西と伊太利旅行

瑞西に入り先づ第一に行つたのは、ジュネーヴだつた。世界平和の發源地たる此地では、勝景の根源たる樹と、水とに日夜親しんだ。ホテルの二階より見たる水境の美は、其の純綠なる樹木と、清透なる空氣に調和され、眞に世界の樂園として誇るべき、天惠の實を示して居つた。ジュネーヴより、ベルンに入り、チューリツヒからルツツエルンへと順次に巡り、各地で同じ様な工場見學を繰り返したが、最後にルガーノに行つて、暫く靜養するを得た。僕は連日に互る旅行で随分と疲勞した。それが爲めしばらく一人で、氣樂に身心の恢復を希つた。それは馬耳塞上陸以來、一日として寧日なく、連日活動の爲め睡眠不足となり、此のまゝ旅行の繼續は健康に無理だと考へられたからだつた。旅館はコンチネンタル・ホテルと稱する、湖水に面した小高い丘の上にある白聖館で、僕は二階の一室に納まり、何思ふもなくボツネンとして二、三日を送つた。窓より見える湖水の景色は一段と秀麗で、この美景を獨占する僕は、あまりに貪慾だと考へた。運動としても僅かに湖岸の散歩を試みるくらいのもので、他は入浴と睡眠、それに手紙をかく位の日課だつた。ホテルは季節柄御客は少なく、ボーイも淋しさうに、玄關横に居眠つてゐるので、僕はブロークンの英語で話の糸口を切つた。幸ひ玄關附の一婦人は英語を解し、平易に英語で對應して呉れた。これによつて旅行

の計畫は進められ、切符の買求など一切を頼んだ、西洋で一人旅は氣樂でもある代り、淋しさも伴ふものなるを體驗した。

僕の疲勞は恢復した。愈々伊太利へと行動を初めた。此時は一人で十一月十四日出發したが、早くも汽車は國境のセイヌにつき税關の検査を受けた。それが頗る嚴重で、上陸以來初めてのものだった。二個のかばんは詳細に點檢されて、小なる紙包さへ明け開かれたが、之は獨逸で買った人形だったので許して呉れた。然るに他の一官吏は英文タイプライター打ちの機械の見積書を搜し出し大に之れを疑つた。素より何等怪しまるゝ理由ないので放免となつたが、僕は伊太利で悪い印象を受けた、此悪い印象を持ちながらゼノアに行つたが、コロンブスの銅像と、町の様子を視察したのみで、他の見物はしなかつた。町は暗くして狭く、如何にも薄氣味の悪い戰國時代の情景を與へた。勿論此邊は北部伊太利で、文化も進んでゐない勢もあらう、又ムツソリーニの治下幾何ならぬ時だつたかも知れぬ。然し乗客の人相が皆氣を許せない風貌を示し、其顔付が何となく險惡相に見え、のみならず汽車の時間は不正確であり、車内に暖房装置さへない様子より判斷して、まだ人心の安定せざる時だつたと思つた。

次に羅馬に著いたが、流石は首府だけあつて、幾分明るい感じを與へた。此地で埃太利より來た、吉田中佐と一緒に、再び行動を共にすることゝなつた。羅馬では大使館附武官の飯田中佐に世

話になり、工場視察の旅行計畫を相談した。

羅馬は歴史が古いだけ、史跡が澤山に残つて居り、

(A) 「コロッセオ」

紀元七十年に工を起し、八十年に竣工したもので、其竣工の祝賀式には百日に亙り闘士と闘士、闘士と猛獸、猛獸と猛獸との格闘が行はれ、之が爲め猛獸五千頭を屠つたと謂はれてゐる。其後演劇や、競技に用ゐられてゐるが觀衆十萬人を收容し、風雨二千年今尙當時の、豪華を偲ぶに足る古き建築物である。

(B) 「カルカルラ」浴場

紀元二百年カルカルラ帝の建築したもので、上階は墜落したが、外壁と隔壁が残つてゐる。場内階下に冷水浴場、貴族浴場、皇帝浴場があつて、地下室に造られた熱蒸氣を以て、この水と室を暖め、又水道に鉛管を用ゐたなど、何れも當時の文化を察知するに餘りがある。

(C) 「ヴァチカー」の美術館

之は羅馬法王宮の附屬で、彫刻品の大部分は希臘及古代羅馬の傑作ばかりで、其他壁繪も澤山にあるが、中に織田氏時代、九州四大名の使節が、法王に導かれて、サンピイドロに參詣する繪や同使節の書翰と、伊達政宗の書翰とが、陳列されてゐるのも珍らしかつた。

羅馬よりナポリとボンペイに遊んだ。ナポリは當時人口百十萬、伊太利第一の大都會であつて、歐洲航路の日本郵船は此地に寄港する。ナポリは海岸に沿うた風光明媚の綺麗な都で、氣候も暖かく、ゼノアなどに比べて話にならぬほど、雅致に富んだ處である。僕等は海岸のグスピアホテルに入り、此處にて遊覧案内を職業とする、アントニオ氏に會ひ其案内を頼んだ。彼は各國語を話し得る重寶な人で、此人により十一月十九日ボンペイに遊んだ。途中活火山、ヴスビエースに登らうとしたが、天候不良で已むなく中止し、遠方より烟の盛んに上るを見るだけにした。ボンペイは古代上流人の住まつた綺麗な住宅地で、之が紀元前六十二年八月二十四日に起つた大噴火と大地震とにより全滅となり、同時に降灰の爲め全没となつた町で、今に至るも遊覧客の斷え間なき世界的の名所である。今は人口二萬、此等遊覧客の爲めに賑はつてゐるが、案内人の話によれば、此日火山の突然の爆發により、地震を起すこと一日に七十九回、住民の死没するもの二千に及んだとのことである。其後土灰を取り去り、倒壊家屋を整理した爲め、破壊の跡は明瞭となり、僕等は石敷の道路や、邸宅、商店、料理屋など其悉くを明かにした。就中奇異に感じたのは、風紀を亂す壁輪が、其儘石造の居間に畫かれあることで、今は警察の監視の許に、「婦人の遊覧は遠慮ありやし」と建札さへ樹てられてゐるのを見て驚いた。

ボンペイを見て古代羅馬の文化を思ひ、其慘劇を悲しんだ。僕は斯る遊覧を一先づ打ち切り、次は火藥製造所の見學へと轉じた。

ボンペイ遊覧の歸途、午後九時、片田舎のロッカセツカと云ふ停車場についたが、其處には宿るべきホテルのないことを知らなんだ。さらばと言つて、火藥製造所は十四吉米の遠方であり、然も、自動車のない純田舎のことで、之に雨さへ降り、言語は通せず、夜は耽けると云ふ總ての條件が皆悪いので、ほとほと大に困つた。漸くのこと停車場前の居酒屋の子供が、物珍らしげに僕等日本人の顔を覗くので、吉田中佐は之を捕へブロークンの佛語で話して見た。之が導火となり、主人に交渉し、拜むが如くにして其家の二階物置を借り、家人の寢臺を融通して、漸く半夜の夢を貪ることを得た。伊太利の子供は小學校で佛語を教はるものと見える。

翌日は火藥製造所へ行つた。此日は珍らしい程粗末な二人乗りの馬車で、淋しい雨降りの田舎道を揺られながら、十四吉米もある遠道を乗り通した。馭者は子守の副業で、子供と並んでパンを喰ひながら駑馬に鞭打つ其風貌は、伊太利ならでは見られぬ、むしろ可憐の情景だつた。

火藥製造所はフォンタナリリーの田舎にあるが、之は又變つて立派なもので、内容、外觀共に佛獨に劣らぬものだつた。之を見て僕等は少からず得る所があり、又所長以下丁寧なる接待に對し感謝せざるを得なかつた。

僕等は此旅行で、國情を知るには、田舎を見るに限ると思つた。而して都會は擬裝で、田舎は眞實

正味だと痛感した。此田舎に來てもムツソリーニの肖像畫が、到る處の賤が家に掲げられあるを見、
フアツショ勢力の偉大さを思はずに居られなかつた。

次はプレシーヤなる實包製造所を視察し、轉じて、伊太利第二の都會たるミラノを訪づれた。當地
では、二、三の工場と、寺院、博物館、公園などを見たが、ミラノカセドラルの結構雄大にして、
其壯嚴なる姿は特に僕等の目を引いた。又公園の民衆的にして、子供本位の樂園たるを見て愉快に
感じた。園内數千の家族が、諸所の芝生に散在し、子供を遊ばせながら、母はベンチで、編物をす
るなどの家族的なる情味を見て、日本にあるかの如き感を抱かしめ、最初國境通過で不快の印象を
與へた僕も、此の地に來ては解消せざるを得ない心境に變つた。僕はテュランより巴里へ歸る汽車
中、佛、伊國境附近で、遠くアルプス山脈の美景を見て、何に考ふる處なく、窓越しに撮影せんと
した。其の刹那、乗込の警察員に見付けられ、訊問と叱責を受くる、醜い場面に引き出された。幸
ひ同客の某英人と、吉田中佐の保證で、撮影未遂なるを明かにし、漸く拘留を免れ、事済みとなつ
たが、それも寫真道樂のたゞりで、此の鬼門日たる十一月二十七日は今に忘れ得ぬ思ひ出である。此
地附近が要塞地帯法の定むる寫真嚴禁の場所たるに氣附かなつた僕は、身から出た錆で致し方がな
かつた。

十四、英吉利旅行

大陸旅行を漸くにして終り、再び巴里に歸り一週間滞在した。此間残りの見物と用達の一切を済ま
せ、十二月三日英國に渡つた。途中ドーバーで、税關検査を受けたが、寫真機は滯英間使用禁止と
なり、漸く四ポンドの保證金を收めて、ことなきを得た。此の重ねくの寫真機問題は事前調査の
不十分から來たことは勿論だが、餘程寫真にたゞられたものだつた。倫敦は歐洲の他の都市に比べ
著しく大きいが、然し新し味の少ない處だと感じた。僕は市内見物には飽き氣味だつたが、それ
でもピカデリ・サーカス街や、バッキンガム宮殿を初め、要所々々の名所は見通す譯には行かなか
つた。僕は子供の時より英語を教はつたので、下手でも親しみは十分にあつた。従つて英國へ來て
は片言交りに話せぬでもなかつた。佛語は松岡技師につき少しは稽古したが、物にはならず、獨語
だとして、高等學校の手ほどきと、松井常三郎少佐に教はつたこともあるが、勿論話す程度に至つて
居らず、結局、歐洲大陸はブロークンの英語だけで押通して來た。

英國内旅行の一切は、長谷川少佐が世話して呉れた。僕は特に同少佐の盡力を感謝する。
最初僕等はスコットランドより、ウキルスに行き、ニュカッスル、エジンバラ、グラスゴー、ラン
ドノー、リバープール、セフィールドと、各地をめぐる、工場も見れば、遊覽もした。特に人情風俗
をも知るに努めた。

一體英國人は無口で、禮儀正しく、人に對して親切で、所謂、ゼントルマンの風貌を備へてゐるこ

とは確かな事實だつた。汽車中で僕等は、一英國人と乗り合せた時も、紳士は僕等に旅行案内を呉れて、下車地の鐵道ホテルを入口まで送つて教へてくれた。此等はほんの一例だが、殆んど全部の英國人は斯くの如くと推察して間違ひない。エヂンバラは舊都で、此地で舊城を見た。之れ紀元六百年頃の建築だが、其構へが難攻不落の要害に見えた。内部でクイン、メリートの遺物を拜觀し、次でホーリー・ベレスの宮殿に行つた。此宮殿は、皇帝陛下の宿泊所で、我

天皇陛下も曾て、皇太子として英國御訪問の際、御旅館に當てさせられた離宮で、古代美術の粹を集めた結構無比の宮殿である。當地から、フォース・ブリッヂと云ふ、長さ一哩半に互る世界第一の鐵橋を見に行つた。之は珍らしい海上の長橋で、我國に於て若し、關門間に鐵橋をかけるとすれば、正にかくあるならんかと思はれた。

グラスゴーでは、ノーベル火藥製造所を初め、一、二の工場を視察し、後ロッセ灣の風景を探るべく半日の清遊を試みたが、降雨の爲め豫想の收穫を得なかつたのは残念だつた。

グラスゴーは煙突の多い工業地で、英國第二の都會ではあるが、不愉快なる、こせくした町だつた。

此地より爆藥製造所に至る途中、一日閑を得て、ランドノーに遊んだ。此地は伊太利のナポリと同

しく綺麗な眺めを有する避暑地で、夏季海水浴客の雜沓する處だつた。僕等はグラントホテルの居屋より、飽くことなき海の景色を眺め、ベランダに出ては、盡ることなき快談に耽り、又海岸道を散歩しては、英國女學生の步調正しく歩く、凛々しき姿勢など見て感ずる處あり、斯くの如くにして愉快なる一日を送り、此地を辭した。

クック爆藥製造所は、僕等を珍客として歓迎し、所長宅では午餐會を催し、一行を御馳走して呉れた。工場は危害豫防法を現地に應ずる如く適當に設備し、飛び飛びではあるが一寸纏まつた工場だとして来た。此地は英國としては随分と田舎ではあるが、伊太利のそれに比し何となく明る味があつた。

リバーブルでは、セルフレッターの石鹼工場を見た。規模宏大で、生産力の大きなこと世界第一と云はれ、箱や、レッテの附屬品、皆此工場内で製造されある大工場だつた。

マンチエスターに來た時、當地の新聞で初めて、我 天皇陛下の御不例を知り、日本人に一大センセーションを與へた。日本人一同、大に御憂慮申上げたが、只々御平癒を御祈り申すより外なかつた。セフィールドは鐵工場の多い處で、何れも大同小異、違つた感じも起らず、平凡だつたが只銀細工の工場だけは珍らしく見學した。其他アーム、ストロングの火砲製造所や、インフィールドの小銃製造所以下各工場については省略する。

英吉利の國內旅行を終り、倫敦で吉田中佐と別れ、下宿生活を試みた。下宿と云ふも、長谷川少佐の居るドラモンド宅に暫く合宿したまで、僕としては大變に便宜を得た。下宿は、チヂックに近い倫敦の郊外で、日本人を知己に持つ素人家だつた。僕は正月十五日に至る約一ヶ月、此家に厄介になつた。此間書類の整頓と、報告書を準備しながら、見物と國情感得に日を送つた。此家の主婦はお婆様であり、外に老母と、職業婦人の娘と、尙一疋の犬が飼はれてゐた。食事は一階の食堂で行はれ、食後雑談に數刻を過ごすを常とした。倫敦は晩食は大抵八時過で、晝飯は三時頃、朝食は十時頃と云ふ工合に一體に夜の遅いのが習慣である。尤も勤めの關係で早いのは別物である。僕は一度は家族のものと芝居にも行き、又買物にも同行した。又飼犬を連れ運動に出懸けることも一再ではなかつた。僕は倫敦滞在間

天皇陛下の崩御と、續いて母の死去に遭つた。斯くして明朗なるべき倫敦生活は、僕をして悲哀の思ひに打ち沈めた。

陛下の崩御は十二月二十五日で、クリスマスの當日だつた。倫敦は何れの家庭も、七面鳥の御料理で、笑ひに耽つてゐる時だつた。この時二階のベルは、けたたましく鳴り、電話は大使館よりの悲報を傳へるのだつた。此時僕等は悲感し、日本人は暗黒の底に落ち沈んだ。倫敦の日本人は悉く喪章をつけ、大使館を弔問し、謹慎の意を表した。之より僕等は公式の會に出席を遠慮した。明けて

一月四日、再び大使館より母の死去を知らせて來た。之は留守宅より打つた電報の取り次で「三日午後七時母死す、權作」とあつた。之は意外僕には全くの不意打ちであつて、僕は悲しむより、むしろ驚いた。重ね／＼の悲報に接する此我身、曾ては父の死に目にも遭へなかつた此我身、今亦異郷にあつて同し事を繰り返す此我身、これが運命でなくして何んと云へよう、諦めはしたものの、思ひ迫つて一夜を泣き明かした。

僕は十二月二十四日の夜、不思議にも總入齒の抜けた夢を見た。之れは確かに母の死の豫感であつて、母は病狀急變の際靈波に乗つて在英の此僕に知らせたのだつた。之は其後兄より受けた手紙により明瞭に分つた。其手紙の一節はかうである。

「母は一昨年初秋、動脈硬化による心臓病に罹り、全身に水腫を來たしたが、治療の結果は昨年夏頃より快方に赴き専ら養生して來た。然るに寒さに向ひたる爲めか、十一月上旬より病氣再發して心臓病以外、氣管支加答兒を併發し咳嗽頻發し來たので、養生と手當に萬全を盡してゐたが、昨年十二月二十四日夜、俄然病勢に變調を來たし、呼吸逼迫、頗る危険なる状態となつたので、夜中來診、カンフル注射を行ひ……正月三日午後七時遂に……」とあつた。

十五、大西洋横斷と米國旅行

一月十五日早朝倫敦をたつた。僕の乗船は英船ミネワスカ號で、船はテームス・ドックに待つてゐ

た。長谷川少佐の見送りに、堅き握手を交し暫し別れを惜しみ徐ろに出帆した。

僕等日本人は、佛國で乗り込んだ多数の武官を加へ、總員十一名となり、其勢力船内を歴した。此時の大西洋は印度洋の如き動搖もなく、頗る愉快に航海するを得た。日夜遊戯と運動の樂天地で、碁も打てば、マージャンもやり、トランプ、ゴルフ敢て辭せずといふ多藝振り、加ふるに讀書もすれば、手紙もかくと云ふ呑氣ではあるが、中々多忙な日課だった。

船員の悉くが英國人たるは勿論だが、居附ボーイの英語の發音が、聞き取れぬのに閉口した。ボーイは、机のことをターボトと發音し、「分りませんか」と云つて笑つてゐるのも滑稽だった。西洋人は、ダンスに夢中となり、禿頭の老人が孫の様な娘と取り組み、後で丁寧に御辭儀する様子は、見物人に面白く感じた。

船は食道樂の本場で毎日美味しいものが喰べられた。特に果物は新鮮で、優良品が常に準備されてゐたが、日本人は一體に西洋人に比し小食だった。

僕等は大西洋横斷に八日を費やし、一月二十四日早朝、ハドソン河に入り、紐育の棧橋第五十八號から上陸した。一同は小柳津駐在武官に迎へられ早速、ペンシルバニヤ・ホテルに入った。こゝでは吉田中佐と同室で、僕等は日々世界第一主義の紐育の實況を見物をした。

1. 米國は設備でも何でも大きい。就中建築の高層たるは周知のことである。

2. 總てが立體的で實用的である。地盤の關係でもあらうが、地上五十六階、地下五階の建築は珍らしくない。

3. 紐育の鐵橋中二段となり、上段は歩道で、下段は車馬道のものもあつた。

4. 物價は極めて高い。

5. 人間としての品位は高尚に見えぬが、^{Ne} 温血、雜種、黑人共皆如才ない態度を示した。

6. 極端に人力を節し、機械化してゐた。

以上は紐育を見た最辯^りの直感である。

國內旅行の第一歩は、費府と華府だった。費府は人口八十萬、世界第九の都會だが、僕等は此地を僅か三時間で見物したに過ぎなかつた。獨立塔の自由の鐘は、縦に龜裂の入つた儘、其形態を留め當時の歴史を雄辯に物語つてゐた。

華府は綺麗な町で、日本より贈つた櫻は、春になると一齊に咲き初め、茲に花の都を出現せしむると云はれてゐた。華府では

1. ビューロー・オブ・スタンダードを見た。之は規格検査所で、測定具の標準を造り、兼て分析検査をやる所で、規模極めて大なるものであつた。

2. 廢兵院

3. 陸軍墓地及無名戦士の墓、之は大理石製の世界第一と云はれてゐるもの。
 4. 大統領官邸、俗に白聖館と云はれるもの。
 5. リンコルンの記念館
 6. 美術博物館
 7. 圖書館、之は世界第一と云はれるもの。
 8. 上院、下院及議會の傍聴
 9. 國務各省、名士の邸宅、名高き市街、公園
- を歴巡し、之を以て華府を引き上げた。

次で、陸軍火工廠、バイオニヤの飛行器具工場及プラット機械製作所を、稍々詳細に視察し、續いて陸軍士官學校を訪問した。

陸軍士官學校では、校長以下大に歓迎して呉れた。此時僕等の一行は、軍服を着用し公式訪問で行つたから、特に丁寧に取り扱つたのでもあらう。

1. 學校はウイスト・ポイントの前面に河を控へた、高壯なる丘地に建てられ、一見古城かと思はるゝ程壯嚴なる容姿を現して居つた。
2. 内容としても随分、金のかゝつた設備で、生徒の服装は固より運動具に至るまで、垢抜けのし

た明るいものばかりだつた。

3. 一講堂の聴講人員は、二十人以下だつた。
 4. 馬術場や、水泳場に、女學生連が自由に出入を許され見物してゐた。
 5. 校内に禮拜堂を設け、教會を持つてゐた。
- 等は何れも注目すべき本校の特色だと見て來た。

次に、ナイヤガラを見るべく、パツファローを経て、ナイヤガラ・オフル町に行つた。時は二月四日の朝で、非常に寒い時だつたので。瀑布は爲めに凍り、見た處まるで幅廣い銀絲の帯のやうだつた。僕等は雨合羽を被ひ、瀧裏に入り、間近く其實體を探つたが、只見る尨大なる一面の氷塊で、北極探險も、さこそと思はるゝ氷の世界だつた。瀧は米國側で一千呎、加奈陀側で三千呎と云はれ、其廣大なる天然の美觀は天下第一の名に恥ぢなかつた。ナイヤガラ・オフル町では、デントンと云ふ喫茶店で食事をした。喜んだは、此の家の老主人で、我等の一行十一名を珍客として大に歓迎した。遂にはビルソン、リットルと云ふ姉妹娘まで狩り出し、轉手古舞して接待して呉れたが、日本人は諒闇中で、馬鹿騒ぎも出來ず、只日當りのよい縁側で此れ等家人を中心に、記念の撮影をなし、辭し去つた。

デトロイドではトツヂの自動車工場を見た。土曜日の爲め、フォード工場は見られなかつたは残念

だったが、仕掛は大同小異で、何れも大量生産の分業主義に異りはない。此工場一日の製作量は八百臺と言はれ、職工壹萬六千人を使つてゐた。

市俄古市は、北米の中心地ミシガン水湖に面した。北陸運輸の連鎖をなす米國第二の大都會で、僕等の宿泊したモリソン・ホテルは室數三千四百を有する一大高層の建築で、僕は第二十八階の第二千八百三十二號室に納まり、時々、地上の豆人間を見て眼を廻すのだった。

米國では特に婦人が崇拜されるので、エレベーターの内では如何なる種類の女性が乗り合せても總ての男子は脱帽し、敬意を表するのが禮儀であり、且習慣であつた、僕等日本人も之に倣ひ、女中や給仕にまでも脱帽して敬意を表した。郷に入つては郷に従へで、致し方なかつた。ホテルの晝食は、スープの外二皿の料理と果物、コーヒー、パンを加へて三人分八弗九〇仙、外にチップ一弗を加へ、約十弗であつた。一弗を三圓とすれば、一人前十圓の晝食代となる。又ホテルで散髪した時の價格は、一弗四五仙、之にチップ五〇仙を加へ約二弗となり、之又六圓となる。まあ、此時の相場はこんなものだった。勿論慣るれば、そこに安價生活の方法はあると聞いたが、長い滞在の必要もなくサツサと切り上げるに決した。

市俄古で、

先帝陛下の御大葬日に遭遇したので、計らずも一同は總領事館の遙拜式に參列するの光榮を得た。

當地の夕刊新聞は早速此の記事を載せ、僕等一同の寫眞さへ掲載した。屠牛場は一日八百乃至二千の牛と、多數の獸類を屠る大規模のもので、屠牛手は全部黒人を使用し、就中動脈切斷者はマホメット教徒だった。給料は素人女工が、一日三弗最優秀者が一週百弗だと聞き、よい値段だと思つた。

通信販賣所は之又大なる設備で、一日の注文點數、百五十萬、商品の種類九千種とは聞いて驚く。此等は一定のカタログに掲載され、一枚のはがきにより、迅速確實に發送さるゝ仕組で、其製造より梱包、發送に至るまでの悉くが、自動装置によつて行はるゝも氣持がよい。

僕等は此地よりサンタービー線により南部地方を経て桑港に出た。途中グラント・カニオン公園に遊んだが、公園はコロラド河の一大溪谷で、長さ二百哩、幅八哩乃至二十哩、深さ一哩に達する廣大無邊の天景で、此斷層上より遠く谷底を望めば、溪流も一筋の銀絲の如くに見え、其雄大なる光景は實に神祕的大自然の現はれである。

此地のエルトバー・ホテルに日本人のボーイが二、三人ゐた。僕等は此等日本人ボーイの手により晝食を喫したのも自然だった。

ロスアンゼルスに来ては、オリンピック・ホテルに入り、山城御殿なるものを見た。之は日本趣味を取り入れた富豪の住宅で、庭園あり、五重塔あり、優雅なるものだった。此の地は氣候温暖で人

口増加し、日本人亦相當に多く、其の後オリンピックの開催地として、又映畫の本場として名高い處である。

最後に桑港に來た。僕等は二日間滞在し、博物館、日本人街、金門公園など見物し、ネーブルを買ひ込みいよ／＼出帆の時を待った。

十六、桑港出帆より歸朝まで

船は日本郵船の大洋丸で、「グッドバイ」と萬歳とで送られ、親しかりし米國に敬意を表し、別れを告げた。船は金門灣口を徐々に西へ西へと進んだ。船中は相變らずの遊びで、印度洋や、大西洋航路と變りはないが、只だ日本に歸ると云ふ心境が、格段と爽快さを覺えるのだつた。大洋丸は二萬二千噸の大船で、獨逸船の分取りと聞いてゐる。船長は四宮源三郎氏、ボーイは加納某氏だつた。航海中一日、甲板上に木馬の競馬會が催された。一枚一圓の馬券で勝負を争つたが僕は負けた。甲板上では時々座食のスキ焼會が催された。お珍らしいので喜んだが、西洋人は特にニコ／＼だつた。

二月二十一日船は、布哇ホノル、港に入つた。ホノル、は海陸の風景頗る秀美で、氣候溫暖、とても二月とは思へぬ爽快さに與へた。當地の二月は最低ではあるが平均温度七十一度と云ふ暖かい陽氣で、七月の盛夏と雖も七十八度に過ぎない、年中變るなき初夏の氣候だ。布哇は滿洲やブラヂル

に比し勿體ない位難有い過去の移民地で、今では第二世の議員もあれば、判事もゐる、若し内地を本店だとすれば、當地は立派な出張所たるが如く感じられる樂土であつて、將來益々其發展を希望して已まない。

二月二十五日正午に於ける、船の位置は、北緯二十四度四九、西經百七十八度二七の地點だつた。従つて百八十度線の通過は、此日午後五時過ぎの豫定で、之と同時に二月二十五日は、變つて二十日となり、正味の一日が、二日に勘定され、翌日は一つ飛んで二十七日となる譯である。船は豫定の如く午後五時四十五分、汽笛を連呼して此百八十度を通過した。

三月四日午後横濱に安著し、茲に滿七ヶ月の旅を終り、再び日本の地を踏むことを得た。

船内の一行は歐米視察團の他の一行を加へた左の諸氏であつた。
荒城、大江、中島、吉田の各大佐、松村、安東、岩橋、八木下、星野の各中佐、百井軍醫正、山本主計正で、何れも有爲の人ばかりだつた。今日此行を共にした僕等の同僚、吉田中佐の故人となりあるは、遺恨千萬で悲しい極みである。

其三、歐洲に關する雜感

第一、有力なる國家の背景は國民の幸福を齎す。

僕は此旅行で、國家の背景は其國民の幸福を齎すものなるを痛感した。如何に個人として、力量あり、手腕あり、又金力があつても、弱小國家の人民では、強大國家の人民の前に頭が上らぬことを知つた。僕は東洋から南洋、印度洋から地中海にかけ、至る所の港灣や都市に於て、支那人や、馬來人乃至印度人が、白哲人、特に英國人の前に低頭平身してゐる様を見て、少々情けなく感じた。又同じ日本人でも、朝鮮人が内地にあつて、如何に異なつた生活を経みあるかを見る時、思ひ半ばに過ぐるものがある。皆之れ併合された民族か、若しくは弱小國家の人民たる悲しさに外ならない。僕は倫敦で、突然の降雨にあひ、或家の軒下に雨晴れを待つた。此時主人の英國人は、「あなたは、支那人なりや、日本人なりや」と聞いた。僕は「日本人なり」と答へた。彼は直ちに慇懃なる態度で「日本天皇陛下御不例と承り、愁傷に堪へず」と言つて呉れた。

僕は日本人たるを幸福に思つた。日本人たるが故に支那人よりも、多くの尊敬を受くるのだつた。實に國家の背景は個人の勢力を増大し、且幸福を齎すものなるを痛感した。

第二、歐洲諸國は餘りに近接過ぎる。

渡歐前迄は、歐洲の各國は、地理的に見て日本と支那、支那とソ聯位の關係であつて、決して、東京と仙臺、大阪と福岡と云ふ考へではなかつた。勿論地圖上に於ても、新聞情報を見ても近い國とは萬々知つてゐたが、行つて見て初めて、其實情が分り意外に感せさせられた。これでは歐洲の平

和は容易でない、特に皆腕こきの強國揃ひであるから尙更である。之は空想論ではあるが、眞に歐洲が永遠の平和を望み、又人類の幸福を思はゞ、將來歐洲の列國は、一聯邦を組織し、一主権者の下に統制せらるべきであつて、又斯の如き運命に到達するのが、自然ではないかとさへ思つた。

第三、國語と貨幣と尺度の統一は出來ないか。

歐洲連邦が出來る様になれば、百年計畫を以てせば、國語も貨幣も統一は易々たるものと思ふ。國語の統一と云ふも一種の言葉のみを話せと云ふのではない。所謂自國語の外に只一種の國際語を使ふことである、此一種の國際語は、英語でも佛語でも差支ない、つまり世界の人類は將來自國語と外に只一つの國際語を知れば足ると云ふ風に、成り得ないかと云ふに過ぎない。

第四、先づ氣象の關係を知れ。

氣象は生物の發育に重大なる關係を有するは云ふまでもない。従つて風俗も、習慣も、皆此氣象から特異性を現はしてゐる。外國の文化を知らんが爲めには、先づ其氣象の關係を知る必要がある。住宅建築でも、服裝の様式でも皆然りである。實に氣象は一切萬物情勢の根元を支配してゐると見て差支ない。

僕は歐洲の天地で、空氣中に含む、水分の分量と湿度の關係が、日本と著しく違つてゐることを知つた。

1. 日本の湿度は夏に多くして、冬に少ないが、
 2. 歐洲の湿度は夏に少なくして冬に多い。
 3. 依て空氣中の含有水分は日本に於て夏は著しく多いが冬は少ない。
 4. 之に反し歐洲の含有水分は、夏冬に於て大差なきのみならず平均して一般に少ない。
- 以上の關係が、寒暖、晴雨、風速、氣壓等の諸現象と共に建築、被服、食物等に影響し、延いては人情、習慣、風俗、性格にまで及ぼしてゐることを見逃してはならぬ。

第五、資源の配賦は公平である。

只に歐洲の天地のみでなく、世界を通じて、天然資源の配當特に地下埋藏物が公平でない様に見える。然し見渡す處、どこへ行つても水と、空氣と、光線と、土は公平に行き渡つてゐる。僕等は之によつて神の心を察せねばならぬ。斯る公平なる神の天與に對し、少なくとも學者は此等四原を適當に利用し、分解し、結合し、變化せしむることにより一切の、衣食住に満足を與ふる如く工夫することが、責務であらねばならぬ。然らざれば學者としての價値なしである。僕は世界の學者が、益々研究し、發明し、以て天賦の資源に不平なからしめん事を望む。これ資源の爭奪は遂に戰爭を勃發し、人類の幸福を破壊するからである。

第十六、火工廠長時代

昭和六年八月一日、作業部長より出でて、火工廠長に轉じた。火工廠長は火薬に關する最高職の一つで、榮譽ある地位である。僕は火工廠長として、先づ

- 一、危害豫防につき一層の注意を拂ひ、不良と認むる設備は適當に改善し、過去に惹起した不祥事に對し、更に其原因を検討し、原因と注意を其工室に掲示する如く計つた。
- 二、兵器の改良進歩を計る爲め、一層に創意工夫を奨勵した。之が爲め過去十年間に互る、各種製造品目毎に、其變遷の經過を調査すべく計つた。
- 三、従業員をして國體の本義を更に一層理解することに努め、義務觀念と、犠牲的精神の向上を計つた。
- 四、一般従業員をして、其取扱ひつゝある物件の を知らしむる如く計つた。之は良品、廉價の

根本をなす、創意工夫の爲め最も必要と感じたからである。

僕は機會ある毎に随時、職員若しくは職工に對し教育の爲講演をした。

僕は岸本造兵廠長官の訓示に従ひ、全幅の努力を計つた。而して其範圍内に於て僕の主義を織り込み其完璧を期した。

僕は幸ひにしてよい課長を部下に持った。

- 一、林少佐は庶務課長として、熱心なる事務家であり
- 二、大庭中佐は作業課長として、長き経験と抱負を持ち
- 三、大塚大佐は技術課長として、技術に關する高き識見を有し
- 四、石河少佐は研究課長として、火薬に關する造詣深く、其他
- 五、井原會計課長
- 六、植林軍醫正の如き何れも其道に堪能なる人揃ひで僕として満足に思ふた。尙技師として
- 一、大野健明氏の如き土木、建築の權威者あり
- 二、鈴木市太郎氏の如き、化學機械に明るき適材ありで
- 各此等の方面を擔任して呉れたので大に仕合せをした。更に製造所長として、
- 一、板橋に優秀なる實直の専門家、長谷川治郎中佐あり
- 二、十條兵器に事務、技術の一切に互り堪能なる杉本春吉大佐あり
- 三、王子に進取氣鋭の潑刺たる安藤六郎中佐あり
- 四、宇治に眞面目にして造詣深き、中島敬太郎中佐あり
- 五、忠海に、明敏博學にして大局に適する、大島駿中佐あり

六、岩鼻に發明研究に熱心なる間藤徹十郎中佐あつて、何れも申分なく、若し之で成績を擧げざれば全く僕一人の罪なりと堅く心に思ふのであつた。

六年九月十八日突然滿洲事件は勃發した。工廠は之が爲め緊張し續て翌年一月上海事件と共に、益々多忙となり、遂に戰時勤務として、増俸を支給さるゝまでに至つた。滿洲事件は、支那東北軍第一旅長の軍隊が、九月十八日の夜、柳條溝の我滿鐵線を爆破したことから端を發し、我守備隊の追撃となり、北大營攻撃となり、次で翌十九日は、關東軍の總動員となり、多門第二師團は奉天に集結し軍事行動を開始した。

九月二十二日、滿洲事變に關し國際聯盟緊急理事會は開かれ、其一件書類は米國へ廻された。此時國務長官スチムソン氏は聯盟に對し、「余は已に兩國使臣に對し敵對行爲の中止を勸説し、今後も平和の回復に努力すべし」と回答し、同時に、日華兩國に平和を勸説した。續いて十一月二十七日の錦州攻撃事件起るや、國務長官スチムソン氏は、日本政府に對し「萬一斯くの如きことあるに於ては、米國政府の忍耐は早速其極限に達すべし」と叫んだ。此時我外務大臣の回答事件で一時朝野の衝動を起したが、我陸軍省は遂に十二月一日を以て「日本軍は外國の干涉を絶対に拒否する」旨聲明し、自由の行動を取つた。

上海事件は一月二十八日、タオル工場三友實業社の支那人職工が、我が僧侶の毆打事件より端を發

し、茲に我租界内に戒嚴令が布かれ、我陸戦隊の警備となり、次で關北の駐屯支那軍より挑戦されて、日支衝突した事から開戦となつたものである。

十一月熊本市附近に特別大演習が舉行され、僕は將官として初めて陪觀の光榮を得た。

僕は此演習に於て、岸本造兵廠長官及小柳津東京工廠長と行動を共にしたが、宿舎は別で熊本市東外坪井町、阿部一二氏の邸だつた。

演習は十二日より三日間、熊本平野で行はれたが、偶々連日の降雨で、演習員も觀覽者も樂ではなかつた。第三日の拂曉は帶山練兵場附近で、兩軍の衝突を見たが、之を最後として演習は終了した。其日午後は商業學校に於て、參謀總長金谷範三大將の講評傳達あり、終つて畏くも御勅語を拜したる上、大元帥陛下を御中央に、全將校の記念撮影があつた。終つて大宴會に召され、御前に近く酒饌を賜り記念の御盃をさへ戴いたことは、數千人の御召者と共に畏き極めであつた。

此大演習に於ける北軍司令官は、菱刈隆大將で、木原中將の率ゆる第十二師團と、特設第二十一師團が加はり、南軍司令官は、渡邊錠太郎大將で、坂本中將の率ゆる第六師團と特設第一百一旅團が屬した。

特別大演習は、明治二十五年、宇都宮附近に於て、

明治大帝陛下の御統監の下に、參謀總長、熾仁親王殿下を幕僚長とし、佐久間佐馬太、山地元治兩將軍を兩軍司令官として舉行されて以來實に、第二十九回目的のものだつた。僕等親しく御統監遊ばさ

る、

大元帥陛下が、降雨を物ともせさせ給はず、白馬に跨つて戦線を御巡覽あらせらるゝ御英姿や、野外統監所に於て、諸將軍と共に眼鏡を御手に、戦況を嚮はせながら、刻々として至る情況を熱心に聞きし召さるゝ、龍顏を拜し奉りて、あまりの畏さに恐懼感激した。

七年三月一日、滿洲三千萬民衆の音響を以て、滿洲國建國の宣言が布告された。次で三月七日、會て清國第十二世の皇帝として支那全土に君臨された、溥儀氏は三顧の禮に應じて、執政就任を諾され、九日長春(新京)に於て建國式典及執政就任の大典は舉行され、愈々新滿洲國の成立を見るに至つた。其後執政は、皇帝の位に登り、王道樂土の全滿洲國に君臨せられ、茲に我國と共防共榮、同心一體の獨立國家として存在を見るに至つた。

七年四月十九日、午前七時、瀧川工場内東南隅の各種信號彈半成品置場が、大音響と共に爆發し、同時に十數間の火柱は煉瓦の破片、木片などを附近一町四方へ飛ばし、一時廠内外を戦慄させた。幸ひ廠内消防夫の敏速果敢なる動作と、宿直員の敏速なる指揮により、間もなく鎮火せしめたが、自宅にあつた僕は、早速に現場に駆けつけ、其指揮にあつた。本件發生の爲め、輕傷者數名、被害家屋數十戸を出したるは誠に遺憾とする處であつたが、瀧川町長以下の誠意ある援助を受け圓滿解決に至つたことを感謝する。

僕等は此頃より一段と心身を勞し、多少健康を害した如く思はれた。加ふるに四月二十七日靖國神社臨時大祭に、勅任總代として、夜中の儀式に參列し、著しく寒さを覺えた如き、引續き二十八日は已むなき知人の招宴に列し、頻りと居眠りを催した如き、更に二十九日は正裝着用で、觀兵式を陪觀し目を量ました如き、何れも連日連夜の疲勞に基く一種の豫感だつた。

斯くの如くにして遂に、天長節の正午、宮中東溜間に於て、西山技師等と談話中、突然に手の觸覺を失ひ、舌のもつれを來たし、輕微なる腦溢血に罹つた。然し尙も宮中の御宴をすませ、靜かに自動車で歸つたが、之が爲め僕は看護婦までつけて、二ヶ月間引續き引籠り療養することになつた。此時植林軍醫正と、矢野元利醫師及田邊左門醫師の熱心なる手當を受け、専心靜養に努めた結果、幸ひ順調に恢復し、七月一日より再び出務した。然し調子は元の如くならず、醫師は將來の萬全を期し頻りと閑居を勧めた。長官からは屢々軍醫を以て見舞を受け、僕又大に考ふる處があつた。

五月十七日、陸軍軍需審議會令公布され、僕は同會議々員を仰付られた。

八月八日に勅令改正され、陸軍科學研究所の第三部たる火藥爆藥の研究機關は、之を火工廠に合併することになつた。之が爲め火工廠には別に、研究課を設置し火藥の研究機關を合併統一した。

八年二月工廠長會議に出席し、三月課所長會議を召集し、終つて大塚大佐同伴忠海、新居濱に出張し、普通の如く業務についたが、大なる疲勞もなく歸廠するを得た。

三月十八日、陸軍異動の發表と同時に僕は待命仰付られ、茲に陸軍を退くべく、最後の幕は閉ざされた。

僕は退職に際し左の挨拶を述べた。

挨拶の要旨

不肖、今般本職を免じ、待命仰付られたるに就きましては、長年に互る御懇情と、御後援を感謝致します。將來は、在郷軍人として微力を盡す考へでありますから、宜敷御指導御鞭撻を御願致します。時局多端、業務繁忙の折柄、軍職を退き、閑地に就くことは、一面に於て心苦しくも考へられますが、顧みまするに、私は明治三十三年、砲兵少尉任官より、正に三十三年になります。其間日露戰爭には、大隊副官及中隊長として出征し、旅順及奉天の大戦に参加し、次で青島戰、西比利亞出兵事件、濟南事變を初め、今回の滿洲事變、上海事件にも、内地勤務として國軍兵器の補給業務に參與し、微力ながら奉公の誠を盡すを得ました事は、已に軍人として身に餘る光榮でありまして、此上老軀に鞭つて御奉公申上ぐるも、考へようによりましては、愆過ぎるかとも思はれ、私として今回の退職は晩年を飾る難有い恩命だと思つて居ります。

私は陸軍生活、三十三年の中、其二十七年は實に我造兵廠の勤務でありまして、然も其中約二十年は、此火工廠に關係しましたので、火工廠は我家の様に考へられるのであります。造兵廠に於ける